

博士論文

中間構文の形式と意味  
—分散形態論的視点—\*

柘植 美波\*\*

金城学院大学大学院  
文学研究科  
博士課程後期課程  
英文学専攻

2021年3月

---

\*The Forms and Meanings of Middle Constructions:  
A Distributed Morphological Perspective

\*\*TSUGE Minami

課程博士号申請論文

中間構文の形式と意味  
—分散形態論的視点—

柘植 美波

学位審査委員会：

主査

森田 順也

副査

高野 祐二

副査

中川 美和

金城学院大学大学院

文学研究科

2021年3月

## 目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 第1章 序論.....                   | 1  |
| 第2章 先行分析.....                 | 4  |
| 2.1 意味的特性.....                | 4  |
| 2.1.1 主語の固有の属性.....           | 4  |
| 2.1.2 総称性.....                | 5  |
| 2.1.3 副詞（修飾）表現.....           | 7  |
| 2.1.3.1 中間構文の副詞の役割.....       | 7  |
| 2.1.3.2 中間構文で許される副詞のタイプ.....  | 8  |
| 2.1.3.3 中間構文で許されない副詞のタイプ..... | 9  |
| 2.1.3.4 副詞的役目を果たす統語表現.....    | 10 |
| 2.1.4 中間動詞の意味的制限.....         | 11 |
| 2.1.4.1 相に関する動詞類.....         | 11 |
| 2.1.4.2 動詞の語彙概念構造.....        | 14 |
| 2.1.4.3 主語名詞の特質構造と動詞の関連性..... | 17 |
| 2.1.4.4 動詞の意味分類と中間動詞の可能性..... | 19 |
| 2.1.5 潜在的動作主.....             | 23 |
| 2.1.6 被影響性.....               | 26 |
| 2.1.7 まとめ.....                | 29 |
| 2.2 統語的特性.....                | 32 |
| 2.2.1 中間動詞の主語と論理的目的語.....     | 32 |
| 2.2.2 前置詞残留と S 削除.....        | 33 |
| 2.2.3 副詞との共起.....             | 35 |
| 2.2.4 動作主に関する統語的特性.....       | 35 |
| 2.2.5 中間動詞に関わる形態素.....        | 40 |
| 2.2.6 まとめ.....                | 41 |
| 2.3 形態的・語彙的特性.....            | 42 |
| 2.3.1 中間構文由来の複合語の不可.....      | 42 |
| 2.3.2 中間構文由来の複合語の可能性.....     | 43 |
| 2.3.3 まとめ.....                | 44 |
| 2.4 機能的・語用論的特性.....           | 44 |
| 2.4.1 中間構文が用いられる場面と言語.....    | 44 |
| 2.4.2 価値ある情報提供の必要性.....       | 45 |

|            |                                  |           |
|------------|----------------------------------|-----------|
| 2.4.3      | 修飾語の必要性と目的節の付加.....              | 46        |
| 2.4.4      | まとめ.....                         | 48        |
| 2.5        | 特殊な中間構文.....                     | 48        |
| 2.5.1      | 擬似中間構文.....                      | 48        |
| 2.5.2      | 再帰中間構文.....                      | 49        |
| 2.5.3      | まとめ.....                         | 50        |
| 2.6        | 中間構文の派生.....                     | 50        |
| 2.6.1      | 統語的アプローチ.....                    | 50        |
| 2.6.2      | 語彙的アプローチ.....                    | 53        |
| 2.6.3      | 語彙意味論的アプローチ.....                 | 55        |
| 2.6.3.1    | Grimshaw (1990) による中間動詞の項構造..... | 55        |
| 2.6.3.2    | Kageyama (2006).....             | 56        |
| 2.6.3.3    | Randall (2010).....              | 57        |
| 2.6.3.4    | Oshita (1994).....               | 58        |
| 2.6.4      | まとめ.....                         | 60        |
| 2.7        | 日本語の中間構文.....                    | 60        |
| 2.7.1      | 特性.....                          | 60        |
| 2.7.2      | 派生方法.....                        | 63        |
| 2.7.3      | まとめ.....                         | 65        |
| 2.8        | まとめ.....                         | 65        |
| <b>第3章</b> | <b>検証.....</b>                   | <b>67</b> |
| 3.1        | 事實的側面.....                       | 67        |
| 3.1.1      | 意味的特性.....                       | 67        |
| 3.1.1.1    | 主語名詞.....                        | 67        |
| 3.1.1.2    | 総称性と状態性.....                     | 69        |
| 3.1.1.3    | 副詞表現の制限.....                     | 71        |
| 3.1.1.4    | 中間動詞の制限.....                     | 78        |
| 3.1.1.5    | 潜在的動作主.....                      | 88        |
| 3.1.1.6    | まとめ.....                         | 89        |
| 3.1.2      | 統語的特性.....                       | 90        |
| 3.1.3      | 語彙的特性.....                       | 90        |
| 3.2        | 理論的側面.....                       | 93        |
| 3.2.1      | 統語的アプローチ.....                    | 93        |
| 3.2.2      | 語彙的アプローチ.....                    | 95        |

|                              |            |
|------------------------------|------------|
| 3.2.3 意味的アプローチ.....          | 96         |
| 3.2.4 形態的アプローチ.....          | 98         |
| 3.3 まとめ.....                 | 100        |
| <b>第4章 提案.....</b>           | <b>101</b> |
| 4.1 分散形態論.....               | 101        |
| 4.2 中間構文とその関連表現の生成メカニズム..... | 102        |
| 4.2.1 英語の中間構文の派生.....        | 102        |
| 4.2.2 英語の中間複合語の形成.....       | 109        |
| 4.2.3 日本語の中間構文の派生.....       | 117        |
| 4.3 まとめ.....                 | 121        |
| <b>第5章 結論.....</b>           | <b>122</b> |
| <b>参考文献.....</b>             | <b>124</b> |
| <b>謝辞.....</b>               | <b>127</b> |

## 第1章 序論

英語の主要構文とされている表現には、受動文や関係節、不定詞節など数多くある。(1) のような構文もその内の1つであると言われている。

- (1) a. The book sells well. (Jespersen (1949: 347))  
b. That article reads easily. (Randall (2010: 47))  
c. This fabric launders nicely. (Fagan (1992: 65))

通常、主語名詞として現れるのは、行為を行う動作主 (agent) という意味役割 (theta role,  $\theta$ -role) を持つ名詞であるが、(1) の文は全て、動作を受ける対象、つまり、他動詞の意味上の目的語が主語として現れている。対象物を表す名詞が主語位置に置かれる際に、動詞は「be 動詞+過去分詞」というように受動形にするという規則を学校文法で習うが、(1) の文の動詞に着目すると、全て能動態である。それに加え、動詞の形式は能動態であるにもかかわらず、(1a) は「その本はよく売れる」、(1b) は「あの記事は簡単に読める」、(1c) は「この布地は綺麗に洗濯できる」という解釈を持ち、受動態のような性質を持つ。(1) のような構文は、中間構文 (middle construction) と呼ばれる。当該構文の形式に着目すると、表面上では1つの項 (argument) を取り、自動詞用法であるという点で (2) のような能格構文 (ergative construction) と類似している。加えて、意味に着目すると、(1a) は「その本はよく売られる」、(1b) は「あの記事は簡単に読まれる」、(1c) は「この布地は綺麗に洗濯されることができる」というように解釈できるため、(3) のような受動構文 (passive construction) と類似している。

- (2) The cup broke.  
(3) The man has been shot. (García de la Maza (2011: 161))

このように、(1) のような表現は、能格構文と受動構文の中間の性質を持つということから、中間構文と呼ばれる (松瀬・今泉 (2001:185))。従来の研究の中には、当該構文を能動受動態 (activo-passives) あるいは被動者構文 (patient-subject construction) と呼ぶものもある。上述の(1)-(3)の構文は、構造上よく似ているため、比較されることが多い。

中間構文は、日本の英語教育の現場ではほとんど教えられず、受動文などのような表現ほど頻繁に目にすることはないが、広告文や商品の説明書などで多く用いられている。英語学研究においては、従来、主に統語論・意味論の理論研究で取り上げられてきた。中間構文の基本形式として3つ挙げられる。第一に、主語が主題 (theme) または被動者 (patient) を表す名詞であるということ、第二に総称的な文を表すということ、第三に副詞 (修飾) 表現と共に起するということが挙げられる。さらに、派生方法についてはどの部門で行われるのか、ということが先行研究の中では長年に渡って議論されてきた。とりわけ当該構文の生成メカニ

ズムについては、統語論あるいは意味論で行われるというように研究者の間でも意見が分かれ、筆者が知る限りでは、はっきりと明らかにされていないように思われる。

また上述のとおり、日本の英語教育では中間構文について取り上げられることはめったにないため、日本人にとってはあまり馴染みのない構文の一種である。しかしながら、そのような私たち日本人にとっても「ベストセラー作品」や「ベストセラー作家」というような言葉はよく目にすると思われる。この「ベストセラー (best-seller)」という語の基底文は、(1)のような中間構文であり、動詞 *sell* と副詞 *well* を使って派生されたものである。このように考えると、中間複合語は身近で見られることに気づく。しかしながら、従来の先行研究では、英語の中間構文から *best-selling* や *best-seller* のような複合語 (compound) が派生されることはできないと仮定しているものもあれば、意味が特殊化した場合は語彙化プロセスを受け、形成されることができると論じているものも見られる。そのような複合語の形成はできると主張されている研究があるにもかかわらず、当該複合語の派生メカニズムについては、従来の研究では明かされていない。

中間構文は、英語だけでなくフランス語やイタリア語でも存在する。先行研究の中には、英語とフランス語あるいはイタリア語というように、異言語間の比較研究が行われることもある。実際、日本語にも英語の中間構文に相当するものがあると考えられ、それは、日本語の可能文あるいは自発文である。例えば (4) のような文が該当する。

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| (4) a. その答えが/は簡単にわかる。 | (Taguchi (2007: 246)) |
| b. この本は簡単に翻訳できる。      | (松瀬・今泉 (2001:208))    |
| c. この茶碗はすぐ割れる。        | (松瀬・今泉 (2001:208))    |

しかし、筆者が知る限りでは、英語と日本語の中間構文の比較に関する研究はあまり見られない。

以上のように、従来の中間構文あるいは関連表現に関する研究の状況を調査すると、長年取り組まれてきた研究対象の構文ではあるものの、その特性や派生メカニズムについて明かされていないことが多くある。

本稿の目的は、先行研究及び事実観察を通して、中間構文の特性を明らかにした後で、英語の中間構文とその由来複合語、及び日本語の中間構文を統一的に捉える派生メカニズムを明らかにすることにある。当該構文の特性については、とりわけ形式と意味に焦点を当てる。本稿の構成は以下の通りである。第2章では、中間構文の特性や派生方法を中心に、一連の先行分析を概観する。英語の中間構文を焦点にし、特性においては、意味的、統語的、語彙的、機能的・語用論的側面という4つに分けて記述的に概観する。派生方法については、統語・語彙・語彙意味論の側面から考えられている方法を取り上げる。そして、英語の中間構文由来の複合語および日本語の中間構文に関する先行研究についても紹介する。なお本稿で

は、共時的に、つまり現代英語の中間構文に焦点を当てて述べていく。第3章では、前章の先行分析で紹介した、英語の中間構文の特性や派生メカニズムにおける分析が正しいかどうかを、事実観察を通して検証していく。具体的には、**British National Corpus (BNC)** と呼ばれる1億語の大規模コーパスや英語母語話者によるインフォーマント調査で収集した例文を用いて、先行分析で明らかにされた中間構文の特性及び理論的派生方法について、支持できる点と問題点を挙げていく。第4章では、第3章で明らかにした当該構文の特性を説明し、提示された派生メカニズムの問題点を解消できるような中間構文の生成方法を提案していく。具体的には、分散形態論 (**Distributed Morphology**) と呼ばれる枠組みを用いて、中間構文とその由来の複合語、及び日本語の中間構文の派生メカニズムを提示する。第5章では、結論を述べる。



## 第2章 先行分析

本章では、中間構文の先行分析を紹介していく。まずは中間構文の典型的なタイプの特性について意味的、統語的、形態的・語彙的、機能的・語用論的に4つに分けて記述的に紹介する。2.1節で意味的特性、2.2節で統語的特性、2.3節で形態的・語彙的特性、2.4節で機能的・語用論的特性を分析する。2.5節では特殊な中間構文のタイプを紹介する。2.6節では中間構文の派生方法について統語・語彙・語彙意味論のアプローチから概観する。2.7節では日本語の中間構文について英語と比較しながら説明し、2.8節では本稿で取り上げた先行分析のポイントをまとめ、中間構文に必要な定義を示す。

### 2.1 意味的特性

中間構文について意味的側面に着目すると、多くの制限が見られる。2.1節では中間構文に関する6つの主要な意味的特性について概観する。まず2.1.1節で主語の固有の属性について説明し、2.1.2節で当該構文が総称的な文であることについて取り上げ、2.1.3節では当該構文に見られる副詞または修飾表現について概観する。2.1.4節では中間構文に関与できる動詞と関与できない動詞に関する記述的分析を紹介し、2.1.5節では当該構文に含まれる潜在的動作主に関する先行分析を紹介し、2.1.6節では被影響性という意味的特性について概観する。最後に2.1.7節では、2.1節で見えてきた一連の先行研究のポイントをまとめる。

#### 2.1.1 主語の固有の属性

中間構文の意味の特異性としてよく紹介されているのが、主語の固有の属性である。これは、主語の表す特性が動詞の表す行為の実現に責任を負うということであり、García de la Maza (2011: 161) はこれを主語の特性の読み (property reading) として説明している。例えば、(1) のような文が見られる。

(1) Love stories read easily.

(García de la Maza (2011: 162))

(1) は「読みやすさの責任を負うのは、主語 Love stories の何らかの特徴である」ということを表している。Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) によると、英語の中間構文には特性の解釈が必ずあり、主題を表す主語の固有の特性が読み取れる。特性とは、永続的な性質を表す<sup>1)</sup>。中間構文は出来事 (event) を示すためではなく、ある物の特別な特徴を示すために使われると Fagan (1988: 201) は論じる。これは重要な特性だとされ、Fellbaum (1985: 28), Jespersen (1949:

<sup>1)</sup> 特性の解釈については、「主題の固有の特性」を示す property と「主題に外的に影響を与える」という event の2つに分かれる (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 22))。例えば、“This doll walks.” という文を考えると、「この人形は歩ける」という特性の解釈と「この人形は歩いている最中である」という出来事の解釈に分けられる。event が特性の中にも含まれることもあるが、英語の中間構文については必ず特性の解釈を受けなければならない。

351), 萱原 (2006: 75) も取り上げている<sup>2)</sup>。Fellbaum(1985: 29) は中間構文において焦点が置かれるのは、主語の特性であると主張する。当該構文の主語が表すものが、どのような特性を持つのかという解釈が得られることが、中間構文の1つの重要な基準であると認識されている。

### 2.1.2 総称性

中間構文は一般に総称的な文 (generic sentence) のみで使われ、特定の事象 (event) を示せない。例えば、以下の文を比較する。

(2) a. Bureaucrats bribe easily.

b. <sup>?</sup>Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.

(Keyser and Roeper (1984: 384))

(2a) は単純現在形で示され、適格な中間構文となるが、一方 (2b) のように過去形で示され、「昨日、市長は賄賂を受けやすかった」というように出来事を表す場合は、容認度が下がる。この総称性は中間構文の重要な意味的特性と考えられ、Keyser and Roeper (1984: 384) や Fellbaum (1985), Fagan (1988: 201), 萱原 (2006: 79), Kaga (2007: 193) など多くの先行文献で紹介されている。

Keyser and Roeper (1984) によると、特定の事象ではなく総称性を示すという中間構文の特徴を支持するような証拠が3つある。その証拠については (3a) の中間構文と (3b) の能格構文 (ergative constructions) を用い、両構文を比較しながら以下で紹介していく。

(3) a. Chickens kill easily.

(Keyser and Roeper (1984: 384))

b. The boat sank.

(Keyser and Roeper (1984: 385))

第一に、中間構文に関与できる動詞 (以下、中間動詞) は命令文や呼びかけ文で起こることができない。(4a) で示されるように中間動詞は命令形で使われることができないが、(4b) のように能格構文に関与できる動詞 (以下、能格動詞) については命令形が可能となる。

(4) a. \*Kill, chicken!

b. Sink, boat!

(Keyser and Roeper (1984: 383))

第二に、中間動詞は進行形になれないが、能格動詞は進行形になれる。Keyser and Roeper

---

<sup>2)</sup> 萱原 (2006: 79) の通時的分析によると、中間構文は古英語時代 (Old English, OE) から近代英語時代 (Modern English) までの全時代に及んで見られる。

(1984) によると、中間動詞は状態動詞 (stative verb) であるため、進行形の文で現れない。

(5) a. \*Chickens are killing.

b. The boat is sinking.

(Keyser and Roeper (1984: 385))

第三の証拠として、小節 (small clause) に関する事例がある。(6a) で示されるように、通常、知覚動詞の後ろの小節は特定の事象でなければならない<sup>3)</sup>。ところが (6b) のように、中間動詞に基づいた小節は、知覚動詞の補部として現れることができない。

(6) a. I saw [Mary leave].

b. \*I saw [bureaucrats bribe easily].

(Keyser and Roeper (1984: 386))

上述の3つの現象は、中間構文が特定の事象を示せず、総称性を表すという特徴を支持する。

しかしながら、中間構文は進行形で現れることができないと述べる Keyser and Roeper (1984) に対し、当該構文は (7) のように進行形の文で表されることもあると Fagan (1988: 182) は分析している。

(7) This manuscript is reading better every day.

(Fagan (1988: 182))

一見、(7) は事象を表しているようであるが、これは特定の事象ではなく、誰が実施してもその事象が起り続けるという恒常的な状態を表している。「誰でも (people in general)」という表現が総称的な意味を持たせ、時制が現在形でない場合も、そのような解釈が総称性の条件を満たす。(8) の中間動詞 translated は過去形であり、(7) と同様に、一見、事象を表しているように見える。

(8) I thought that this book was going to be really difficult to translate, but it wasn't. It translated really easily.

(García de la Maza (2011: 169))

García de la Maza (2011) によると、(8) は「翻訳が行われた」という事象よりもむしろ「翻訳を容易にした本の性質」というように主語名詞の特性に焦点が置かれる。これは 2.1.1 節の主語の固有の特性にも当てはまり、非事象性である。従って、動詞の時制が現在形でない場合も、事象でなく主語の特性を示す文であれば中間構文に該当する<sup>4)</sup>。

<sup>3)</sup> (6) の小節として示した角括弧は、筆者が加筆したものである。

<sup>4)</sup> 萱原 (2006: 75) の通時的分析によると、中間構文の動詞の時制については比較的幅がある。歴史上中間構文として最も早く生起している時制は、単純現在形である。単純過去形も進行形も古英語時代

以上をまとめると、中間構文は主語の固有の属性に加えて、総称性が必要とされる。基本形式は現在形で表されているような総称的な文であるが、時制については必ずしも現在形であるとは限らない。

### 2.1.3 副詞（修飾）表現

中間構文の主要な特徴として、副詞が含まれるということが多くの先行文献で紹介されている。能格構文と比較する際、副詞表現の有無が主な判断基準となり、副詞表現が含まれる場合は中間構文であるとされる。この副詞に関しても意味的制限があり、当該構文で許される副詞のタイプと許されないタイプがある。本節では Fellbaum (1985) の分析を中心に、この副詞に関する機能的及び意味的特性を4点見ていく<sup>5)</sup>。以下、中間構文の副詞の役割 (§2.1.3.1)、中間構文で許される副詞のタイプ (§2.1.3.2)、当該構文で許されない副詞のタイプ (§2.1.3.3)、副詞的役目を果たす統語表現 (§2.1.3.4) を順次概観していく。

#### 2.1.3.1 中間構文の副詞の役割

中間構文には通常、副詞が存在する。一方で、ある限られた状況で副詞は省略できる。例えば (9) のコントラストを考える。

- (9) a. This magazine sells. (Fellbaum (1985:23))  
b. \*This magazine reads. (Fellbaum (1985: 22))

(9) の文は双方とも副詞が現れていない中間構文である。(9a) は「この雑誌は売れる」という雑誌の属性を伝えるための有益な情報を述べている。雑誌にとって売れやすさ (sellability) は固有のものではないため、(9a) は副詞が現れなくても容認可能な文となる。一方、(9b) は「この雑誌は読める」という解釈の文であるが、主語の雑誌に関する属性を伝えるための有益な情報が提供されていない。雑誌とは当然読まれるものであり、読みやすさ (readability) と雑誌は固有の関係にある。このように主語と述語の意味関係が固有である場合、どのように読めるのかという有益な情報が必要である。従って、(9b) の中間構文は副詞が存在しないため非文法的な文となる。中間構文では副詞が存在するという特徴が頻繁に述べられているが、Fellbaum (1985) は上述のように副詞が欠如しているタイプもあると論じている。この特徴を説明しているその他の文献としては、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 10) や萱原 (2006: 75) がある<sup>6)</sup>。

---

や初期近代英語時代 (Early Modern English) では比較的まれだったが、15 世紀に一般化され、それ以降、存在する。どの時制の場合も、主語の特性を示す文であれば、総称的な文と考えられる。

<sup>5)</sup> Fellbaum (1985) は中間構文を patient-subject construction (PSC) として紹介している。

<sup>6)</sup> 萱原 (2006: 79) の通時的分析によると、副詞が省略される場合の文は 19 世紀までのデータに存在しないことから、20 世紀以降に発展した比較的新しい形式であるとされる。

Fellbaum (1985) は中間構文に用いられる副詞の分析を通し、中間構文において焦点が置かれるのは被動者の特性であると主張している。中間構文には通常、副詞が存在すると言われているが、副詞が現れなくても良いものもある。中間構文の副詞は主語の特性を示すという役割を持つため、当該構文では必要とされている。この特徴は、2.1.1 節の主語の固有の属性と関連がある。副詞が現れない当該構文については、2.1.3.4 節で議論する。

### 2.1.3.2 中間構文で許される副詞のタイプ

中間構文の副詞に関する意味制限として、当該構文に現れる副詞と現れない副詞があるということが挙げられている。Fellbaum (1985) は Vendler (1984) の副詞の分類に従い、4 つのタイプの副詞について紹介し、どのようなタイプの副詞が中間構文に使われるのか、あるいは使われないのかということ进行分析している。Vendler (1984) によると、副詞とは行動や実行の様子、行動から起こる出来事を修飾するものである。

まず、中間構文に用いられる副詞として、容易を表す副詞 (“facility” adverb) が挙げられている。このタイプの副詞は、ある行動がどのように行われるのかを述べ、主な例として中間構文で頻繁に現れる *easily* がある。

(10) a. These chairs fold up easily/quickly/in a jiffy.

b. \*These chairs fold up clumsily/competently.

(Fellbaum (1985: 24))

(10a) については *easily* が用いられた場合、「畳みやすいのは椅子の性質である」ということを含意し、特定の特質の原因が動作主でなく、主題あるいは被動者の椅子にあるとしている。(10a) で挙げられた副詞が、動作主的能力や性質ではなく、どのようにしてその行動が成し遂げられるのかを示すため、文法的に正しい。一方、(10b) の副詞 *clumsily* と *competently* は椅子の性質ではなく動作主の行動の様態を表しているため、非文法的である。中間構文で用いられる副詞の多くは、(10a) のような副詞類に属する。(10a) で例証されている副詞の他にも、*with great difficulty*, *without problems* などの表現が容易さを表す副詞に分類される。このタイプの副詞は、中間構文で自由に許される。

中間構文と共起できる副詞のもう 1 つのタイプとして、事象に関連する副詞 (“event” adverb) がある。この副詞は、行為の間あるいは行為の結果として、被動者に起こったことを示し、被動者に焦点を置くものである。事象に関連する副詞が使われている中間構文は (11) のように例証されている。

(11) a. This dog food cuts and chews like meat.

b. This umbrella folds up in the pocket.

(Fellbaum (1985: 26))

(11a) では like meat が事象に関連する副詞句の例であり、この表現によって「犬の飼い主がそのドッグフードを切るとそのドッグフードは肉のようであり、また犬にとっても、そのドッグフードは肉と同様に噛むことができる」と解釈される。このような事象により、被動者を表す主語 this dog food は、「切ったり噛んだりすると肉のようである」という被動者の特性が示されている。同様に、(11b) の副詞句 in the pocket が存在することで、「誰かがポケットに傘を折りたためる」と表され、被動者を表す主語 this umbrella の特性が示されている。かくして、出来事に関連する副詞は、被動者の特性に焦点を当てながら、誰かがどのようにして行動を実行しているのかということを示し、中間構文で許される。

以上のように、容易を表す副詞、及びある種の事象に関連する副詞は中間構文で受け入れられる。このようなタイプは主語名詞の特性を表せるという意味特性があるため、当該構文で用いられる。

### 2. 1. 3. 3 中間構文で許されない副詞のタイプ

2.1.3.2 節で取り上げたように中間構文で許される副詞がある一方で、当該構文で許されない副詞として2つのタイプが挙げられている。1つ目は、精神状態を表す副詞 (“moral” adverb) である。この副詞は、行動している誰かに対して、自動的には抱けないような精神的な気持ちや考えを示し、例えば、accidentally, deliberately, intentionally などが該当する。

(12) a. \*The table folds out accidentally.

b. \*This paint sprays on intentionally.

(Fellbaum (1985: 26))

(12a) の場合、「テーブルが誤ってうっかりと開く」ということになり、テーブルを折りたたもうとする動作主の気持ちを表しているため、不適格な文となる。(12b) の場合についても、塗装する人がいると考え、その人を暗に修飾すると非文法的な文になる。このように、動作主指向の副詞が精神状態を表すタイプとして分類される。被動者を主語とする中間構文ではこのような副詞と共起できない。

中間構文で使われない副詞の2つ目のタイプは様態副詞 (manner adverbs) である。Vendler (1984) は “positing a certain trait in the agent” adverb として示している。これは副詞によって表現された性格が動作主に備わっていること、つまり、動作主の特性を表す。例えば、(13) が見られる。

(13) a. \*This dog food cuts and chews slowly.

b. \*This umbrella folds up skillfully.

(Fellbaum (1985: 27))

(13a) の副詞 slowly は動作主がどのように行動するのかを指定するものであり、(13b) の副

詞 *skillfully* は動作主の特性を表すものである。従って、様態副詞は被動者に重点を置いた中間構文とは意味が合わず、(13) のように受け入れられない。

中間構文で許されない副詞のタイプとして、精神状態及び様態を表すものが挙げられているが、この2つのタイプは動作主指向であり、主語の特性を重視した当該構文の意味的制約に合わない。以上のように、中間構文と共起できる副詞と共起できない副詞があるということが明らかにされている。この副詞の制限について、英語の中間構文は修飾語の範囲がより制限されている、と Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 10) は説明している。

#### 2. 1. 3. 4 副詞的役目を果たす統語表現

中間構文は、典型的に法性 (*modality*) または可能性 (*ability*) に関与すると考えられ、その法性が副詞的役目を果たすこともある。例えば、次のような文がある。

(14) a. Back-pac straps tuck neatly away.

b. Back-pac straps can be easily tucked away. (García de la Maza (2011: 169))

中間構文である (14a) を法助動詞の一種である *can* を使って言い換えると、(14b) のように文法的に正しい文となる。(14a) には、法助動詞 *can* が現れないが、動詞句の中に可能性を示す表現が含まれる。また、(14a) の副詞 *neatly* が現れることで、「リュックサックにきちんとしまい込むことができる」となり、(14b) で示される法助動詞 *can* が関与していると捉えられる。従って、中間構文は法性に関わるとされている。しかし、全ての中間構文が法性に関与しているとは限らない。その例は以下のとおりである。

(15) A: You didn't leave enough of a margin at the bottom of this page.

B: No, it just photocopied too low.

(16) <sup>?</sup>It could be photocopied too low. (García de la Maza (2011: 169))

(15) の B の文を、法助動詞を用いて言い換えた結果が (16) である。上述の (14) と違い、言い換えができず、周辺的なケースとなる。中間構文は副詞表現が含まれるものが典型的であるが、法性にも関与できる。法性に関する説明は García de la Maza (2011) の他に、Jespersen (1949: 351) や萱原 (2006: 75), Visser (1984: 153), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 8) で論じられ

---

<sup>?</sup> 安井 (1996: 445) によると、法性 (*modality*) とは *mode (= mood)* に由来する語であり、伝統文法においては法助動詞 (*modal auxiliary*)、法副詞 (*modal adverb*) などの文法形式またはその代用表現によって表される、文の内容に対する話し手の心的態度を示す用語として用いられてきた。心的態度とは、発話内容にどの程度の確実性・可能性・蓋然性・必然性などがあると話者が認めているかを言う。英語の法性は法助動詞を中心に研究されている。例えば、*can* は可能性、*must* は義務、*will/would* は蓋然性、*may* は許可、*should* は命令という意味を持つ。

ている。

次に、中間構文に修飾語の表現がない場合は、否定や対照の環境がその代わりになれると Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) は説明している。

(17) This shirt doesn't wash.

(18) a. Does this wall paint?

b. Yes, this wall paints.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 8))

(17) には副詞が存在しないが、否定語の *doesn't* が「洗えないシャツ」という主語の特性を表すために機能している。一方、(18) は「ペンキを塗れない壁がある」という前提でされた会話文である。ペンキを塗れる壁と塗れない壁というような肯定と否定の対照関係があるという前提で「ペンキを塗れない壁」という意味であれば、(18b) のような中間構文が成立する。かくして、否定や対照の環境が副詞類の代わりになれる。

以上のように、典型的な中間構文には副詞や修飾語が現れるが、必ずしもそのような表現があるとは限らず、含意される法性の表現が副詞的機能を果たす場合もある。加えて、副詞あるいは修飾表現が欠如している場合も、否定や対照の文脈があれば、そのような表現が副詞類の代わりとなり、主語名詞の特性を表すこともできる。

#### 2.1.4 中間動詞の意味的制限

英語の動詞の全てが中間構文を形成できるとは限らない。中間動詞になりうる動詞に意味的制限があるということが、多くの先行文献で議論されている。本節では英語の中間動詞に関する意味的制限に焦点を当てて、紹介していく。以下、相に関する動詞類 (§2.1.4.1) や語彙概念構造に基づく中間動詞 (§2.1.4.2)、主語名詞の特質構造と動詞の関連性 (§2.1.4.3)、動詞の意味分類と中間動詞の可能性 (§2.1.4.4) の分析を順次概観していく。

##### 2.1.4.1 相に関する動詞類

中間動詞について述べられる際に、動詞の相 (*aspect*) に関する分析が用いられることが多い。その分析は、動詞の相の特徴が中間構文で重要な役割を果たすというものであり、Vendler (1967) が示した英語の動詞の4分類の中で、どのタイプの動詞が当該構文に関与しやすいのかということが紹介されている。まずは、Vendler (1967) の動詞の4分類について以下で概観する。

相とは時間の概念に焦点を当て、完了相 (*telic*) と未完了相 (*atelic*) の2つに分かれる。完了相とは終結や到着点を持つものであるが、一方、未完了相とは終結や到着点を持たないも



のである<sup>8)</sup>。この時間の概念により、英語の動詞は活動動詞 (activity verb)、達成動詞 (accomplishment verb)、到達動詞 (achievement verb)、状態動詞 (state verb) の4つに分かれる。

1つ目の活動動詞は、未完了相に該当し、run, walk, pushなどが当てはまる。例えば、“She was running at time ( $t$ ).” の場合、時間  $t$  は「彼女が走っていた時間の中の全範囲」であり、限定的でない期間を示す。2つ目の達成動詞は完了相であり、draw, make, readなどが属する。例えば、“She was drawing a circle at  $t$ .” の場合、 $t$  は「彼女が円を描いたという時間の範囲」を示す。従って、この種の動詞は限定的な期間を示す。3つ目の到達動詞は完了相に当てはまり、限定的な瞬間を含む。この種の動詞として、die, recognize, winなどが挙げられる。“She won a race between  $t_1$  and  $t_2$ .” の場合、「彼女が  $t_1$  と  $t_2$  の間はレースに勝っていた」という或る時間の中の瞬間を表す。4つ目の状態動詞とは未完了相に該当し、限定的でない瞬間を示すものであり、have, know, loveなどが属する。例えば、“She loved somebody from  $t_1$  to  $t_2$ .” の場合、「彼女がその人を愛した」という  $t_1$  と  $t_2$  の間の全瞬間を示す。

英語には動詞が多く存在するが、上述の4分類の中で少なくとも1つのカテゴリーに属する。そのカテゴリーとは、該当の動詞を進行形にした場合、時間の概念に着目すると、どのような意味が含まれるのかという基準によって分けられる。上述の例より、活動動詞と達成動詞は進行形になれるが、到達動詞と状態動詞については一般に進行形になれない<sup>9)</sup>。

Vendler (1967) の動詞の4分類の中で、中間構文になれる動詞を特定している分析が幾つかある。Fagan (1992: 68) によると、活動動詞と達成動詞は適格な中間構文を形成できるが、到達動詞と状態動詞は同表現を形成できない。その例は (19) のとおりである。

- (19) a. The car drives easily.
- b. This book reads easily.
- c. \*A red-winged blackbird recognizes easily.
- d. \*The answer knows easily. (Fagan (1992: 68))

(19a) の drive のような活動動詞と (19b) の read のような達成動詞が関与する中間構文は適格となる。一方、(19c) の recognize のような到達動詞と (19d) の know のような状態動詞が関与する中間構文は不適格となる。ところが、Tenny (1987, 1994) は Fagan (1992) と異なり、達成動詞と到達動詞のみが中間構文に関与でき、活動動詞と状態動詞は同表現に関与できな

---

<sup>8)</sup> 完了相と未完了相を区別する方法としては次のようなものがある。例えば、動詞 run について考える場合、「“She was running.” が真ならば、“She ran.” も真である」と解釈できれば、当該述語は未完了相となる。一方、動詞 leave について同様に考えると、「“He was leaving.” が真であっても、必ずしも “He left.” が真ではない」となり、当該述語は完了相となる。

<sup>9)</sup> 到達動詞については進行形不可としているが、「～しかけている」という意味であれば進行形として現れることができる。加えて Vendler (1967) の動詞の分類については、進行形の他にも幾つかの基準がある。例えば “What happened?” という問いに答えられる動詞であるか、in an hour や for an hour という時を表す前置詞句と共起できるかというものがある。

いと主張している。加えて Roberts (1987) は、中間構文に関与できるのは達成動詞のみであると主張している。どの意見が正しいのかについては、ここでは論点にしないが、三者の意見で共通しているのは、達成動詞は中間構文を認可するということである。動詞の相の特徴により、当該構文に関与できるものとできないものがあるということが明らかにされている。

これに対して Kaga (2007) は、相の特徴を用いた分析について問題点が幾つかあると指摘している。1つ目は、達成動詞に分類される動詞の中には中間構文に関与できないものもあり、相の特徴を用いてそのコントラストを説明できないことである。例えば、以下のコントラストが該当する。

(20) a. This book sells well.

b. \*This book buys well.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 29))

(20) の動詞 *sell* と *buy* はどちらも達成動詞であるため、予測では双方とも中間構文を形成できる。ところが、動詞 *buy* は達成動詞に属するにも関わらず、(20b) で示されるように中間構文を形成できない。2つ目は、動詞の中にはどの相のタイプに属するのか決められないものもあるということである。例えば、動詞 *touch* は文脈によって4つのタイプに属するため、適格な中間構文を形成できるかどうか判断が難しい。

(21) a. The child is touching the breakable glassware.

b. Hannah touched all the buttons in the elevator to make them light up.

c. Just then he touched the buzzer.

d. The wainscoting touches the floorboard at a right angle all along the southern wall.

(Kaga (2007: 200))

(21a) は活動動詞, (21b) は達成動詞, (21c) は到達動詞, (21d) は状態動詞として用いられる。しかし、幾つかの先行文献では、動詞 *touch* は (22) のように中間構文不可と説明されている。

(22) \*That cat touches easily.

(Kaga (2007: 200))

動詞 *touch* は4つのタイプに属することができ、(22) の文はどの相のタイプに入るのかが不明であるため、(22) の非文法的な文となる理由について説明できない。従って、相に関する分析を用いて中間構文を認可できる動詞とできない動詞について、十分な説明ができない (Kaga (2007: 200-201))。

上述より、動詞の相の特徴の点から、中間構文に関与できるのは主に達成動詞であるが、

活動動詞や到達動詞も中間構文に関与できるとされている。一方で、動詞の中には相の観点では十分に説明できないものもあると指摘されている。

#### 2.1.4.2 動詞の語彙概念構造

2.1.4.1 節で述べたように、Vendler (1967) の 4 分類の動詞の中で中間動詞がどのタイプに当てはまるのかということが先行分析の中でも意見が分かれ、特定されていない。影山 (2004) の分析では、Vendler (1967) の分類は中間構文が成立するための必要な条件として重要ではないと述べられている。

影山 (2004) によると、従来の先行研究では、中間構文に適応する事象とは「達成のみである」あるいは「達成と活動の両方である」という 2 つの考えで議論されていた。ところが、(23) のような例が見られる。

(23) a. \*Elephants don't kick easily.

b. Elephants don't kick unconscious easily. (影山 (2004: 120))

(23a) の動詞 kick は働きかけの動詞であり、中間構文に適応する活動動詞に分類されるが、中間構文になれないため、活動動詞が中間構文に適応するという分析の反例になる。しかしながら (23b) のように、結果述語を補えば達成動詞となり、中間構文が成立する<sup>10)</sup>。この事実より、達成動詞のみが中間構文になるという主張が優れているように見えるが、仮にその考えを採用すると (24) のような例について説明がつかなくなる。

(24) This piano plays easily. (影山 (2004: 119))

(24) は活動を示すため、中間構文に適応する事象を達成に絞ることができない。

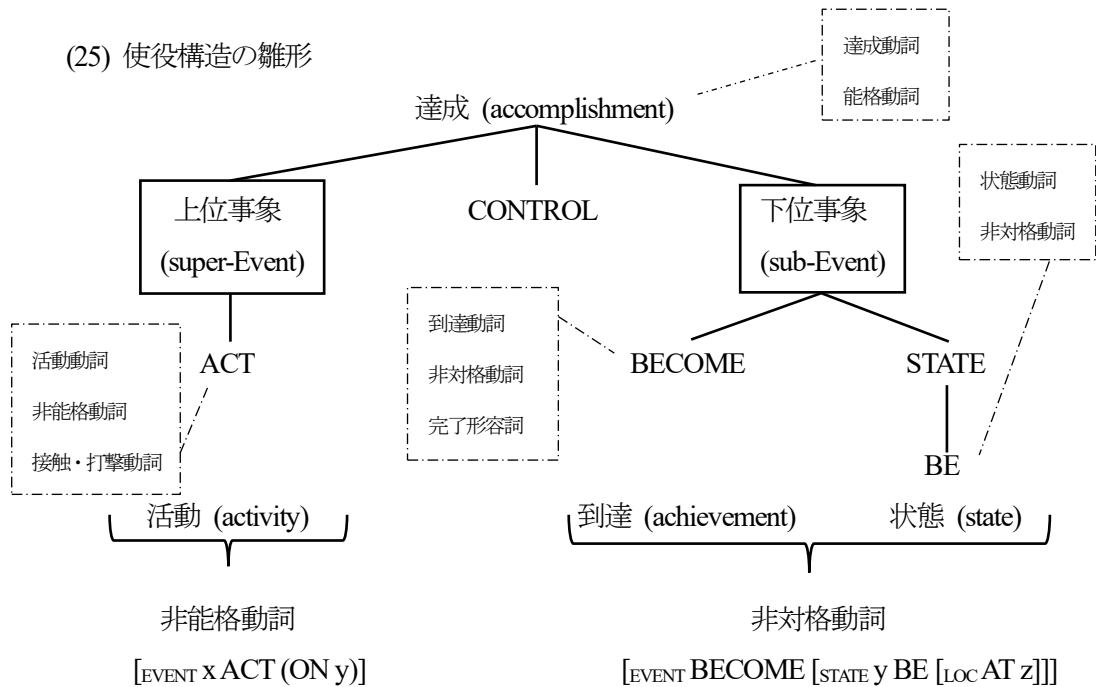
影山 (2004) は Vendler (1967) の動詞分類の問題点を挙げ、中間構文の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, 以下 LCS) を見直し、同表現が成立する条件を再考している。ここで LCS について紹介していく。LCS とは、概念構造 (Conceptual Structure) とも呼ばれ、「動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造」(影山 (1998: 47)) であり、基本的には意味構造のことである。意味構造の中には、統語で現れない架空の動詞が存在するが、これは意味述語と呼ばれる。影山 (1998) は Vendler (1967) の 4 種類の動詞を意味構造で表している。状態は静止状態と静止位置を表す意味述語 BE で表され、到達は位置変化や

---

<sup>10)</sup> 結果述語 (resultative predicates) とは、結果構文 (resultative constructions) に現れる要素であり、「動詞が示す行為の結果、その目的語がどのように変わったのかという状態」を叙述する。例えば、(i) は「John がドアを蹴ったため、そのドアが開いた」という意味を持つ。

(i) John kicked the door open. (影山 (1998: 254))

状態変化を表す BECOME, 活動動詞は継続活動を表す ACT または ACTON, そして達成は CONTROL を使って表されている。加えて影山 (1998) は, その意味構造を用いて, 動詞の LCS の基本スキーマを (25) のように設定し, 項構造への連結について分析している。(25) は影山 (1998:90) が記載した構造図を引用したものであるが, 動詞の例や図の下にある意味構造については, 影山の分析を基に筆者が加筆し, まとめたものである。



(25) の上位事象とは使役事象のことであり, 使役作用となる活動を表す。一方, 下位事象は結果事象を表し, 上位事象で示された使役作用を受け, 何らかの状態変化がもたらされるという結果を示す。(25) の右側に示されるように, 下位事象に当てはまるのは状態動詞や到達動詞である。これは人間や外的原因が関与しない自然発生的な出来事または状態を表すため, 非対格構造に対応する<sup>11)</sup>。(25) の左側にある上位事象には活動動詞が入る。これは意図的な活動を表し, 多くの場合, 動作主によって実行されるため, 非能格構造に該当する<sup>12)</sup>。

<sup>11)</sup> 非対格動詞 (unaccusative verbs) とは自動詞の 1 種であり, (i) の occur はその一例である。

(i) An accident occurred. (影山 (1998:19))

(i) の基底構造は [S [NP1 ] [VP [v occurred] [NP2 an accident]]] であり, [NP1 ] の位置, つまり主語位置が空いているという点が特徴である。従って, 非対格動詞は内項のみを持つ動詞である。

<sup>12)</sup> 非能格動詞 (unergative verbs) は (i) で示されるように自動詞の 1 種であり, 非対格動詞と対比関係にある。

(i) She talked. (影山 (1998:19))

動詞 talked の後ろは, 目的語に相当する名詞句が続かない。従って, 非能格動詞は外項のみを持つ動詞である。

最後に、達成動詞は上位事象と下位事象を組み合わせたもので、使役構造となる。従って、達成動詞の意味構造は非能格構造と非対格構造を CONTROL で繋げた構造となり、[EVENT X ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE [Loc AT z]]] と表示される。達成動詞の他にも、能格構文になれる動詞、つまり、能格動詞がこの種の構造を持つ。構造にある CONTROL は使役というよりも、主語がその本来的な性質のために、状態変化に「責任」を持っていることを表す (影山 (1998:144))。能格構文では (26) のように、外的な力を表す副詞表現と共起できる。

(26) The door opened because of a high wind. (影山 (1998: 145))

(26) の because of a high wind のような表現は付加詞であるため、意味構造では CONTROL を補助する修飾語として捉えられる。自動詞用法である能格構文において、その主語名詞が対象物であると同時に使役主でもあるという考え方を形式化すると、能格動詞の意味構造は [x=y CONTROL [y BECOME [y BE [Loc AT z]]]] となる。この構造にある x=y は、使役主 (x) が変化対象 (y) と同定されることを表し、この操作は反使役化 (anti-causativization) と呼ばれる。(25) で示されるように、動詞構文の中には上位事象のみで形成されるものもあれば、下位事象のみで形成されるもの、そして上位事象と下位事象の両方を必要とする構文もある。影山 (1998) は以上の LCS の基本形を設定し、このスキーマを用いて様々な動詞構文を分析している。

(23b) の文のように結果述語を補うと、受け入れ可能な中間構文となる。この考察より、中間構文が可能になるのは (27) のような意味構造で、上位事象から下位事象に作用の連鎖が繋がる時と考えられる (影山 (1998:277))。

(27) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]] (影山 (1998:277))

(27) は、「行為者 (x) が対象物 (y) に働きかけることにより、対象物が z の状態に変化する」ということを表している。かくして、動詞の意味構造に、その行為によってその対象物がどのように変化するのかということが含まれれば、その構造を持つ動詞が中間構文を認可できる。影山 (1998) は明確に述べていないが、(27) のように上位事象と下位事象の組み合わせによって成り立っているため、中間構文は達成動詞の意味構造を持つと考えられる。

ここで、(27) の語彙概念構造を用いて、前述の動詞 play が関与する (24) の文を考える。この動詞は「中間構文に適応するのは活動と達成である」という Fagan (1992: 68) の説明に合わないものである。(24) の動詞 play は「単純な活動ではなく、移動 (MOVE) を含む複雑な事象を構成する」と考えられ、(28) のような LCS を持つ。

(28) play the piano

[ x ACT ON-the piano] CAUSE [[MUSIC] MOVE [OUT-OF the piano]]

(影山 (2004: 121))

主語の行為が目的語の移動に関わっているということから、LCSは(28)で示されるように、主語の行為を表す上位事象、並びにその行為に伴う移動または状態を表す下位事象の2つの事象から成る。(28)は「ピアノを弾く (ACT-ON) という行為によってピアノから楽音が流れ出る」(影山 (2004: 121)) ということを表す。これより、動詞 *play* は単純な活動動詞でなく、意味構造では移動あるいは状態を表す要素を含む複雑な事象を構成すると考えられ、中間構文に必要な上位事象と下位事象の組み合わせが見られる。従って、中間構文に関与できる動詞の語彙概念構造は、“X CAUSE Y” という様式である。(27) と (28) より、下位事象 Y は「行為者の働きかけの結果による変化」だけでなく、「移動」と「状態」も当てはまる。

中間構文の意味構造に必要な上位事象 X には、*people, in general* という「潜在的動作主 (implicit agent)」が入るとされていたが、「潜在的原因」が適切だと説明されている(影山 (2004: 122))。なぜならば、(29) のように心理動詞の中間構文には必ずしも意図的な動作主を必要としないからである。

(29) If you have a young child who frightens easily, ...

(影山 (2004: 122))

中間構文が成立するためには、その動詞が「行為者が対象物へ働きかけることによって、その対象物がどのような状態に変わるのか」ということが示されるような“X CAUSE Y” という様式の LCS を持つことである。その LCS によると、変化だけでなく、移動や状態を表す下位事象が必要となる。動詞の LCS に示される情報によって中間構文が成立する。

2. 1. 4. 3 主語名詞の特質構造と動詞の関連性

中間構文に関する分析の中で「責任性 (primary responsibility, responsibility of a property)」という特徴が頻繁に取り上げられている。「動詞が表す行為の成立が目的語の性質に依存している場合、つまり意味上の主語 x ではなく目的語 y の方に必要な『責任』がある場合、y を文法上の主語とする中間構文が可能となる」(中島 (2001: 26)) と説明されている。すなわち責任性とは、中間構文に現れる主語の本来的な性質によって、動詞句が表す行為が成し遂げられるということである。責任性の重要性を示す代表例が (30) (= (20)) である。

(30) a. This book sells well.

b. \*This book buys well.

(影山 (2004: 124))

動詞 *sell* が用いられた (30a) については、本の内容や読みやすさなど本そのものの性質によって本の売れ行きが左右されるということが含意され、受け入れ可能な文となる。一方 (30b) のように、動詞を *buy* にすると受け入れ不可能な文となる。「本を買う」という行為は買い手である動作主の購買欲や懐具合によって左右されるため、本の性質による影響がない。従って、中間構文では主語名詞の性質がその表現の適格性に大きく影響する。これは、本稿の 2.1.1 節で紹介した「主語の特性の読み」の説明に合致するものである。しかしながら、中間構文は主語の恒常的な性質を述べる個体レベル叙述 (*individual-level predication*) であるため、中間構文の主語が動詞句の表す出来事に対しての責任を持つということは当然のことであり、責任性という概念はあまりにも漠然としているのではないかと、影山 (2004: 124) は述べている。影山 (2004) は責任性という特徴について再考し、中間構文の主語名詞について分析している。その分析を以下にまとめる。

責任性は、名詞の特質構造における目的役割 (*Telic role*) に関係している<sup>13)</sup>。特質構造とは名詞の意味を表示したものであり、名詞の意味構造のことである。目的役割には物体の目的と機能について示されている。(30a) の主語名詞 *book* の目的役割は「読者が読むためのもの」である。しかし、本とは「紙を製本したもの」という概念だけでなく、「商品」というサブカテゴリとしての意味もあると考えられる。加えて、(30a, b) の動詞 *sell* と *buy* にはその目的語が「商品」でなければならないという意味制限が含まれている。「商品」の目的役割は「生産者または販売者が売るもの」である。これより、(30a) の動詞 *sell* の意味制限にも主語名詞 *book* の目的役割にも「商品」と「売る」という情報が含まれる。従って (30a) では、主語名詞 *book* と動詞 *sell* の意味情報が一致するため、受け入れ可能な中間構文となる。一方 (30b) の動詞 *buy* では、「商品」の目的役割である「売る」という目的に重点が置かれず、動詞の目的役割は「消費者が買うもの」とされている。主語名詞 *book* と動詞 *buy* の意味情報が一致しないため、(30b) は受け入れ不可能な表現となる。

その他の中間構文に関しても、主語名詞の目的役割を用いて説明できる。例えば (31) のように、*play* という同じ動詞が用いられるにも関わらず、その表現が受け入れられるかどうか度合いが変わるものがある。

(31) a. This piano plays easily.

b. \*This sonata plays easily.

(影山 (2004: 126))

---

<sup>13)</sup> 特質構造はクオリア構造 (*Qualia Structure*) とも呼ばれ、生成語彙論で取り上げられる大きな特徴の1つである。特質とは「語彙項目に関連した、その語を最もよく説明する属性や事象の集合」(小野 (2005: 24)) を表したものである。特質構造は4つのタイプに分けられる。1つ目は構成クオリア (*Constitutive Qualia*) と呼ばれるもので、物体がどのようなもので構成されているのかを示したものである。2つ目は形式クオリア (*Formal Qualia*) であり、その物体がどのような種類のものなのかを表したものである。3つ目が目的クオリア (*Telic Qualia*) であり、物体をどのような目的でどのように使うのかを表したものである。4つ目は主体クオリア (*Agentive Qualia*) であり、物を作り出す主体についての属性を示したものである。

(31) の動詞 *play* の意味制限と主語名詞の目的役割には「演奏する」と「楽器」という情報がある。(31a) の主語名詞 *piano* の本来の目的は、演奏者がピアノを弾くということであるため、その目的役割は「演奏者がピアノで音楽を奏でる」ということである。それゆえ、(31a) は動詞 *play* と主語名詞 *piano* の意味情報が一致された状態で中間構文に反映されているため、適格な文となる。一方で、(31b) の主語名詞 *sonata* については、「作曲家が聴衆に聴いてもらうために作るものである」という本来の目的があることにより、*sonata* の目的役割が「演奏する」とはならない。それに加え、(31b) の動詞 *play* は、*sonata* の目的役割である「聴く」という情報に焦点が置かれていない。従って (31b) は、主語名詞 *sonata* の目的役割と動詞 *play* の意味が合致しないため、不適格であるとされる。このように、中間動詞が主語名詞に対して特別な選択制限を与えているため、(31) のようなコントラストが生じる。

中間構文の形成に必要なものは動詞の LCS とされているが、それに加え、主語名詞の特質構造に記載された目的役割も重要であるとされている。主語名詞が原因で当該構文として受け入れられない場合があるのは、そのような動詞の LCS と主語名詞の特質構造の結びつきの帰結である。中間動詞が主語名詞に対して特別な意味制限を与えているため、当該構文に現れる主語名詞が特定の意味グループに限られることになる。

#### 2.1.4.4 動詞の意味分類と中間動詞の可能性

これまで、相や語彙概念構造の観点から、中間構文に関与できる動詞と関与できない動詞の意味制限に関する先行分析を紹介してきた。本節では、中間動詞になりうる動詞の意味タイプとなれない動詞の意味タイプについて議論していく。様々な研究者による分析を紹介していくため、意味タイプが重複している部分もある。まずは中間構文に関与できる動詞について紹介し、その後で当該構文に関与できない動詞について述べる。

中間動詞になりうる意味タイプとして4点示す。第一に、状態変化動詞 (*change-of-state verb*, *COS verb*) は、中間構文に納まる動詞の典型であり、英語の中間構文に現れることができる主要クラスである (影山 (1998:277), Rapoport (1999:149))<sup>14)</sup>。2.1.4.2 節で概観したように、状態変化は「行為者の対象物に対する働きかけによって、その対象物がどのように変化するのか」ということを示す、中間構文成立に必要な動詞の LCS を持つ。影山 (1998) によると、(32) の動詞は状態変化動詞に該当し、中間構文として受け入れられる。

(32) a. Small cars sell well.

b. This meat doesn't cut easily.

(影山 (1998:276))

中間構文を形成できる状態変化動詞は2つのタイプに分けられる (Rapoport (1999:148-149))。

<sup>14)</sup> 影山 (1998:277) は状態変化他動詞と表記している。



まず、(33) のように非対格構文 (unaccusative construction) で現れることができる状態変化動詞は、単純な状態変化動詞 (simple change of state verb) と呼ばれる (Rapoport (1999: 149))<sup>15)</sup>。

(33) a. This kind of glass breaks easily.

b. Milk chocolate melts smoothly.

(Rapoport (1999: 149))

加えて Rapoport (1999) によると、道具 (instrument) または様態 (manner) を表す状態変化動詞 (COS verbs that include an instrument or manner (I/M) component) も中間構文を許可し、(34) のような例が見られる。

(34) a. This kind of bread cuts easily.

b. This ice won't crush.

(Rapoport (1999: 150))

(34) の動詞 cut と crush については、それぞれの動詞に道具や様態という生得的な意味が含まれると考える (Rapoport (1999: 148))。「切る」や「砕く」という行為については、その行為を成し遂げるためにも道具が必要であり、同時に、その行為によって影響する物の状態についても解釈できる。このように道具や様態の要素があれば、「ある行為者がその道具を用いて、対象物をある状態へと変える」と解釈でき、中間動詞の LCS に従うことができる。上述のように、状態変化を表す動詞は中間構文の形成を許可し、道具や様態を示す状態変化動詞も関与できる。Levin (1993) は英語の動詞をおおよその意味タイプに分類した上で、中間構文に起こる動詞をリストにまとめている。上述で概観したような状態変化動詞についても、break 動詞や bend 動詞、料理動詞というように列挙されている。状態変化動詞の他に、中間動詞になれる動詞が記述的に紹介されており、以下でその一例を紹介していく。

第二に、「切る」を表す動詞が中間構文でよく見られる。(35a) は cut 動詞、及び (35b) は carve 動詞として取り上げられている。

(35) a. Whole wheat bread cuts easily.

(Levin (1993: 156))

b. Marble carves easily.

(Levin (1993: 158))

Levin (1993: 164-167) によると、分離や分解を表す動詞も中間構文を形成できる。separate 動詞や split 動詞、disassemble 動詞が取り上げられ、「切る」という意味の動詞が当該構文に関与しやすいと思われる。

第三に、「結合や付加」を表す動詞が中間構文に関与でき、(36a) が結合を表す mix 動詞、

---

<sup>15)</sup> (33) で例証されている動詞は、能格構文を形成できる動詞としても分析されている。

(36b) が付加を示す *tape* 動詞である。

- (36) a. Eggs mix well with cream. (Levin (1993: 159))  
b. Labels and covers tape together easily. (Levin (1993: 163))

以上のように、Levin (1993) は中間構文に関わる動詞について記述的に述べている。

第四に、場所移動を表す名詞由来転換動詞 (*denominal conversion verbs*) を挙げる。転換とは、ある項目に接辞を付加せず、他の項目に変えるという語形成プロセスである。名詞から動詞へと転換された動詞が名詞由来転換動詞である。Clark and Clark (1979) は英語の名詞由来転換動詞を幾つかのタイプに分けて分析している。例えば、場所移動動詞 (*locatum verbs*) と呼ばれるものがあり、(37) がその一例である。

- (37) Jane blanketed the bed. (Clark and Clark (1979: 769))

(37) は「Jane がベッドに毛布をかけた」という文であり、この動詞 *blanket* は解釈上「毛布が移動した」と考えられるため、場所移動を示す動詞として分類される。Clark and Clark (1979: 33) によれば、場所移動を表す名詞由来転換動詞の中には、中間構文になれるものがあり、(38) のような例が見られる。

- (38) a. The wall papered nicely.  
b. The floor swept easily. (Clark and Clark (1979: 771))

他動詞用法がある動詞については中間構文が可能となり、動作主によって引き起こされる結果を表す。(38a) の動詞 *paper* は「壁紙を貼る」という意味で、「行為者が壁紙を壁に貼ることにより、壁紙が移動する」と解釈になる。(38b) も同様に「床を箒で掃くことにより、箒が床へ移動する」と考えられるため、動詞 *sweep* も場所移動を表す。従って、(38) のように場所移動を表す名詞由来転換動詞の中で他動詞用法があるものについては、中間構文を形成できる<sup>16)</sup>。

次に、中間動詞になりえない意味的タイプとして7点提示する。第一に、状態動詞は(39)で示されるように中間構文に関与できない。

<sup>16)</sup> 本稿の2.1.2節で紹介したように、中間構文の特徴として、総称的な文のみで使われ、現在時制でしか現れないとされている。過去時制として示される(38)の全ての文は中間構文と言えるのかという疑問を持たれる可能性がある。萱原(2006: 79)の通時的分析では、過去単純相や進行相の同表現は15世紀には非常に一般化し、それ以降存在すると述べられている。従って、Clark and Clark (1979) は当該構文の詳しい特徴については述べていないが、(38)の文を中間構文とみなしていると考えられる。

(39) a. \*The answer knows easily.

b. \*The Politicians don't believe.

(影山 (1998:276))

第二に、破壊動詞 (destruction verb) も中間構文に關与できない。その例は (40) のとおりである。

(40) a. \*This cathedral destroys easily.

b. \*The city ruins easily.

(Kaga (2007: 202))

第三に、接触・打撃動詞は (41) のような典型的な中間構文では受け入れ不可能となるが、(42) のような結果述語を伴うことによって、その動詞が表す行動から生じる状態を与えるという意味であれば、構文成立となる。

(41) a. \*This counter wipes quickly.

(影山 (1998:277))

b.\*This metal won't pound.

(Levin (1993: 26))

(42) a. This counter wipes clean quickly.

(影山 (1998:277))

b. This metal won't pound flat.

(Levin (1993: 26))

第四に、知覚動詞が中間構文になれず、とりわけ「見える」を表す動詞については (43) で例証されているように、当該構文を許さない傾向にある (Levin (1993: 185-187))。

(43) a. \*The Mona Lisa sees easily.

(Levin (1993: 186))

b. \*Runaway cats spot easily.

(Levin (1993: 187))

最後に、創造を表す動詞 (creation verb) や与格動詞 (dative verb), 受取を表す動詞 (obtaining verb) という 3 種類の動詞が關与する表現を取り上げる。(44a) が創造動詞, (44b) が与格動詞, (44c) が受取動詞の例であるが、どのタイプも中間構文になりえない動詞である (Kaga (2007: 201-202))。

(44) a. \*These cabinets build easily.

(Kaga (2007: 201))

b. \*This technique shows easily.

(Kaga (2007: 202))

c. \*That book gets easily.

(Kaga (2007: 202))

ところが、(45) の文に現れる動詞は上述の種類にそれぞれ属するが、当該構文が認可される。

- (45) a. This kind of house constructs easily. (Kaga (2007: 201))  
 b. This technique demonstrates easily. (Kaga (2007: 202))  
 c. That book obtains easily. (Kaga (2007: 202))

(45a) の創造動詞 *construct* と (45b) の与格動詞 *demonstrate* と (45c) の受取動詞 *obtain* は、ラテン語由来の動詞である。一方、(44) の動詞は全て本来語の素性を持つ動詞である。かくして、(44) と (45) は同じ意味分類の動詞であるが、動詞の語源が中間構文の成立を左右させることもある。

以上のように、中間構文に関与できる動詞の意味タイプが4点ある。それに該当するタイプとしては主に状態変化動詞が挙げられ、さらに「切る」を表す動詞、「結合や付加」を表す動詞、及び場所移動を表せる名詞由来転換動詞も当該構文で現れる<sup>17)</sup>。一方、中間構文に関与できない動詞の意味タイプとして、大きく7点あり、状態動詞や破壊動詞、接触・打撃動詞、知覚動詞、創造動詞、与格動詞、そして受取動詞が該当する<sup>18)</sup>。接触・打撃動詞については、結果述語と共起する場合のみ中間構文が可能となる。加えて、中間構文になりえない動詞の中には、同じ意味分類に属するにも関わらず、当該構文を受け入れ可能とする動詞もある。例えば、創造動詞、与格動詞、受取動詞がそのような動詞のタイプに該当する。とりわけ創造・与格・受取を表す動詞については、ラテン語素性があれば中間構文が成立し、本来語の素性の動詞であれば当該構文を許さないという傾向にある。

### 2.1.5 潜在的動作主

中間構文には潜在的動作主 (*implicit agent*) が見られる。この特徴については、Jespersen (1949: 349), Fellbaum (1985: 21), Fagan (1988: 196), Levin (1993: 26), Kaga (2007: 195), García de la Maza (2011: 170) など多くの先行文献で述べられ、当該構文における重要な特徴の1つである。動作主とは「動詞の表す事象に意図や責任を持って関わり、ある行為を遂行、制御したり他の実体の変化を引き起こしたりする実体であり、典型的には有生物である」(中野, 他 (2015: 156))。(46a) の中間構文, (46b) の能格構文, そして (46c) の受動構文は、全て自動詞用法であるが、動作主について着目すると3つの相違点が見られる。3種類の構文を比較しながら、中間構文の動作主について論じる。

<sup>17)</sup> 「切る」を表せる動詞、「結合や付加」に関する動詞、そして場所移動を表す動詞は、全て状態変化動詞に包含されるということも考えられるが、ここでは様々な研究者の分析を紹介しているため、重複する箇所も見られる。

<sup>18)</sup> 破壊動詞や接触・打撃動詞、創造動詞、与格動詞、そして受取動詞については、状態変化動詞に属するとも考えられる。状態変化動詞は中間構文に関与できる主要なタイプであるため、状態変化動詞の中で、中間動詞になれるものと中間動詞になれないものというように下位分類される、ということになる。中間動詞になれる動詞と同様、ここでは様々な研究者の分析を紹介しているため、重複する箇所も見られる。

- (46) a. The door opened easily.  
 b. The door opened.  
 c. The door is opened at six every morning. (安井 (2017: 127))

第一に、中間構文は動作主が含意されるということである。受動構文も動作主が含意されるが、能格構文のみ使役主が含意される。中間構文ではいつでも動作主と係わるが、能格構文では動作主がなくても良いとされている。(46a) の中間構文の場合「人がドアを開ける」というように、意図を示す人間の行為者を前提として解釈される (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 4))。一方、(46b) の能格構文では人間の意図的行為を前提とはせず、「そのドアは独りで開いた」と解釈される (安井 (2017: 128))。加えて、能格構文は「ドアを開けたのは風である」というように自然が原因で起こる事象を示し、使役主 (cause) といつでも関わる (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 5))。これより、中間構文に含意される行為者は通常、有生であるが、能格構文では使役主が含まれるため、その行為者は有生でない場合もある。(46c) の受動構文は、People open the door at six every morning という能動文に言い換えることができるため、人間の行為を前提として捉えることができる。

第二に、中間構文の動作主は顕在しないが存在する、すなわち潜在化されているということである。能格構文や受動構文と比較すると、各構文における動作主が顕在あるいは潜在するのかということに違いが見られる。その証拠として、by 句に関する表現が挙げられる。

- (47) a. \*The book sells well by John. (安井 (2017: 129))  
 b. \*The door opened by John. (安井 (2017: 128))  
 c. The door was opened by John. (安井 (2017: 128))

中間構文では外項が降格あるいは削除されるため、(47a) で例証されるように、動作主を表す by 句が統語的に具現化されることが許されない (Kaga (2007: 192))。従って、中間構文では動作主が潜在している。(47b) の能格動詞 open は [-Agent] の素性を持ち、[+Agent] の素性を持つ句 by John と衝突するため、非文法的な文となる。能格構文については、上述で説明したように、動作主は全く意識されず、水が蒸発するという状況と同様、動作主の影も形も舞台における「黒子」のような形でさえも存在しないということを示す (安井 (2017: 128))。これより、能格構文では、動作主が存在する必要はないとされる。中間構文と能格構文と異なり、受動構文では、動作主がわかっている場合は (47c) のように by 句で明示できる。加えて、受動構文は by 句がない場合も (46c) のように受け入れられる。従って、受動構文の動作主は任意に現れる。

第三に、中間構文の潜在的動作主は不定であるということである。中間構文の基底にある動作主は表面上現れないが、特定または限定的ではなく (Fellbaum (1985: 21)), この不特定の

動作主は *people in general* という句に相当する (Fagan (1988: 196))。 (47a) のように *by* 句と共起できないという特徴も、中間構文の潜在的動作主が不定であることを裏付けている。能格構文は使役主を含み、「独りでに」という解釈を持つため、使役主も不定である。受動構文に現れる動作主は、(47c) のような定の場合でも、*by people* で示されるような不定の場合でも受け入れられる。

以上の点から、安井 (2017: 130) は上述 3 つの構文における動作主の明確性の度合いを順序付けている。3 つの構文の中で、動作主が最も明確に示されるのは受動構文であり、その次に明確な動作主を持つとされているのが中間構文であり、当該構文の動作主は舞台裏に存在することを表す。そして、動作主の影も形も見えず、最も明確さの度合いが低いものが能格構文である。

中間構文には潜在的動作主が存在するというを示す 4 つの証拠を概観する。第一に、句 *all by itself* を挿入できない (Rapoport (1999: 150))。

- (48) a. \*This kind of bread cuts easily all by itself. (Rapoport (1999: 150))  
b. This kind of glass breaks easily all by itself. (Rapoport (1999: 151))

(48a) で例証されているように、道具・様態を表す状態変化動詞と *all by itself* が共起すると非文法的な文となる。なぜならばこの種の動詞には動作主が含まれると解釈でき、句 *all by itself* と意味的に矛盾するためである。一方、(48b) の動詞は単純な状態変化動詞であり、能格動詞でもある。(48b) の場合、動作主ではない要素、つまり使役主に相当する要素が含意されるため、句 *all by itself* を入れても矛盾せず、文法的に正しい文となる。言い換えれば、*all by itself* を付加できるのは能格構文であり、中間構文ではできない。再帰代名詞はその文の主語を指し、意味構造に隠れた動作主を指さないため、*all by itself* は動作主解釈の句ではなく、使役主解釈の句である (影山 (1998: 151))。これより、中間構文では動作主が含意されるため、*all by itself* という句を許可しない。

第二に、中間構文では動作主解釈を持つ *for*-句を用いることができる (Rapoport (1999: 154))。(48) と同じ動詞構文に適用すると以下ようになる。

- (49) a. This kind of cheese cuts easily for experienced cooks.  
b. \*This kind of glass breaks easily for our factory workers. (Rapoport (1999: 153))

(49a) の道具や様態を表す状態変化動詞には動作主が含意されるため、*for*-句が挿入されても受け入れ可能となる。その一方で、(49b) の単純な状態変化動詞、つまり能格動詞では *for*-句が付加されると受け入れ不可能な文となり、その動詞には動作主が含まれないことを表している。

第三に、中間構文は命令文として起こることができないということである。この特徴については、本稿の 2.1.1 節の総称性で概観しているが、その例は (50) のとおりである。

(50) ?\*Translate easily, Greek!

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 6))

命令文は命令を実行できる聞き手に向けられるものであるため、その命令を実行できる動作主が必要となる。(50) には動作主が存在し、主語 *Greek* を比喩的な動作主として解釈できないため、受け入れ不可となる。

第四に、中間構文が持つ潜在的動作主は、容易を表す副詞または道具表現によって解釈レベルで引き出されるということである。この特性についても、本稿の 2.1.3 節の修飾表現で取り上げている。当該構文の副詞表現は、「人間の動作主の観点から見た、主題を表す主語の内在的性質」に関係している (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 24))。

(51) a. This car shifts manually.

b. \*This car shifts with the right hand.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 24))

(51a) では、「誰もがこの車のギアを手で入れ換える」と解釈され、動作主が不特定であるということが読み取れる。従って、この文は主語名詞の固有の性質を示すため、文法的な中間構文である。一方 (51b) では、「右手を使う人」というように動作主を特定しているため、主語の内在的性質に関係せず、受け入れられない文となる。かくして、(50) のような命令文に関する現象と (51) のような修飾語に関する現象は、潜在的動作主の制約の帰結である (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 18), Kaga (2007: 229))。

中間構文には動作主が顕在しないが、存在する。能格構文や受動構文と比較すると、中間構文に *by* 句挿入ができないという理由で動作主が潜在しているということ、そして、この潜在化された動作主は *people in general* に相当するような不定の行為者を表すということが明らかである。中間構文の潜在的動作主に関する証拠としては、*all by itself* という使役主解釈の句と共起できないが、動作主解釈の *for*-句とは共起できるということが挙げられている。加えて、潜在的動作主の特徴は、当該構文での命令形が不可であることや修飾語に関する意味的制限とも結びつく。

### 2.1.6 被影響性

中間構文を形成できる動詞の特徴について述べる際、被影響性 (*affectedness*) の概念が重要であると先行分析でよく紹介されている。従来、被影響性の条件とは、派生された主語、つまり同表現の基底構造にある目的語が、その動詞で示される行動によって影響を受ける場合のみ、中間構文が成立するという考えである。

- (52) a. This bread cuts easily. (Hale and Keyser (1987: 1))  
 b. \*Planets see easily. (Hale and Keyser (1987: 3))  
 c. \*This metal pounds easily. (Hale and Keyser (1987: 15))

(52a) の動詞 cut は状態変化動詞の一例である。この種の動詞は物理的に明らかな方法で目的語に影響するという行動を示す。主語 this bread は切られることにより影響を受けるため、(52a) は成立する。その一方で、(52b) と (52c) は中間構文として成立しない。(52b) の動詞 see は経験者 (experiencer) という意味役割を持つ主語を必要とし、そのような動詞で表される過程は、主語 planets に影響しない。従って、被影響性を満たさないため、(52b) は非文法的である。(52c) の動詞 pound のような接触動詞については、その動詞によって主語 this metal が影響を受けるかどうか明らかでない。(52c) のような例を受け、Hale and Keyser (1987) は語彙概念構造の観点で被影響性の概念に関する理論的定義を提案している。Hale and Keyser (1987: 22) による被影響性の定義とは、(53) のような語彙概念構造を持つもので、y が影響を受けている状態であると示されている。加えて、(52a) の動詞 cut は (54) のような語彙概念構造を持つとされる。

(53) [x cause [y “undergo change”], (by ...)] (Hale and Keyser (1987: 22))

(54) LCS of ‘cut’

[x cause [y develop linear separation in material integrity], by sharp edge coming into contact with latter] (Hale and Keyser (1987: 8))

被影響性の概念を満たすような (53) の LCS には、cause の前にあるような使役上位事象と変化下位事象が含まれる。変化下位事象とは変化結果を伴うものであり、(53) では [y “undergo change”] が該当する。(54) を (53) と比較すると、構造が類似している。これより、(52a) は (53) の語彙概念構造を持ち、主語 y は影響されるということから、中間構文が可能となる。一方、(52c) のような中間構文に関与できない動詞 pound については、先行研究でその語彙概念構造がはっきりと示されていないが、(53) の語彙概念構造を持たず、主語 y は影響を受けないと説明されている。但し、このような接触動詞は結果述語と共起すると中間構文が成立し、(52c) に結果述語 flat を補うと (55) のような構文が成立する。

(55) This metal pounds flat easily. (Hale and Keyser (1987: 15))

(55) は結果構文から派生された中間構文とされている。このような構文は (56) のような語彙概念構造を持つと考えられている。



(56) [ x cause [ y come-to-be-in FLAT], (by pounding y)]

(Hale and Keyser (1987: 15))

(56) も (53) のような語彙概念構造であり、主語 y が叩かれることで影響を受けているため、(55) の中間構文が成立する。かくして中間構文の適格性については、上述のような被影響性が大きく関わりと論じられている。

被影響性については Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) も述べているが、上述の Hale and Keyser (1987) とは違う視点で説明している。その見解について以下にまとめる。中間構文を形成できる他動詞は、ある下位クラスに限定される。その下位クラスとは、被影響性の定義を満たせる動詞である。Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) によると、中間構文に必要とされる被影響性とは (57) のように定義されている。

#### (57) 被影響性の定義

- a. 項の指示物が行為・過程が行われる前に存在する。
- b. 項が示す固有の特質が行為・過程によって変えられる。

(57) の定義にある「項」とは中間構文の主語のことであり、主題 (theme) の意味役割を持つ名詞を示す。動詞の項が (57a) と (57b) の両方とも満たしていれば、被影響性の条件を満たしているということになり、中間構文になり得る。一方、当該の項が (57a) と (57b) のどちらかしか満たしていない場合は、被影響性の条件を満たさないということになり、中間構文になれない。例えば、以下のような文が見られる。

(58) a. This shirt washes easily.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 8))

b. \*This type of bridge builds easily.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 11))

c. \*The Eiffel Tower sees easily from my window.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 8))

(58a) は、洗う前にシャツが存在するため (57a) を満たし、加えて洗うという行為によってシャツが清潔になることから (57b) も満たせる。これより、(58a) は被影響性の定義を満たすため、適格な中間構文となる。(58b) の建造物は、建てる前に存在するわけではない。従って、(57a) の条件に抵触するため、(58b) は非文法的な文となる。(58c) も同様に考えると、「人が見る前にエッフェル塔は存在する」と解釈できるため、(57a) の条件を満たせる。ところが、(57b) について確認すると、「人が見ることによってエッフェル塔の特質が変わるわけではない」と考えられ、(57b) に抵触する<sup>19)</sup>。従って、被影響性の定義を満たせず、(58c) は

<sup>19)</sup> 被影響性の定義 (57b) にある「固有の特質」について Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) は詳しく述べていない。本稿では、主語名詞が示す具体物の性質と捉え、行為・過程によってその主語名詞が持つ固有の性質が変わるかどうかを判断するものとする。

非文法的な中間構文となる。

以上のように、被影響性とは、主語名詞がその動詞で示される行動によって影響を受けるということであり、この条件を満たせば中間構文が成立する。この条件を満たせるかどうかを判断することにより、当該の文が中間構文になり得るかどうかを確かめることができる。この定義も中間構文の重要な意味的特性とされる。

#### 2.1.7 まとめ

2.1 節で概観した中間構文の 6 つの主要な意味的特性を (59) の表にまとめる。以下、表 (59) に沿って説明していく。

## (59) 中間構文の6つの主要な意味的特性

|   | 主な意味的特性   | 備考欄  |
|---|---|--|
| 1 | 主語の固有の属性を表す。  |  |
| 2 | 総称的な文であり、特定の事象を示せない。  | ※一般に単純現在形であるが、非事象性であれば必ずしも現在形である必要はない。   |
| 3 | 副詞または修飾表現が含まれる。<br>容易さや事象に関連する副詞は受け入れられるが、精神や様態を表す副詞は受け入れられない。  | ※副詞の代わりに修飾表現が現れることもある。   |
| 4 | 中間動詞にも意味的制限がある。<br><ul style="list-style-type: none"> <li>・達成動詞</li> <li>・“X CAUSE Y” という語彙概念構造を持つ動詞</li> <li>・主語名詞の特質構造と結びつけられる動詞</li> <li>・中間動詞になれる動詞となれない動詞の意味分類が明らかにされている。</li> </ul> <中間動詞になれる動詞> <ul style="list-style-type: none"> <li>・状態変化動詞</li> <li>・「切る」を表す動詞</li> <li>・「結合・付加」を表す動詞</li> <li>・場所移動を表す名詞由来転換動詞</li> </ul> <中間動詞になり得ない動詞> <ul style="list-style-type: none"> <li>・状態動詞</li> <li>・破壊動詞</li> <li>・接触・打撃動詞</li> <li>・知覚動詞</li> <li>・創造動詞, 与格動詞, 受取動詞</li> </ul> | ※活動動詞と到達動詞については意見が分かれる。<br><br>※接触・打撃動詞は、結果述語を付加すると中間構文が成立する。<br>※創造動詞・与格動詞・受取動詞については、ラテン語素性であれば中間構文が成立する。 |
| 5 | 動作主が潜在し、不定の行為者が含意される。   |  |
| 6 | 被影響性の条件が合う場合のみ中間構文成立となる。  |  |

1つ目は、当該構文は主語の固有の属性を表す (§2.1.1)。この特性は García de la Maza (2011) など多くの先行研究で述べられ、主語名詞がどのような特性を永続的に持つのかということを知ることが重要である。

2つ目は総称的な文であり、特定の事象を示せないということである (§2.1.2)。その特徴を裏付ける3つの証拠として、当該構文は命令文、及び進行形になれないということ、そして

小節で現れないということが挙げられている。(59)の備考欄で記したように、当該構文は一般に単純現在形で示されるが、非事象である場合、すなわち特性の解釈ができる場合は進行形や過去形でも中間構文が成立する。

3つ目は、中間構文には副詞または修飾表現が含まれ、さらに同表現には意味的制限があるということである (§2.1.3)。容易さや事象を表せるような副詞は当該構文で受け入れられ、精神や様態を表す副詞は受け入れられない (Fellbaum(1985))。副詞が表現されない場合でも、その代わりになれるような表現が存在すれば、中間構文になれる。例えば、法性や可能性を表す表現 (García de la Maza (2011))、否定対照の環境が副詞の役目を果たし (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989))、当該構文に関与できる。

4つ目は中間動詞の意味的制限を提示した (§2.1.4)。第一に、相に着目すると、Vendler(1967)による動詞の4分類の中では達成動詞が中間構文になれるということを紹介した。その他の活動動詞や到達動詞については先行分析の中でも意見が分かれる (§2.1.4.1)。第二に、語彙概念構造の観点から、「行為者が対象物へ働きかけることによって、その対象物がどのような状態に変わるのか」を示せるような“XCAUSE Y”という意味構造を持つ動詞が中間動詞になれる (§2.1.4.2)。第三に、主語名詞の特質構造に記載された目的役割も必要とし、その構造と意味的に結び付けられる動詞が中間構文を成立させる (§2.1.4.3)。第四に、中間動詞になれる動詞となり得ない動詞に関するそれぞれの意味分類に着目した (§2.1.4.4)。中間構文に関与できる動詞としては、状態変化動詞、「切る」を表す動詞、「結合・付加」を表す動詞、そして、場所移動を表す名詞由来転換動詞である。その一方で、中間構文に関与できない動詞として、状態動詞や破壊動詞、接触・打撃動詞、知覚動詞、創造動詞、与格動詞、受取動詞が挙げられる。但し、接触・打撃動詞については結果述語を伴う場合は当該構文が成立する。加えて、創造動詞と与格動詞、受取動詞の3種類の動詞については、ラテン語素性であれば当該構文を受け入れ、本国素性のものは受け入れない。

5つ目は、中間動詞構文には動作主が潜在し、不定の行為者が含意される (§2.1.5)。能格構文や受動構文と比較すると、中間構文に by 句挿入ができず、この潜在化された動作主は people in general に相当する。all by itself という使役主解釈の句と共起できないが、動作主解釈の for-句とは共起できるということ、及び、当該構文での命令形が不可であることにより、当該構文には動作主が顕在しないが、存在することが明らかになっている。

最後に6つ目は、被影響性の条件が合う場合のみ中間構文が成立する (§2.1.6)。派生された主語がその動詞で示される行動によって影響を受ける場合は、被影響性の条件を満たし、当該構文が成立すると考えられている。Hale and Keyser (1987) は語彙概念構造の視点から取り上げている。一方、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) は被影響性の定義を2箇条示し、双方の条件を満たせば当該構文が成立する、と論じている。かくして、中間構文には意味的特性及び制限が非常に多く見られるということが先行研究からわかる。

## 2.2 統語的特性

中間構文には意味的特性だけでなく、統語的特性も多く見られる。2.2 節では当該構文に関する 5 つの統語的特性について概観する。まず 2.2.1 節では中間動詞の主語について取り上げ、2.2.2 節では当該構文における前置詞残留と S 削除に関する統語現象について記述的に述べ、2.2.3 節では副詞との共起について紹介し、それぞれ能格構文と比較しながら説明する。2.2.4 節では潜在的動作主に関する統語的分析を紹介し、2.2.5 節では中間動詞に含まれるとされる形態素について概観する。最後に 2.2.6 節では、2.2 節で取り上げた統語的特性に関する一連の先行研究のポイントをまとめる。

### 2.2.1 中間動詞の主語と論理的目的語

中間構文の主語名詞は、主題を表す目的語 (thematic object) である (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 1))。また、van Oosten (1977: 1) のように、当該構文の主語名詞は被動者 (patient) を表すと論じるものもある。その派生においては、外項の降格 (demotion) または削除 (deletion)、及び内項の主語位置への昇格 (promotion) が見られる (Kaga (2007: 192))。つまり、中間構文では、他動詞の目的語にあたる名詞が主語位置に移動するという統語的移動が起こり、受動構文と同じ派生であると考えられている。この派生で見られる中間動詞と目的語の移動に関する記述的分析を紹介していく。

Levin (1993: 25) によると、英語の動詞構文には、他動交替 (transitivity) と呼ばれる動詞の変化がある。これは、‘NP V NP’ 形と ‘NP V’ 形とを交替するというパターン、及び ‘NP V NP’ 形と ‘NP V (PP)’ 形とを交替するというパターンがある。後者のパターンでは、自動詞用法の主語の意味役割が、他動詞用法の目的語の意味役割と同じであるとされている。この「他動詞の目的語 = 自動詞の主語」というパターンは、自動詞の中の非対格動詞 (unaccusative verb) である。つまり、表面上では自動詞であってもその主語は表層の目的語であるということに繋がる。この非対格交替のパターンは中間交替 (middle alternation) と使役交替 (causative alternation) と物質・起点交替 (“substance/source” alternation) の 3 つに下位分類されている<sup>20)</sup>。

Keyser and Roeper (1984) も、能格構文と比較しながら中間構文における統語的特性を取り上げている。中間構文は統語では他動詞であるが、能格構文は統語では自動詞であると考えられている。その証拠として、中間構文あるいは能格構文で用いられる動詞が、名詞的語句を修飾できるか否かというテストが挙げられている。一般に、自動詞については (60a) のよ

<sup>20)</sup> 物質・起点交替とは、物質の放出を表す動詞にしか起こらない。このような動詞は起点 (放出の出所; emission) を表す項とその起点から排出される物質を表す項という 2 つの項を取る。

(i) a. Heat radiates from the sun.

b. The sun radiates heat.

(Levin (1993: 32))

中間交替と使役交替と唯一異なる点は、物質放出の動詞の項が両方とも、自動詞用法でも他動詞用法でも表記されるということである。

うに名詞的語句の前の位置に置くことができるが、他動詞については (60b) のようにその位置に置くことができない。

- (60) a. the walking boy (Keyser and Roeper (1984: 386))  
b. \*the killing boy (Keyser and Roeper (1984: 387))

このテストを (61a) のような能格構文と (61b) のような中間構文に適用すると、(62) の結果となる。(62a) で例証されるように能格動詞は名詞的語句を修飾できるが、(62b) のように中間動詞は名詞的語句を修飾できない。

- (61) a. The ball bounced. (Keyser and Roeper (1984: 385))  
b. The floor paints easily. (Keyser and Roeper (1984: 383))  
(62) a. the bouncing ball  
b. \*the painting wall (Keyser and Roeper (1984: 387))

主題構造 (thematic structure) の観点から、(62) の名詞は全て主題を表している。(62a) は「弾んでいるボール」となり、(61a) のような自動詞構造から (62a) のような名詞的語句を派生できる。これより、能格動詞は自動詞となる。(62a) のような語句が派生されることから、能格構文は語彙部門で作られるとされている。一方、中間動詞では、(61b) のような自動詞構造から (62b) のような名詞的語句を形成すると、「\*ペンキを塗っている壁」というように不適格な表現となるということから、中間動詞は他動詞であると考えられる。それに加えて、中間構文は (62b) のような名詞表現を作れないということから、語彙部門でなく統語部門で派生される。

従って、中間構文の基底が他動詞構造であることから、当該構文の主語は他動詞の目的語に相当し、主題を表す。統語では能格動詞は自動詞であるが、中間動詞は他動詞である (Keyser and Roeper (1984: 386))。この統語的派生方法については、2.6 節で詳しく紹介していく。

### 2.2.2 前置詞残留と \$ 削除

中間構文は統語部門で派生され、能格構文は語彙部門で派生されるという考えの証拠として、前置詞残留 (preposition stranding) または再分析 (reanalysis)、及び \$ 削除 (\$-Deletion) が挙げられる (Keyser and Roeper (1984: 399; 407))。この2つの現象における中間構文の統語的特性を能格構文や受動構文と比較しながら、順次見ていく。

第一に、中間構文では再分析を受けるが、能格構文は再分析を受けない (Keyser and Roeper

(1984: 400)<sup>21)</sup>。(63) の動詞 *break* は中間構文にも能格構文にも関与できる動詞の 1 つであるが、(63a) のように「その部屋は侵入されやすい」という中間構文の場合はややぎこちないが受け入れ可能とされ、(63b) のように能格構文としては完全に受け入れられない。

(63) a. ?The room breaks into easily.

b. \*The room broke into. (Keyser and Roeper (1984: 400))

(63a) の他にも、中間構文が再分析を受けるということが例証されている。

(64) a. \*Jokes laugh easily.

b. ?John laughs at easily. (Keyser and Roeper (1984: 400))

(64a) のように、前置詞 *at* を削除すると非文法的になるが、この前置詞を残留させると (64b) のようにややぎこちないが受け入れられる文となる。再分析が可能ということは、中間構文が統語で派生されるということになる。従って、中間構文は統語部門で形成されるが、能格構文は語彙部門で派生される。上述のように Keyser and Roeper (1984) が説明していることに対して、反論も見られる。例えば Fagan (1988: 193) によれば、(63a) と (64b) のように中間構文は前置詞残留をかりうじて受けるが、ごく限られた場合のみに適用されるため、再分析は信用できる診断テストではない。

第二に、中間構文は  $\bar{S}$  削除を適用できない (Keyser and Roeper (1984: 407))。繰り上げ (raising) の文脈では、(65a) の中間構文と (65b) の受動構文との間にコントラストが見られる。

(65) a. \*John believes [ $\bar{S}$  to be a fool] easily.

b. John was believed [ $\bar{S}$  to be a fool]. (Keyser and Roeper (1984: 407))

(65) の基底構造は *They believe John to be a fool (easily)* という例外的格標示 (Exceptional Case Marking: ECM) 構文である。この基底構造では、不定詞節の意味上の主語 *John* が、主節の直接目的語ではないにも関わらず、対格になっているという点で例外的とされる。(65b) のよ

---

<sup>21)</sup> 再分析は、目的語を動詞の隣りになるよう、動詞の中に前置詞が含まれるという統語的作用である。受動化が適用される前に再分析が起こる。例えば (ia) のように、通常 [*v slept*] で動詞であるが、(ib) の [*v slept in*] のようにすると、前置詞句内の目的語 *the bed* が動詞と隣接する。(ib) の [*v slept in*] のように、動詞の中に前置詞を含むように再分析し、このような基底構造に受動規則を適用すると、(ii) のような受動構文となる。従って再分析とは、受動化される前にこの現象が起こる統語作用である。

(i) a. Someone [*v slept*] in the bed.

b. Someone [*v slept in*] the bed.

(ii) The bed was [*v slept in*] (by someone).

(Keyser and Roeper (1984: 399))

うな受動構文では、より低い節に受動化を適用すると、主動詞 *believe* とより低い節との間にある *Ś* 節を取り除く必要がある。より低い節の主語 *John* が格標示を受けた上で主語位置へ移動するため、(65b) のように *Ś* 削除を受ける。その一方で (65a) の中間構文では、*Ś* 削除ができず、*Ś* 節が障壁となるため、より低い節の主語 *John* が主語位置へ移動できない。従って、中間構文は受動構文とは異なり、*Ś* 削除を受けることができない。この理由として、中間構文は文法現象の中では中核的な (core) 現象であるが、*Ś* 削除は特殊で例外的な (peripheral or exceptional) 現象であるため、中間構文では *Ś* 削除が適用されないと考えられている (Keyser and Roeper (1984: 408))。一方で、受動構文は中間構文と同様に中核的な文法現象であるが、中核的な環境でも例外的環境でも適用するため、*Ś* 削除を受けることができる。

上述のように、再分析に関する事実より、中間構文では再分析が可能であるため統語で派生され、能格構文ではこの現象を受けないため語彙で派生される。加えて、中間構文は *Ś* 削除を適用できないという統語的事実があり、受動構文とも異なる特性が見られる。

### 2.2.3 副詞との共起

中間動詞は通常副詞と共起するが、能格動詞は副詞と共起する必要がない (Keyser and Roeper (1984: 385), Fagan (1988: 700), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 7-8))。 (66a) の中間構文には副詞が見られないため、不適格な文となるが、(66b) のように能格構文では副詞が不在の場合も受け入れられる。

(66) a. \*Bureaucrats bribe.

b. The boat sank.

(Keyser and Roeper (1984: 385))

(67) のコントラストより、修飾語が見られる典型的中間構文と比べ、修飾表現が見られない中間構文は容認度が下がる。

(67) a. <sup>3</sup>Greek translates.

b. Greek translates easily.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 7-8))

上述のように、修飾語あるいはそれに相当する表現を必要とするのが中間構文で、そのような表現を必要としないのが能格構文である。修飾語に相当する表現とは、否定や対象の環境が見られるようなものであり、本稿の 2.1.3 節で概観したとおりである。

### 2.2.4 動作主に関する統語的特性

2.1.5 節で紹介したように、中間構文には潜在的動作主が含まれる。この分析について、先行研究の中には大きく 2 つの立場に分かれる。まず 1 つ目は「統語的に存在する」という立



場であり、2つ目は「統語的には存在しない」という立場である。それぞれの立場について、順次紹介していく。

まず、中間構文の動作主は統語的に存在するという立場として、Stroik (1992) の分析がある。Stroik (1992) は、中間構文に含意される動作主は PRO 項 (PRO argument) として付与されると主張している。PRO とは、先行する表現と同じ人や物を指すが、発音されないというもので、代名詞 (pronoun) とは異なる<sup>22)</sup>。加えて、PRO は制御要素 (controller) によってコントロールされ、意味解釈上先行する表現と同じ人や物を指す。Stroik (1992) によると、中間構文には PRO が構造上存在するということを支持する証拠が2つある。1つ目の証拠は、主語に含まれる照応形 (anaphor) が関与する表現である。

(68) a. [Books about oneself] never read poorly.

b. [Letters to oneself] compose quickly. (Stroik (1992: 129))

束縛理論 (binding theory) より、(68) の oneself は、oneself を c 統御 (c-command) するような音形を持たない名詞句の項と同一指標を持つはずである。つまり、(68a) と (68b) の再帰代名詞 oneself の先行詞が存在しなければならない。中間構文には、音形を持つ Theme の主語と照応を認可する空の項という2つの項が存在すると仮定されている。(68) の空の VP 項には、外項  $\theta$ -role が付与される。このように、照応形 oneself が関与でき、その先行詞が存在するという事は、中間動詞の動作主が統語的に PRO として生じるという帰結になる。2つ目の証拠は、for-句を含むことができるということである。

(69) a. That book reads quickly for Mary.

b. No Latin text translates easily for Bill. (Stroik (1992: 131))

(69) より、外項  $\theta$ -role が統語上、音形を持って表されているということになり、動作主が統語上、降格されていないということになる。中間構文には動作主解釈の for-句を含むことができる、と Rapoport (1999: 153) も同様の見解を述べている。以上の証拠より、中間構文の潜在的動作主は PRO として統語構造に存在する、と Stroik (1992) は論じている。

大庭 (2017) も上述の Stroik (1992) と同様、中間構文の動作主は統語的に存在するという立場である。(70a) のような PRO を含む能動文の不定詞節と (70b) のような中間構文は類似

<sup>22)</sup> 束縛理論 (binding theory) より、代名詞は、統率範疇 (governing category) の内部で束縛される必要はなく、自由でなければならない。統率範疇とは、先行詞の束縛関係の可否に関する領域である。

(i) [<sub>S1</sub> John<sub>i</sub> thought [<sub>S2</sub> Bill<sub>j</sub> hated him<sub>i/\*j</sub>]]. (原口・中村 (1996: 56))

(i) の代名詞 him の統率範疇は、S2 節であり、その内部で束縛されてはならないため、代名詞 him は名詞句 Bill と同一指標を持たない。統率範疇に該当しない S1 節内の名詞句 John は、代名詞 him を束縛できるため、同一指標を持つことができる。

しているため、中間構文にも PRO が含まれると論じられている。

(70) a. They decided [PRO to sink the boat].

b. The book reads easily. (大庭 (2017: 15))

不定詞節と中間構文の類似性に関する証拠が5つ挙げられている。第一に、(71) のように不定詞節も中間構文も by 句を伴うことができない。

(71) a. \*I decided [PRO to sink the boat by John].

b. \*The book sells well by John. (大庭 (2017: 18))

(71a) では、不定詞節内で PRO と by John というように動作主が二重になるため、非文法的である。(71b) のように中間構文についても、動作主の具現化ができないため、統語で PRO が存在するという帰結となる。

第二に、両構文とも被制御要素がある、すなわち、PRO が主節の主語にコントロールされるということである。

(72) a. They expected [PRO to give damaging testimony].

b. Mary expects [the Latin text she was assigned to translate easily]. (大庭 (2017: 20))

PRO は動作主と解釈され、(72a) の PRO は主節の主語 they にコントロールされる。(72b) の中間構文には統語的に PRO に類似する要素が存在しないように思われるが、実際には受け入れ可能となる。(72b) が可能なのは、統語的に PRO が存在するためである。

第三に、(73) のように、両構文ともに each other の相互代名詞 (reciprocal pronoun) や oneself などの再帰代名詞 (reflexive pronoun) と共起できるということが紹介され、Stroik (1992) と同じ証拠が挙げられている。

(73) a. They decided [PRO to hit each other].

b. Some poems read better aloud to oneself than others do. (大庭 (2017: 22))

第四に、副詞句の中の PRO を制御できるということであり、(74) のとおりである。

(74) a. It is impossible [PRO to file the articles [without PRO reading them]]. (大庭 (2017: 23))

b. Potatoes usually peel easily [after PRO boiling them]. (大庭 (2017: 24))

(74a) の不定詞節については、より低い節すなわち副詞句にある PRO の制御要素は、動詞 file の主語 PRO であるため、副詞節内にある PRO は統語的に存在する動作主を制御要素にとる。同様に、(74b) の中間構文も文法的である。なぜならば、(74a) の不定詞節と同様、中間構文では統語的に PRO が存在し、副詞節内にある PRO は統語的に存在する PRO を制御要素にとるからである。

第五の証拠として、PRO が形容詞的述語の主語になれることが挙げられている。形容詞的述語とは、形容詞の形を持つ述語である。意味解釈上、形容詞的述語には主語が存在しなければならない。形容詞的述語を伴う不定詞節が関与する表現は (75) のとおりである。

- (75) a. They expected [PRO to leave the room [PRO angry]].  
b. This children's book reads easily [PRO unaided]. (大庭 (2017: 25))

(75a) にある形容詞的述語 angry の主語 PRO は、その上の不定詞節にある leave の主語 PRO を制御要素にとる。これより、形容詞的述語の主語は、統語的に存在する動作主を制御要素にとれる。(75b) の中間構文は (75a) と同様、受け入れ可能である。従って、中間構文も、形容詞的述語の主語として機能する PRO が統語的に存在する。

しかしながら、不定詞節と中間構文の相違点が 2 つある。一つ目は、voluntarily のような動作主指向の副詞 (agent-oriented adverbs) と共起できるかについてである。

- (76) a. I decided [PRO to leave voluntarily].  
b. \*This book sells well voluntarily. (大庭 (2017: 19))

(76a) の能動文の不定詞節には動作主が統語的に存在するため、副詞 voluntarily が生起できる。一方で、中間構文では統語的 PRO が存在するものの、(76b) で例証されるように、動作主指向の副詞を受け入れられない。もう 1 つの相違点は、統語的に存在する動作主 PRO が目的節に生じる PRO の制御要素になれるかどうかということである。

- (77) a. It is time [PRO<sub>1</sub> to sink the boat [PRO<sub>2</sub> to collect the insurance]].  
b. \*This book sells quickly [PRO to make much money]. (大庭 (2017: 21))

(77a) の不定詞節にある PRO<sub>2</sub> は動詞 collect の動作主の意味役割を持ち、PRO<sub>2</sub> の制御要素は PRO<sub>1</sub> である。ところが、(77b) の中間構文では、主節に潜在する PRO が、不定詞節内の PRO の制御要素になれず、受け入れ不可となる。(76) と (77) の 2 点の文法性の違いは、他の要因によるものである、と大庭 (2017: 27) は考える。これは、出来事性 (event) である。Stroik (1992) によると、動作主指向の副詞や目的節は動作主を要求するだけでなく、その文が出来

事を表すことも必要とする。しかし、中間構文は出来事を表せない。これより、(76b) と (77b) のような中間構文の非文法性は、統語的に動作主が存在しないことに起因しているのではなく、動作主指向の副詞や目的節の生起条件を満たしていないということに原因がある、と大庭 (2017: 29) は論じている。これより、不定詞節内の PRO と同様、中間構文には発音されない動作主が統語的に存在すると仮定できる。

次に、「中間構文の動作主は統語的に存在しない」という立場の先行分析について取り上げていく。このような考え方の代表例としては、Fagan (1988) の分析が挙げられる。中間構文は統語的に生成されないため、語彙的に派生されるはずだと Fagan (1988) は主張している。本稿の 2.2.2 節でも取り上げた前置詞残留が、(78) で示されるように中間構文では適用されない。

(78) <sup>?</sup>The room breaks into easily. (Fagan (1988: 192))

(78) は非文法的ではないが容認度がやや下がる。中間構文における前置詞残留はごく限られた場合のみに適用される。この事実より、(78) の名詞句 *the room* のような中間動詞の内項は、名詞句の移動を経て外在化されることができないと論じられている。加えて、当該構文における動作主を表す外項は統語で具現化されず、語彙的に飽和 (*saturate*) される、と Fagan (1988: 198) は主張している。この語彙的アプローチについては、本稿の 2.6.2 節で紹介していく。

Fagan (1988) と同様に、当該構文の動作主を表す外項は、統語で具現化されないと Roberts (1987) も議論している。この動作主に関する分析を支持する理由が 2 つ挙げられている。1 つ目は、Class I Adverbs と呼ばれる副詞が中間構文で現れないことにある。Class I Adverbs とは、副詞が置かれる位置が文頭・助動詞の位置・文末という 3 つの位置が可能とされるものである<sup>23)</sup>。この分類に属する副詞としては、*cleverly*, *clumsily*, *carefully*, *deliberately*, *voluntarily*, *intentionally* などが挙げられている。

(79) a. \*The bureaucrats bribed voluntarily.  
b. \*The slave sold deliberately. (Roberts (1987: 84))

中間構文における動作主の不在と非事象性により、(79) の *voluntarily* や *deliberately* のような副詞が中間構文には起こらないと仮定される。従って、同表現の動作主項は統語上抑制され

---

<sup>23)</sup> Class I に属する副詞 *cleverly* が置かれる位置としては、(ia) のような文頭の位置と (ib) のような助動詞の位置と (ic) のような文末の位置の 3 つが挙げられている。

(i) a. *Cleverly*, John kissed Mary.  
b. John *cleverly* kissed Mary.  
c. John kissed Mary *cleverly*. (Roberts (1987: 72))

るはずである。2つ目の理由は、理由を表す節 (rationale clauses) は中間動詞と共起できないということである。

(80) \*The cook sold [to make money].

(Roberts (1987: 190))

構造上、中間構文には動作主項が明示されていないため、(80) のような目的節が共起できないと考えられている。目的節による制御要素については、上述の大庭 (2017) による指摘と同じであるが、Roberts (1987) はこれを問題点とし、中間構文には統語的には存在しないと捉えている。

以上より、中間構文には動作主が潜在する。この特徴については、先行研究の中で「統語的には動作主が存在する」という考え方と「統語的には存在しない」という考え方のように、大きく2つに分かれる。統語的に存在するという立場では、中間構文の潜在的動作主が PRO として統語表示されると仮定する。一方で、統語的には存在しないという立場においては、同表現の動作主は語彙的に抑制されると主張されている。

## 2.2.5 中間動詞に関わる形態素

受動構文の動詞は「be 動詞+過去分詞」という形式で、受動形態素が見られる。その一方で、中間動詞と能格動詞については動詞に形態素を伴って現れず、表面上対応する他動詞と形態的に区別できない。英語の中間構文では、動詞が能動形であるにも関わらず、意味においては受動的であることが重要な特徴であるとされてきた。しかし、言語によっては中間動詞と能格動詞に形態的变化が起きる場合がある。その一例がフランス語である。

(81) a. This shirt washes well.

b. Cette chemise se lave bien.

(藤田・松本 (2005: 94))

(81b) は (81a) の英語の中間構文と同じ意味の構文である。フランス語では、再帰代名詞の接辞化という形態統語論的方法によって中間動詞を形成する。(81b) の *se* が再帰代名詞に相当する。普遍文法では、ある言語において明白に観察される統語現象があった時、同じことが他言語でも生じるという観点で、言語を分析する。例えば、英語では顕著に見られる *wh*-移動 (*wh-movement*) が、日本語や中国語にも存在するが、音声解釈上の変化として顕在しない。このように考えると、英語の中間動詞にも (81b) のフランス語のように、態変換に関わる形態素が関与するということになる。この考え方は (82) のように定式化される。

(82) a. 英語の受動動詞 : EN + V

b. フランス語の中間動詞 : *se* + V

(82a) の EN は受動形態素を示し、動詞が持つ外項の主題役割を吸収するものである。(82b) は (81b) を公式化したものである。(82c) の  $\phi$  は空形態素を指し、音声的には空である。英語の中間動詞と能格動詞には表面上、他動詞との形態的違いがないように見えるが、この空形態素が動詞に結合することによって態変換が起こる。このような形態素の結合は、統語内で起きる派生操作の結果であり、その操作とは、主要部移動であると考えられている。空形態素を、独立した機能範疇主要部  $\mu$  であるとする、V から  $\mu$  へという主要部移動が形態統語論上のプロセスに関与することになる。機能範疇  $\mu$  には、活性化または不活性化する機能がある。不活性化とは格吸収 (case absorption) であり、英語の受動構文と中間構文と能格構文の派生で見られる。この派生については、2.6 節で概観する。

形式が能動であるにもかかわらず意味が受身になっているという中間動詞の特徴は、空形態素が含まれるという結果によって見られるものである。その形態素は音形を持たず、特別な形態的違いが見られないため、他動詞との差異がないように思われるが、このような形態素の存在によって中間動詞の特徴が確立されている。

### 2.2.6 まとめ

2.2 節では中間構文の統語的特性を 5 つ紹介した。第一に、中間構文の基底構造が他動詞構造であるため、当該構文の主語名詞は、他動詞の目的語であり、主題を表す (§2.2.1)。これより、当該構文は統語で派生されると考えられる。中間構文は統語では他動詞であるが、一方、能格構文は統語では自動詞である (Keyser and Roeper (1984: 386))。

第二に、中間構文は再分析を受けるが、 $\acute{S}$  削除ができない (§2.2.2)。この 2 つの統語現象は、当該構文が統語で派生されることの証拠である (Keyser and Roeper (1984))。能格構文は再分析を受けることができないため、派生場所も中間構文と異なると考えられる。加えて、受動構文は  $\acute{S}$  削除を適用できるため、中間構文には受動構文とも異なる特性がある。

第三に、中間動詞は通常副詞と共起する (§2.2.3)。修飾表現が見られない中間構文は容認度が下がるが、能格構文では副詞が不在でも受け入れられる (Keyser and Roeper (1984), Fagan (1988), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989))。

第四に、中間構文には潜在的動作主が含まれる (§2.2.4)。但し、この特徴については、「統語的に存在する」という立場と「統語的には存在しない」という立場の 2 つに分かれる。統語的存在の立場では、当該構文には PRO が存在するということにより、統語的な動作主が見られると主張する (Stroik (1992: 129-132), 大庭 (2017: 14-29))。この主張を裏付ける証拠としては、照応形が関与できるということ (Stroik (1992: 129)), for-句を含むことができること (Stroik (1992: 131)), 能動文の不定詞節と類似しているということ (大庭 (2017: 27)) が挙げられている。一方で、統語的には不在という立場では、同表現は語彙的に派生されるために動

作主が抑制されるということ (Fagan (1988: 192)) と、当該構文と共起できない副詞があることや目的節との共起ができないということ (Roberts (1987: 189-190)) から、動作主が統語では存在しないと主張する。

第五に、中間動詞に含まれる空形態素により態変換が起こる (§2.2.5)。当該構文の動詞について、形式が能動であるが意味は受動であるということが大きな特徴であるが、通常の他動詞と違い、抽象的な中間形態素が存在する (藤田・松本 (2005: 94-95), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 25))。このような形態素と他動詞との結合は統語内で起こるとされている。

## 2.3 形態的・語彙的特性

中間構文に関する形態的・語彙的特性は紹介されることは少ないが、従来、中間構文から派生されたと考えられる複合語について、様々な議論がなされてきた。以下、中間構文から派生された複合語は不可能であるという考えを概観し (§2.3.1)、そのような複合語は形成可能であるという考えを論じた後で (§2.3.2)、中間構文の形態的・語彙的特性をまとめる (§2.3.3)。

### 2.3.1 中間構文由来の複合語の不可

中間構文の複合語は語彙部門で作られるという前提がある。Keyser and Roeper (1984: 391-392) は、Roeper and Siegel (1978) の第一姉妹の法則 (First Sister Principle) に従うと適格だと予測されるが、実際には不適格であると述べている。第一姉妹の法則とは、全ての動詞由来複合語 (verbal compounds, あるいは総合複合語 (synthetic compounds)) は、動詞の第一姉妹の位置にある語を編入することによって形成されるという複合語形成の規則である (Roeper and Siegel (1978: 208))。総合複合語はこの規則により、動詞とその下位範疇化された補部から生成される<sup>24)</sup>。Keyser and Roeper (1984) は (83) の例を挙げて説明している。

- (83) a. They bribe bureaucrats easily. ⇒ bureaucrat-bribing  
 [+<sub>-</sub>NP]  
 b. Bureaucrats bribe easily. ⇒ \*easily-bribing  
 [+<sub>-</sub>(AdvP)] (Keyser and Roeper (1984: 392))

<sup>24)</sup> 動詞 make の下位範疇が (i) のように示され、その動詞を派生させた複合語が (ii) のとおりである。

(i) make: [<sub>NP</sub>] ([<sub>Adv</sub> ]), etc.

(ii) a. peacemaking

b. \*quick-making

(Roeper and Siegel (1978: 208))

(i) より、(iia) の複合語の第一要素 peace は動詞 make の第一姉妹の位置に置かれる目的語 NP であるため、(iia) は第一姉妹の法則を満たし、受け入れ可能となる。一方、(iib) では、動詞 make の第一姉妹になれない quick を取っているため、第一姉妹の法則に違反し、受け入れ不可となる。

(83a) の複合語の第一要素 *bureaucrat* は他動詞 *bribe* の第一姉妹の位置に置かれる目的語 NP であるため、*bureaucrat* は第一姉妹の法則を満たし、受け入れ可能となる。一方 (83b) は、中間規則 (middle rule) を (83a) の文に統語部門で適用したことで形成された中間構文である。(83b) の第一姉妹として考えられるのは、副詞 *easily* である。第一姉妹の法則に従い、その副詞を複合語の第一要素として取り、*easily-bribing* という総合複合語が成り立つと予測される。ところが、実際、副詞 *easily* は動詞 *bribe* の第一姉妹ではないため、(83b) のように \**easily-bribing* という語は成立しない。この結果より、中間構文は語彙部門では形成されず、統語部門で中間規則が適用され、形成される (Keyser and Roeper (1984: 392))。

Fagan (1988) も中間構文から派生される複合語は不適格であると分析しているが、上述の Keyser and Roeper (1984) とは異なる理由で説明している。(83b) の \**easily-bribing* は複合語ではなく、動詞状形容詞 (gerundive adjective) という統語的な句である (Fagan (1988: 186))。動詞状形容詞は事象を示し、永続的な特徴を示さないという句であり、例えば *the rapidly revolving gears* というものが該当する。中間構文は特定の事象を示さず、事象を示すという動詞状形容詞の条件に合わないため、\**easily-bribing* というような語が派生されないという考えもある。

従って、総合複合語が形成されるためには第一姉妹の法則が適用されるが、中間構文由来の複合語についてはその法則で説明できない。また、第一姉妹の法則以外の方法でも中間構文由来の-ing 形の複合語ができない。この結果から、当該構文から複合語を派生することができない。

### 2.3.2 中間構文由来の複合語の可能性

2.3.1 節では中間構文由来の複合語は実際成立しないという分析を取り上げたが、反対の意見を主張する分析もある。特殊化した場合は中間構文由来の複合語は適格となる (García de la Maza (2011: 171-172))。同表現の中には、語彙化プロセスを受け、意味が特殊化するものもあり、(84) のように例証されている。

- (84) a. They remind me of children's easy-readers. (García de la Maza (2011: 172))  
b. One of her plays, *My Funeral Tea*, is a best-seller in the United States and is also known in Australia. (García de la Maza (2011: 172))

(84) の語 *easy-reader* と *best-seller* には-er 名詞化が見られる。(84a) の *easy-readers* は「易しく読める本、学生用リーディングの練習本」を表し、(84b) の *best-seller* は「よく売れる本」を表す。双方の語の第二要素にある動詞 *sell* と *read* は中間構文で現れる頻度が高く、よく確立されるため、語彙化される。García de la Maza (2011: 173) によると、(84b) の *best-seller* を大規模コーパス BNC で検索したところ、本を表す語が 88%であり、車やゲームなどを意味す



る語が12%を占める。中間動詞に基づいて目的語の解釈が語彙化されているようだが、語彙化プロセスについては詳しく説明されていない。

以上のように、中間構文で頻繁に現れる動詞については、語彙化プロセスを受け、意味が特殊化し、複合語が成立する場合がある。従って、当該構文由来の複合語の形成ができないというわけではない。

### 2.3.3 まとめ

2.3 節で取り上げた中間構文の形態的・語彙的特性について以下にまとめる。従来の分析の中で、中間構文は複合化できないという考えと複合化できるという考えに分かれる。まず、中間構文由来の複合語は第一姉妹の法則に違反するため、当該構文由来の複合語は成立しない (§2.3.1)。この結果より、中間構文は語彙ではなく統語で派生されると分析されている。その一方で、中間動詞として現れる頻度が高いものは語彙化プロセスを受け、そこで形成された複合語の意味が特殊化されることもある (§2.3.2)。語彙化プロセスの具体的な方法については明かされていない。

## 2.4 機能的・語用論的特性

中間構文に関する機能的・語用論特性については先行分析で取り上げられることが少ないが、その観点からも当該構文について考える必要がある。2.4 節では中間構文に関する3つの機能的・語用論的特性について概観する。以下、当該構文が用いられる場面・言語の種類について紹介し (§2.4.1)、価値ある情報を提供するという語用論的特性を取り上げ (§2.4.2)、修飾語の必要性と目的節の付加について語用論的に説明した後 (§2.4.3)、本節で見えてきた一連の先行研究のポイントをまとめる (§2.4.4)。

### 2.4.1 中間構文が用いられる場面と言語

どのような場面・言語で中間構文を用いるのかということについて3つの特徴を取り上げる。第一に、広告の言葉で頻繁に使われる (Fellbaum(1985:29))。当該構文は頻繁に目にするわけではないが、(85a)のように商品の使用説明書や (85b)のように広告文で多く用いられる (松瀬・今泉 (2001:184))。

(85) a. These shirts wash cold water only.

b. The synthetic lubricant handles cold well, too, pouring easily at 55 degrees below zero.

(松瀬・今泉 (2001:184))

(85a) は「このシャツが水洗い専用である」という商品の説明文であり、(85b) は「合成潤滑油は低温でも扱いやすく零下 55 度でも注ぎやすい」という広告文である。どちらも主語名

詞の特徴を表し、主語名詞の属性という意味的特性 (§2.1.1) に関連がある。従って、当該構文の主語が商品を表す場合、その商品はある固有の性質を持つために、それを行為者が活用することで得られる効果について示される。

第二に、中間構文は、とりわけ官僚言語 (bureaucratic language) でよく見られる (Keyser and Roeper (1984: 383))。

(86) a. The baggage transfers efficiently.

b. The letters transpose easily.

(Keyser and Roeper (1984: 383))

Keyser and Roeper (1984) は官僚言語について詳しく紹介していないが、(86) のように接頭辞 trans- が付加された動詞を例に挙げている。

第三に、中間構文はロマンス語で頻繁に使われる (Keyser and Roeper (1984: 406))。ロマンス語の一例として、イタリア語が挙げられる。イタリア語の中間構文には格と動作主役割を吸収する接語 (clitic) があり、si で示される。一方、英語の当該構文には接語は存在しない。(87a) はイタリア語の中間構文の例であり、(87b) の英語の中間構文に相当する。

(87) a. Le mele si mangiano.

b. The apples eat.

(Keyser and Roeper (1984: 406))

イタリア語の中間構文には副詞が存在しなくとも成立する。加えて、フランス語にも接語 se を伴った中間構文が見られる (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989))。(88a) はフランス語の中間構文の例であり、(88b) は (88a) を英語に言い換えたものである。

(88) a. Le grec se traduit facilement.

b. Greek translates easily.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 1))

どのような言語で用いられるのかということに着目すると、英語の中間構文はロマンス語から影響を受けたとも考えられる。

上述のとおり、中間構文は広告の言葉や官僚言語として用いられる。英語の他にも、中間構文はイタリア語のようなロマンス語、フランス語でも使われるが、接語の有無に違いがある。

#### 2.4.2 価値ある情報提供の必要性

中間構文に関する重要な語用論的特性として、価値ある情報 (newsworthy information) を与えることが必要であることが挙げられる (Fellbaum (1985: 23), García de la Maza (2011: 164-

165))。主語の特質と動詞が表す行為の関係が、中間構文の容認性を決めるとされ、当該構文の主語が定の場合は受け入れ可能となり、不定の主語の場合は同表現の容認度が下がるといふことが、その特性を裏付けている。以下、(89) の文法性のコントラストを用いながら、García de la Maza (2011) の分析をまとめる。

(89) a. ?Cars wash well.

b. This jumper washes well.

(García de la Maza (2011: 165))

不定の主語 *cars* で示される (89a) の文では、「洗車できるのは、車の固有の特性である」という解釈となり、特別な文脈がない。このように、(89a) は価値ある情報を伝えず、当然のことを述べているため、語用論的に妥当ではない。一方、(89b) では定の主語 *this jumper* で示され、「サイズ、素材、色など様々なジャンパーがある中で、このジャンパーが洗しやすい」というように価値ある情報が与えられている。従って、(89b) は伝える価値のある情報を提供した文であるため、適格な文となる。

場合によっては、不定の主語名詞でも受け入れ可能となることもある。

(90) Chickens kill easily.

(García de la Maza (2011: 165))

(90) の主語は不定であるにも関わらず、受け入れ可能となる。ここでは、他の動物と比較し、例えば「トラの場合は難しいが、鶏の場合は易しい」というような情報を提供しているため、受け入れ可能となる。

従って、中間構文は伝える価値がある情報を提供するという語用論的特性を満たす必要がある。価値ある情報を与えるためには、当該構文の主語が定であることが必要であるが、不定の主語の場合も特別な情報が提供されていると解釈できれば、文法的な中間構文となる。

### 2.4.3 修飾語の必要性和目的節の付加

2.1.3 節の意味的特性と 2.2.3 節の統語的特性で取り上げたように、中間構文では副詞及び修飾表現を必要とする。また、2.2.4 節で目的を表す不定詞節が中間構文では現れないという統語的特性も紹介した。この2つの特性は統語的要因だけでなく、語用論的要因も関わるとされる。以下、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) の分析を概観する。

第一に、修飾語の必要性は語用論的である (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 20))。中間構文で必要とされる修飾語が欠如すると容認度が下がるが、これは焦点 (focus) の必要性のためと考えられる。焦点の必要性とは目的語が移動するために生じるもので、当該構文の派生では目的語の移動を伴うため、移動元の右側に空所 (gap) が生じるということである。中間構文は削除変形受動文 (truncated transformation passives) と類似している。削除変形受動文とは

(91b) のように by 句が現れない受動構文であり, (91a) はその基底文である。

(91) a. Mary called John.

b. John was called  $e_i$ .

談話の中で, 削除変形受動文が連続して現れる場合は, (91b) のように副詞表現がなくてもよい。Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) は詳しく論じていないが, 中間構文の基底構造は (92a) のようなものであり, 目的語 Greek が主語位置の [ ] へ移動し, (92b) のようになると考えられる。目的語の移動を伴うため, 移動元の右側に空所が生じる。さらに, その文に焦点を置く要素が求められ, 修飾語が必要となる。(92b) の空所の  $e_i$  に焦点を置きたいが, 置くことができないため, このような文では成立しない。しかし (92c) のように修飾語 easily を置くと, 焦点を担う要素が現れる。また (92d) のように by Mary という明示的な動作主があれば, それに焦点が置かれ, 修飾語は不要となるが, 中間構文には潜在的動作主があるため, by 句と共起できない。

(92) a. [ ] translates Greek.

b. Greek <sub>$i$</sub>  translates  $e_i$ .

c. Greek <sub>$i$</sub>  translates  $e_i$  easily.

d. \*Greek <sub>$i$</sub>  translates  $e_i$  by Mary.

これより, 潜在的動作主が存在する場合は, (92c) の easily のような修飾語が必要となる。これが, 中間構文における潜在的動作主の存在の証拠として挙げられている。従って, 中間構文では基底構造の目的語が移動することによって, 移動後の空所が生じ, 焦点の必要性が出てくる。この焦点を当てる役目は副詞が果たす。

第二に, 中間構文では目的を示す不定詞節が語用論的に受け入れられる場合がある (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 28))。

(93) This dog food cuts and chews like meat in order (PRO) to make your pet happy.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 28))

通常, 動作主が目的節の PRO をコントロールすると考えるが, (93) の主語 dog food は生物に関するものである。従って, (93) の PRO をコントロールするのは犬ではなく, 外的コントローラー (external controller) であり, ここでは「飼い主」が該当する。このように語用論ではどのような状況でコントロールできるのかを考え, 文脈に合えば受け入れ可能となる場合がある。

以上のように、中間構文の特性について語用論的に説明できるものもある。修飾語の必要性については統語的要因だけでなく、語用論的要因からも考えられる。それに加え、語用論的には中間構文で目的節が後続できる場合もある。

#### 2.4.4 まとめ

2.4 節で概観した中間構文の機能的・語用論的特性 3 点を以下にまとめる。第一に、中間構文が頻繁に使われるのは広告文や商品の使用説明書、官僚言語であり、ロマンス語でも使われる傾向にある (§2.4.1)。当該構文は主語名詞の固有の特性を表すため、広告言葉として用いられる。イタリア語やフランス語では接語が存在するが、英語には存在しない。

第二に、中間構文では伝える価値のある情報を提供する必要がある (§2.4.2)。不定の主語名詞の場合は価値のある情報を伝えられず容認度が下がるが、定の主語で表される場合はその条件を満たし、受け入れ可能となる。不定の主語でも受け入れ可能となる場合があるが、伝える価値のある情報を提供するような文脈で解釈できれば適格な文となる。

第三に、中間構文における修飾語の必要性や目的節の付加については統語的要因だけでなく、語用論的要因も見られる (§2.4.3)。当該構文の派生の際に、目的語の移動によって空所が生じ、焦点の必要性が出てくるが、この役目を果たせるのは副詞及び修飾語である。加えて、目的を示す不定詞節が語用論的に受け入れ可能となる場合がある。

### 2.5 特殊な中間構文

典型的な中間構文とは、*This book sells well* のような文だと考えられるが、それ以外にも典型的なタイプからはみ出すものがある。本節では特殊な中間構文について紹介していく。以下、擬似中間構文について取り上げ (§2.5.1)、再帰中間構文について紹介した後 (§2.5.2)、本節で見てきた一連の先行研究のポイントをまとめる (§2.5.3)。

#### 2.5.1 擬似中間構文

典型的な中間構文では、他動詞の目的語が主語位置に置かれ、主題を表す。しかし当該構文の中には、道具あるいは場所を表す名詞が主語位置に来るという擬似中間構文 (*pseudo-middles*) がある。(94) のような文が擬似中間構文に該当するとされる。

(94) a. *This knife cuts well.*

b. *This lake fishes well.*

(松瀬・今泉 (2001: 206))

(94a) の主語 *this knife* は道具を表し、「このナイフはよく切れる」という主語の特性が表されている。(94b) の主語 *this lake* は場所を表し、「この湖はよく釣れる」と解釈できる。(94) はどちらも主語の意味役割が主題ではないが、典型的な中間構文と同様に主語の固有の属性を

表すため、中間構文の一種として受け入れられる。(94) のような擬似中間構文は典型的な中間構文よりも主語名詞に対する意味制限が増すため、構文としての生産性が低い(影山(2004:131))。擬似中間構文は、通常の間構文が道具や場所名詞にまで拡張されたという考えがあるが、この構文の性質については十分に解明されていない(松瀬・今泉(2001:206))。

先行研究によっては、(95a) のようなものを擬似中間構文とみなすものがある(García de la Maza(2011:175))。(95a) は(95b) のように言い換えられる。

(95) a. She takes a good photograph, though.

b. Indeed a Rank executive told her she was an ugly girl with no talent who photographed terribly. (García de la Maza(2011:175))

(95a) は一見「彼女が写真を撮った」と解釈される文ではあるが、(95b) の解釈文に従うと、主語 *she* は能動文の目的語と一致し、「写真に写っている人」を意味する。García de la Maza(2011) は、(94b) に似ている文を例に挙げ、特殊な中間構文の一種と考えているが、擬似中間構文とは示していない。(96) がその例である。

(96) Futon Company new sofa seats 3, sleeps 2, and costs just £ 199.

(García de la Maza(2011:176))

(96) の主語名詞 *sofa* が場所を表す付加詞であるが、「3人が座るのに適している」という特徴を示している。(96) の文について、典型的な中間構文との違いとしては、主語名詞の意味役割が挙げられているが、その他に目的語があるが、含意主語がないと紹介されている(García de la Maza(2011:176))。(94) と同様、(96) のような構文も主語の固有の属性を表すため、中間構文と考えられる。

典型的な中間構文の主語の意味役割が主題とされていたが、道具や場所を表す名詞が主語位置に置かれる特殊なタイプが見られる。このような表現は、典型的なタイプと同様、主語の固有の性質について解釈できるため、中間構文の一種としてみなされる。

## 2.5.2 再帰中間構文

擬似中間構文の他にも、特殊なタイプとして、再帰中間構文(*reflexive middles*) という表現がある。これは文の後半に *itself* のような再帰形が現れるタイプであり、(97) のように例証されている。

(97) a. The subsequent article almost writes itself.

(García de la Maza(2011:175))

b. Foreign cars sell themselves.

(松瀬・今泉(2001:205))

(97a) の再帰形 *itself* は「独りでに」(*without aid*) という意味になる (松瀬・今泉 (2001:205), García de la Maza (2011:175))。 (97b) は「放っておいても売れる」という解釈の再帰中間構文である。(97) のような再帰形は, 典型的な中間構文に必要な副詞と同じ機能を果たす (García de la Maza (2011:175))。その証拠として, (98a) と (98b) のように別の副詞表現と共起できないことが挙げられる。(98) は (97b) の文に副詞 *easily* を付加したもので, 再帰形と副詞の語順を変えても, 受け入れられない。

(98) a. \*Foreign cars sell themselves easily.

b. \*Foreign cars sell easily themselves.

(García de la Maza (2011:175))

再帰中間構文が可能である動詞のタイプとしては, 自動詞用法と他動詞用法の両方を持つ動詞や (97b) のような他動詞用法のみのものが挙げられ, 作成動詞は再帰中間構文ができない (松瀬・今泉 (2001:205))。ところが, (97a) の動詞 *write* や *compose* は再帰中間構文を容認する, と松瀬・今泉 (2001:205-206) は説明している。動詞のタイプに制限があるという点も典型的な中間構文と類似している。

再帰中間構文は, 典型的な中間構文とは形式が異なる。再帰形が副詞表現の代わりに現れ, 動詞のタイプに制限があるという点で, 中間構文に似ているとされている。

### 2.5.3 まとめ

中間構文の特殊タイプとして, 2種類の表現を紹介した。まず1つ目が, 擬似中間構文である (§2.5.1)。主語名詞の意味役割が道具や場所であるが, その名詞の属性を表すという特徴が典型的な中間構文と類似している。2つ目が, 再帰中間構文である (§2.5.2)。典型的な中間構文で必要とされる副詞表現の代わりに, 再帰形が用いられることがあり, このタイプが許される動詞に制限があるという点で典型的なタイプと同じである。

## 2.6 中間構文の派生

中間構文の派生方法については様々な分野で分析されている。2.6 節では中間構文の派生方法について紹介していく。以下, 統語的派生方法について取り上げ (§2.6.1), 語彙的方法について紹介 (§2.6.2), 語彙意味論的に形成されるという分析について説明した後 (§2.6.3), 本節で見てきた当該構文の派生方法のポイントをまとめる (§2.6.4)。

### 2.6.1 統語的アプローチ

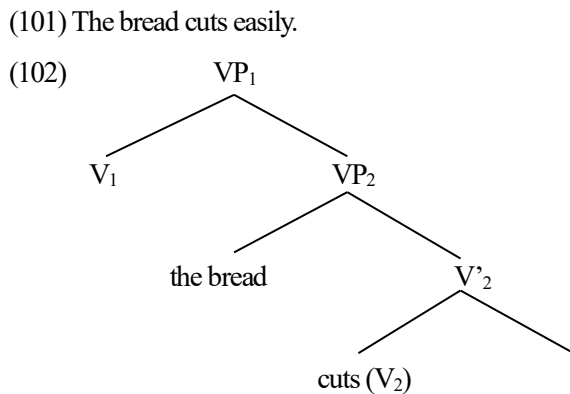
中間構文の派生に関する統語的アプローチとして, Keyser and Roeper (1984) と Kaga (2007) がそれぞれ提案した派生方法及び中間構文の構造について2点紹介していく。第一に, 中間

構文は、受動構文と同じ方法により統語で派生される (Keyser and Roeper (1984: 400-401))<sup>25</sup>。生成方法は (99) のように仮定し、受動構文と同様の方法で生成される。(100a) は、(100b) で示される中間構文の基底文である。

- (99) a. 主語名詞句 [NP, S] は、意味役割を受け取らない。  
 b. 目的語の名詞句 [NP, VP] は、動詞句の中で格を受け取らない。
- (100) a. NP Aux bribe bureaucrats easily.  
 b. Bureaucrats bribe easily. (Keyser and Roeper (1984: 401))

まず (99) に従い、(100a) の主語名詞句 NP に意味役割を与えないようにし、目的語 bureaucrats は VP の中で格を受け取らないようにする。(100b) の中間動詞 bribe は「賄賂が送られる」という受身を表し、受動文に見られる過去分詞と意味が似ているため、動詞 bribe は目的語 bureaucrats に格を与える力がないと考える。そして、意味役割は動詞 bribe によって目的語 bureaucrats に与えられる。最後に、目的語 bureaucrats は、格を受け取れる場所、すなわち主語位置に移動する。この移動した名詞句 bureaucrats は Aux (助動詞, Auxiliary) から格を受け取る。この過程より、(100b) の中間構文が形成される。

第二の方法としては、分裂 VP 構造 (VP-shell 構造) を用いて、不活性 (inactive) という現象を適用した方法である。Larson (1988) の VP-shell 構造から (101) の中間構文を考えると、同表現は (102) のような基底構造を持つ (Kaga (2007: 203-204))。



(Kaga (2007: 204))

<sup>25</sup> 受動構文の派生を概観する。(i) は (ii) の受動構文の基底文である。

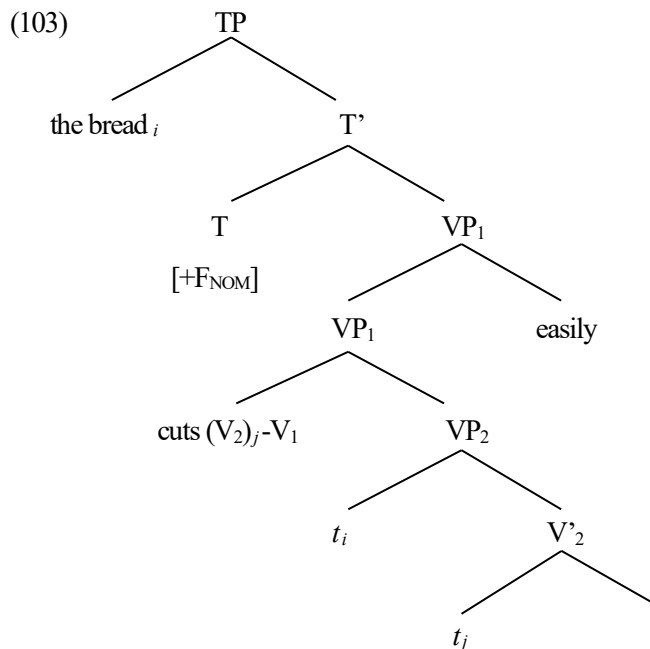
(i) NP Aux kicked the ball.

(ii) The ball was kicked.

(i) の [NP, VP] の the ball は過去分詞 kicked から格を受け取れない。格フィルター (case filter) の制限より、名詞句は必ず格を受け取らなければならないため、(i) の目的語 the ball は、格を受け取れる場所 [NP, S] に移動し、助動詞 (Aux, Auxiliary) から格を受け取る。このようにして、受動構文は形成される。



(102) の基底構造のとおり，中間構文は能格構文や非対格構文と同様，上位の V (upper V)，つまり  $V_1$  が不活性化されている。不活性とは非能動的としても言い換えられるが，この性質の構造を持つことにより，同表現の基底構造にある動詞は格付与の素性を持たず，意味役割も付与できない。副詞 *easily* については，基底構造の段階では含まれないと仮定する。(102) の基底構造に中間構文形成の規則を適用した結果，同表現の表層構造は (103) のようになる。



(Kaga (2007: 204))

二重目的語構造を用いる分析で考えると，(103) の  $t_j$  位置にあった動詞 *cuts* には利用できる対格の標示子がないため，より高い位置にある  $V_1$  へ移動し，基底では  $t_i$  に位置づけられた名詞 *the bread* が [Spec, TP] へ移動する。名詞 *the bread* は [Spec, VP<sub>2</sub>] では格を受け取れなかったが，[Spec, TP] へ移動することによって，T から主格 (Nominative, NOM) が付与される。(102) の段階では含まれないとされていた副詞は，VP または TP の節点 (node) に付加される。(103) のような構造を持つものが，適格な中間構文になる。加えて (102) の基底構造より，上位の V が不活性化されているため，中間構文は動作主を表す項を含まないと仮定する (Kaga (2007: 205))。

(102) と (103) のような構造及び上述の仮定より，中間構文に関する 3 つの特徴を説明できる。1 つ目は (104a) のように同表現では *by* 句による外項が顕在しないということ，2 つ目は (104b) の *carefully* のような動作主指向の副詞が同表現に合わないということ，そして 3 つ目は (104c) で示されるように目的節が同表現では認可されないということである。

(104) a. This bread cuts easily (\*by John).

b. This book reads easily/\*carefully.

c. \*Bureaucrats bribe easily to keep them happy.

(Kaga (2007: 205))

(102) や (103) のように、動作主を含まない構造であれば、(104a) 及び (104b) のような現象について説明できる。(104c) が不可なのは、動作主の要素が存在しないため、目的節内の PRO をコントロールできないということになる。(101) の動詞 cut は手段を表し、「誰かが道具を使って切る」と解釈できる。動作主については統語構造では現れないが、解釈のレベルで潜在的動作主を捉えるとみなす。

以上、中間構文の派生方法を統語的に分析すると、名詞句の移動が起こっている。Keyser and Roeper (1984) は受動構文と同様の規則がかかることで、中間構文が形成されると考える。一方、Kaga (2007) は VP-shell 構造に基づき、同表現の基底構造にある動詞が不活性されていると考える。基底構造の上位の V が格付与の素性と意味役割を付与する力がないため、能格構文や非対格構文と同様の構造を持つ。また、中間構文に潜在する動作主については、基底構造では含まれず、道具や手段を表す表現によって解釈レベルで引き出されるということが統語的分析によって主張されている。

## 2.6.2 語彙的アプローチ

2.6.1 節で紹介した Keyser and Roeper (1984) の分析に反論し、中間構文は語彙 (lexicon) で派生されると、Fagan (1988: 184) は主張している。本節では、Fagan (1988) が提案した中間構文の語彙的派生方法を概観する。

中間構文を統語論で派生させる Keyser and Roeper (1984) への反論として、前置詞残留にまつわる議論を挙げる。(105) を見よう。

(105) a. ?John laughs at easily.

b. John was laughed at.

(Fagan (1988: 194))

(105a) の中間構文では容認度がやや落ちるものの、前置詞を残すことができる。また (105b) の受動構文でも前置詞残留が可能となる。Keyser and Roeper (1984: 407-408) によると、動詞と前置詞を統合させる再分析が統語論で行われた後、中間構文形成規則が適用されることになる。従って、同規則は統語論で適用されることが示される。しかしながら、Fagan (1988: 193) は Keyser and Roeper (1984) に反して、前置詞残留に係わる中間構文は一般に非文法的であると主張する。Keyser and Roeper (1984) によると、中間構文は Move  $\alpha$  の中心 (core) 環境に限られるが、受動構文は中心環境でも例外 (exceptional)、あるいは周辺的 (peripheral) 環境でも適用される。前置詞残留に係わる中間構文の容認度がやや落ちるのは、周辺的な現象である再分析の後に、中核的な中間構文形成を行うからである。しかしながら、この説明では中間

構文が前置詞残留を許さないと述べているだけにすぎず、どのような規則が中心的あるいは例外的なのかということが明らかになっていない、と Fagan (1988: 194) は指摘している。以上の前置詞残留に関する事実は、中間構文が統語的に派生される証拠にならないことを示している (Fagan (1988: 195))。

Fagan (1988) は Rizzi (1986) による意味役割の飽和 ( $\theta$ -role saturation) の概念を使い、中間構文の語彙的派生方法を提案している。(106) の例を用いて、飽和について説明する。

(106) a. This sign cautions people against avalanches.

b. This sign cautions against avalanches. (Rizzi (1986: 501))

(106b) では、(106a) に現れる *people* が省略されている。Rizzi (1986) によると、私たちが「誰が何をするのか」ということがわかっている時、「誰が」を表す意味役割が飽和 (saturate) される。飽和は通常、投射原理 (Projection Principle) と  $\theta$  基準 ( $\theta$ -criterion) によって統語で行われるが、語彙でも起こることができる、と Rizzi (1986) は論じている。加えて、「直接目的語に与えられる意味役割に総称的解釈 (arb) を与えよ」という規則が語彙で適用されると述べている。この規則により、表現されない項の意味役割が適正に飽和される。

上述の Rizzi (1986) の分析を活かし、Fagan (1988: 184) は (107) のような語彙規則を提案し、中間構文の語彙的派生方法を考える。

(107) a. 外項に与えられる意味役割に任意の解釈 (arbitrary interpretation, arb) を与えよ。

b. 直接目的語の意味役割を外在化せよ。

(107a) の任意の解釈とは、[+human, +generic] のような素性を持つもので、*people in general* という句が当てはまる。(107a) により、語彙項目が中間構文に変形される時、語彙項目の外項に与えられる意味役割が省略される。次に (107b) を適用し、直接目的語の意味役割を主語と連結させることができる。この規則に従うと、他動詞から自動詞へと交替できる。加えて (107) の語彙規則は、中間構文の意味的特性の 1 つであった総称性を反映できる。(108a) の中間構文は (108b) の文に言い換えられるが、この事実は (107) の規則と関連づけられる。

(108) a. This book reads easily.

b. People, in general, can read this book easily. (Fagan (1988: 196))

以上のように、中間構文は統語的移動に関係なく、語彙で派生される (Fagan (1988: 202))。

### 2.6.3 語彙意味論的アプローチ

語彙意味論の観点から中間構文の派生方法について仮定されることがよくある。本節では、4つの語彙意味論的アプローチを順次紹介していく。以下、Grimshaw(1990)の分析 (§2.6.3.1) や Kageyama(2006)の分析 (§2.6.3.2), Randall(2010)による中間構文の派生について概観した後 (§2.6.3.3), Oshita(1994)による中間構文由来複合語の派生に関する語彙意味論的分析 (§2.6.3.4)を順次概観していく。

#### 2.6.3.1 Grimshaw(1990)による中間動詞の項構造

Grimshaw(1990)は、項構造(argument structure)が一組の項(外項と内項)から成るのではなく、優位関係(prominence relations)が定義される上で構成されたものだと主張している。外項すなわち動作主(agent)が最も優位にあり、主題(theme)や起点(source)などの内項にもそれぞれ優位関係がある。項構造は(109)のような主題階層(thematic hierarchy)に従って構成される。

(109) (Agent (Experiencer (Goal/ Source/ Location (Theme)))) (Grimshaw(1990: 8))

同書には、中間構文は抑制される項の位置(suppressed argument position)を持たない、という論述がある。抑制される項の位置とは、by句などの付加詞(argument adjunct)に現れる位置であり、項構造に規制されているが、項構造の位置を満たせないものである。例えば、(110a)のような受動構文では外項が抑制され、その受動動詞の項構造は(110b)のとおりであるとされる。

(110) a. The book was written by two linguistics.

b. (x-φ (y))

Agent Theme

(Grimshaw(1990: 115))

能動文として用いられる動詞writeの項構造は、動作主を表す外項xと主題を表す内項yで成り立つが、(110a)のような受動構文形成の際に、外項xのみが語彙的に抑制され、(110b)のように、x-φとなる。最も優位にある項のみが、外項と結びつくby句を持つことができ、この場合は抑制された外項(x-φ)が該当する。(110b)の動作主項(x-φ)がby句として認可され、動作主を表す項が明示化される。by句という抑制された項は、優位にある項であるため、主題を表す内項y、すなわち、受動構文の主語はby句よりも階層上低い位置にある。従って、受動構文では、抑制される項の位置を持つため、by句と共起できる。

その一方で、中間構文については、(111a)で示されるようにby句と共起できない。その中間動詞readに関する項構造は(111b)で示される。

(111) a. \*These books read well by children.

b. read ((x))

(Grimshaw (1990: 136))

中間構文では項構造上、優位に立つ項は、主題を表す内項である。(111b) の x は主題を表し、(111a) では名詞句 *these books* が x に該当する。中間構文では (111b) の項構造で示されるように、抑制される項の位置を持たないため、by 句と共起できず、(111a) は非文法的な文となる。

以上のように、項構造に着目することにより、該当動詞がどのような構文を可能とするのかということがわかる。by 句と中間動詞が共起しない事実についても項構造で説明できる。

### 2.6.3.2 Kageyama (2006)

Kageyama (2006) は態に関する研究を行い、事象記述 (event description) から特性記述 (property description) への意味的タイプの推移があり、このタイプの推移が中間構文などで項を減らすと議論している。事象記述とは、特定の空間、時間的領域で特定の出来事が実際にあるいは仮に起こることを示すもので、これに関与できる動詞は段階レベルの述語 (stage-level predicates) と呼ばれる。一方、特性記述とはある特定の時に限られず、主語の固有の性質を表すものであり、これに関わる動詞は個体レベルの述語 (individual-level predicates) という。段階レベル述語から個体レベル述語への推移が、中間構文や特殊タイプの受動構文、再帰構文で行われる (Kageyama (2006: 87))。

中間構文は特定の事象 (event) を示すことができず、主語の恒常的性質を表すという意味的特性がある。加えて、中間動詞は、時間と空間を表す副詞と共起できないため、個体レベル述語である。当該構文には、動作主役割に与えられる任意の pro (arbitrary pro), すなわち不特定の動作主があるため、個体レベル述語が関与すると考えられる。このような特徴より、中間構文形成の主要な機能は、事象抑制 (event suppression, Ev-suppression) であり、その副次的な結果として動作主抑制が起こる (Kageyama (2006: 101))。抑制とは、明示されている項が音形を持たずに実現されないことであり、特別な意味情報を担う時のみ付加詞として実現されるというものである。(112) の形式のように、項構造上、事象抑制と動作主抑制が起こることで、中間構文が形成される。

(112) (Ev (x <y>)) → (Ev ^ (x <y>)) → (Ev ^ (x ^ <y>)) → λ<sub>y</sub>(Ev ^ (x ^ <y>))

Ev- suppression

agent suppression

property description by lambda abstraction

(Kageyama (2006: 102))

(112) の記号 ^ (tuned V) は抑制を表す。(112) で示されるように、事象抑制が働くことによって、事象項 (Event argument) が抑制され、その付随的な結果として動作主抑圧 (agent

suppression) が起こり、その作用によって動作主項  $x$  も抑圧され、項構造が  $(Ev \wedge (x \wedge \langle y \rangle))$  となる。加えて、ラムダ記号 ( $\lambda$ ) によって特性記述を表す構造へと推移し、 $\lambda_y(Ev \wedge (x \wedge \langle y \rangle))$  となる。

以上のように、語彙構造で事象抑制が起こることによって中間構文が形成される。動作主が潜在化されるのは、事象抑制の副次的結果として動作主抑制が生じるためである。このような作用によって、項構造の変化すなわち態交替が起こり、加えて同表現は事象を表せないとされる。

### 2.6.3.3 Randall (2010)

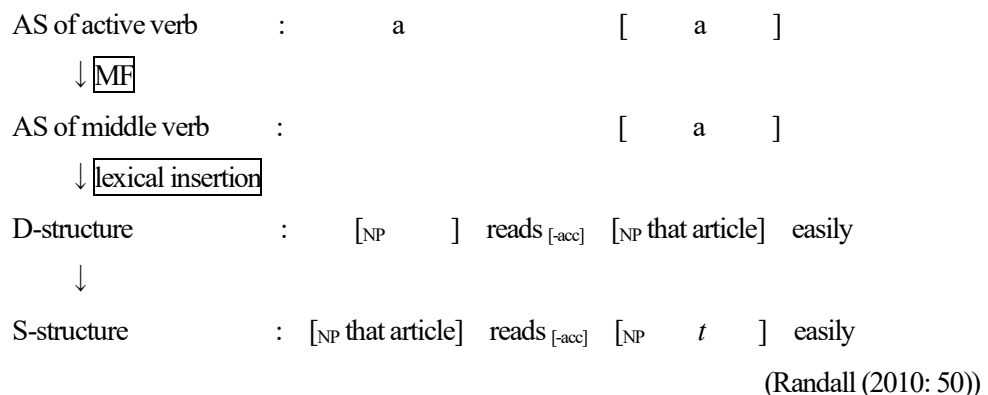
Randall (2010) は、語彙概念構造 (Conceptual Structure, CS) の連結節点が統語の最終節点に同一構造上配置されるという同一構造の連結仮説 (Isomorphic Linking Hypothesis, ILH) を提唱し、統語構造と項構造、意味構造のつながりについて論じている。以下、(113) の文を用いて Randall (2010) の中間構文の派生を概観する。

(113) That article reads easily. (Randall (2010: 47))

中間構文形成の規則 (Middle Formation, 以下 MF) は (114) のように定義され、以下にその生成過程を図示する。

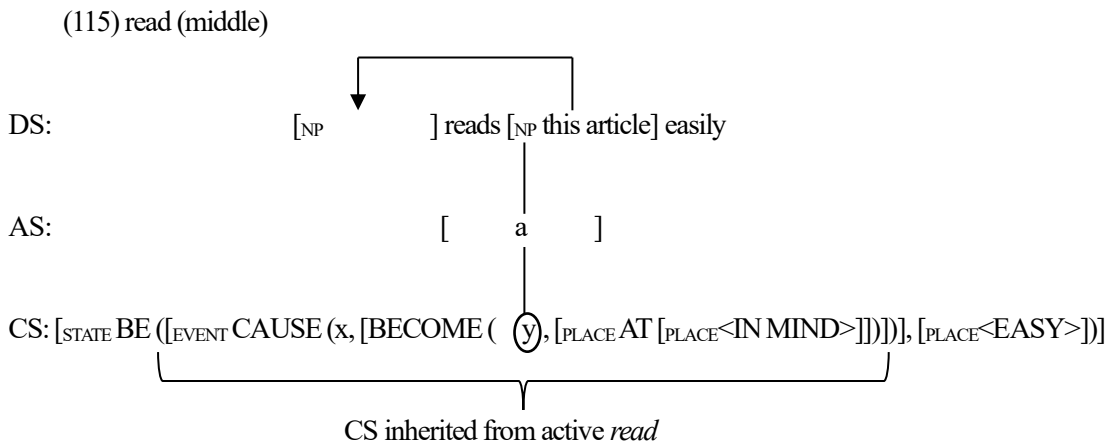
#### (114) Middle Formation (MF)

動詞の外項を抑制せよ。次に、直接内項を外在化せよ。



(114) の図中にある AS とは項構造のことである。まずレキシコン (語彙部門) の中で MF を能動動詞 (active verb) に適用し、外項  $a$  を削除する。次に語彙挿入 (lexical insertion) により、中間動詞の項構造にある内項 [  $a$  ] に単語を挿入すると、基底構造 (D 構造, D-structure) で [ $NP$  ] reads [ $NP$  that article] easily となる。D 構造にある直接内項 [ $NP$  that article] を外在化

させ、表層構造 (S-structure, S 構造) で (113) のような中間構文が生成される。語彙挿入の後の操作は統語で行われる。(114) の定義を仮定すると、(113) の中間構文で見られる意味構造 (CS)・項構造 (AS)・統語構造 (DS) の結合関係は (115) のようになる。



(Randall (2010: 122))

(115) より、CS 内の主題項は AS 内の内項 [ a ] に、さらに DS の [NP this article] にリンクされる。AS の外項は抑制 (suppression) を受けるため DS の項とリンクされず、DS の外項は空の状態となる。また動詞 read は格付与特性を取り除かれるため、内項 [NP this article] に格を付与できない。音形を持つ名詞句は必ず動詞から格を受け取らなければならないという格フィルターの理論に従い、基底構造で目的語位置にある名詞句 this article は、格を受け取るために主語位置に移動する。MF によって新しく表示される CS の意味範疇は STATE と示され、「誰かがこの記事を読むことは簡単である」という状態を意味する。動詞 read の CS の後半部にある [PLACE AT [PLACE<IN MIND>]] は、「読むという行為によって、主題項 y が主語の心に入る」という意味で表示されている。加えて、(115) の CS 部分に、“CS inherited from active read” と記載されているが、これは能動動詞 read の CS を表し、中間構文が形成される上で、その能動動詞の意味構造がそのまま中間構文の意味構造に反映されることを示している。以上のように、中間構文に見られる意味構造・項構造・統語構造は規則的に結び付けられる。

#### 2.6.3.4 Oshita (1994)

2.6.3.1 節で概観した Grimshaw (1990) による項構造の分析に基づき、Oshita (1994) は英語の動詞由来形容詞 (deverbal adjectives) を分析している。その分析の中で、中間動詞の項構造および同表現由来の複合語について言及されている。以下、Oshita (1994) の分析を概観する。

動詞の項構造は (116) のように表示され、これに基づいて様々な動詞の項構造が明示されている。

(116) (P-1 (P-2 (P-3)))

(Oshita (1994: 249))

Grimshaw (1990) の主題階層を仮定し、動作主が優位にあり、主題項が最も目立たない位置にあると考える。(116) の P-1, P-2, P-3 は項を表し、P は位置 (position) を表す。P-1 には外項、P-2 には間接内項 (indirect argument), P-3 には直接内項が入る。ここでの項構造には意味役割を入れずに考えていく。

中間構文に関与できる動詞は、(117) のようなプロセスを通して項が外在化されていると主張されている。

(117) Transitive:  $(x (\phi (y_i))) \Rightarrow$  Middle:  $(x_i (\text{adv} (\phi)))$

middle formation

(Oshita (1994: 251))

中間構文の基底構造では他動的であり、内項の移動規則が適用される。移動規則適用後の中間動詞の  $x_i$  は、基底構造他動詞の  $y$  と同じものを示す。副詞の位置が内項の位置ではなく、P-2 にある。その理由として、(118) のような文が見られる。

(118) a. \*How easily do you wonder whether politicians bribe  $t$  ?

b. ?What promises do you wonder whether politicians can keep  $t$  ? (Oshita (1994: 251))

もし中間構文の副詞が (118a) の  $t$  で示される内項の位置にあるとすると、(118b) のようにやや受け入れ可能となるはずだが、非文法的な文となる。従って、P-3 の内項の位置に副詞が置かれない。

動詞由来の形容詞の形成は項構造の交替によるプロセスが働き、(117) のような項構造であれば、動詞由来形容詞の派生も説明できる。動詞由来の形容詞は (119) のような規則が作用する (Oshita (1994: 253))。

(119) 現在分詞の形容詞の形成規則

P-1 項を R 束縛 (R-bind) せよ。(P-1 項がなければ任意になる。)

(119a) の R は指示物 (reference) を指す。この規則に従い、中間動詞からなる現在分詞形 (-ing 形) の形容詞について、(120) のように考える。

(120) Middle:  $(x (\text{adv} (\phi))) \Rightarrow$  Adj:  $R=x (x (\text{adv} (\phi)))$

a. Books sell best.

b. best-selling books

(Oshita (1994: 256))



中間動詞の項構造より、P-1にあるxを、その派生された形容詞 *selling* の指示物にし、*selling books* となる。そして、中間動詞の副詞要素は現在分詞の前に置かれ、*best-selling* という形容詞ができる。以上のように、中間構文および複合語の形成について項構造を用いて説明できる。

#### 2.6.4 まとめ

中間構文の派生方法としては3つのアプローチに分かれる。第一に、統語的観点から名詞句の移動が見られる (§2.6.1)。基底構造にある目的語が主語位置に移動するというもので、統語で行われる。この方法は受動構文、能格構文、非対格構文と同じだとされる。

第二に、中間構文は語彙部門で派生されるという分析がある (§2.6.2)。同表現では前置詞残留が起こらないという事実より、統語的移動に関する証拠が与えられないと考える。Fagan (1988) が提案した語彙的規則であれば、中間構文の総称性を反映できる。

第三に、項構造を中心とした語彙意味論的アプローチが幾つかある (§2.6.3)。項構造に態交替が生じ、当該構文は事象ではなく、主語名詞の特性を表す。中間動詞の項構造では、動作主項が示されず、抑制されるが、この動作主抑制は事象抑制の副次的な結果であるとされる。この項構造は意味構造を基に形成され、統語構造につながる。項構造のアプローチは、中間構文だけでなく、当該構文由来の語の形成についても説明できる。

### 2.7 日本語の中間構文

これまで英語の中間構文について取り上げたが、日本語にも中間構文があると先行分析で紹介されている。英語と比べ、従来の分析で取り上げられることは少ないが、英語の中間構文に関連できると考えられる。本節では、Taguchi (2007) の分析を中心に、日本語の中間構文に関する分析を概観する。まずは日本語の中間構文の特性を記述的に述べ (§2.7.1)、同表現の派生方法について説明する (§2.7.2)。

#### 2.7.1 特性

日本語の中間構文と英語の中間構文の共通点が3つある。日本語の中間構文も、対象物 (theme) が主語であり、主語名詞の固有の特性を述べ、総称的であるという特徴を持つ。

(121) a. 強化ガラスはなかなか割れない。

b. 銅板は簡単に曲がる。

(松瀬・今泉 (2001:208))

(121) は主語が対象物であり、実際に起こった出来事ではなく、主語名詞の恒常的な性質を描写している (影山 (1998))。加えて、(122) のように「誰がやっても」という副詞節をつけることができるため、当該構文は総称性を表す。

(122) a. 誰がやっても、この枝は折れる。

b. このドアは子供でも簡単に開く。

(松瀬・今泉 (2001:208))

以上のように、日本語の中間構文も主語名詞が主題を表し、その名詞の固有の属性を示し、総称的な解釈が見られる。

しかしながら、日本語と英語の中間構文には4つの相違点が見られる。まず第一に、中間動詞になれる動詞のタイプについて英語には制限があるが、日本語には制限がない (Taguchi (2007: 245-246))。例えば、英語では (123) のように状態動詞が中間構文になれない動詞タイプの一種である。

(123) \*The answer knows easily.

(Taguchi (2007: 245))

ところが、日本語には上述のような制限はなく、どの動詞も自由に中間動詞になれる。その事実が (124) のように例証されている。

(124) a. その答えが/は簡単にわかる。

b. 湯ヶ峰が/は山頂からよく見える。

c. 嫌なことが/は簡単に忘れられる。

(Taguchi (2007: 246))

(124) の動詞はいずれも適格な中間構文に関与できる。例えば、英語では不適格とされる動詞 know に対応する動詞「わかる」は、(124a) のとおり適格な中間構文を形成する。

第二に、中間接辞 (middle suffix) の有無が挙げられる<sup>26)</sup>。日本語には「～られ～え」((ar)e) という音形を持った中間接辞があり、この接辞が動詞に自由に付加されるため、(124) で例証されるように、どの動詞も中間動詞になれる。すなわち、日本語の中間接辞の存在は、中間動詞に関する制限がないという帰結になる。その一方で、英語の中間動詞には音形を持った中間接辞は見られず、能動態で用いられる動詞と形態上の区別がつかない。

第三に、英語の中間構文では形態的に格が吸収されないが、日本語の中間構文では吸収される (Taguchi (2007: 246))。

(125) a. 太郎が英語を/が話せる。

b. 英語が/は容易に話せる。

(Taguchi (2007: 246))

(125a) のような可能文では、対格「を」の吸収が任意であるが、一方、(125b) のような中間

<sup>26)</sup> Taguchi (2007: 244-247) は中間接辞の有無について日本語と英語の相違点に含めておらず、日本語の中間動詞に制限がない理由として接辞があるということを紹介している。

構文では対格は吸収されなければならない。(125b)の助詞「がは」が「を」になると受け入れ不可となる。

第四に、日本語の中間構文では(126)で示されるように、受取人が着点となるような動詞(recipient-goal)と共起できるが、英語では(127)のとおり、そのような動詞と共起できない(Taguchi (2007: 246))。

(126) メールがは日本の家族に簡単に送れる。 (Taguchi (2007:247))

(127) \*Small packages ship most customers easily. (Taguchi (2007: 246))

以上のように、日本語の中間構文は英語と同様に、主題を表す主語名詞の固有の属性を表し、総称的である。その一方で、英語との相違点も大きく4つ見られる。1点目は動詞の制限がないということで、2点目は中間接辞が含まれるということである。3点目は形態的な格の吸収が見られるということ、4点目は受取人が着点になるような動詞と共起できるということである。

英語の中間構文は日本語の可能文もしくは自発文のどちらに対応するのかという疑問点がある。先行分析によっても様々な意見に分かれる。阿部(1991)は(128)の3つの文を例に挙げながら分析している。

(128) a. この本は簡単に翻訳できる。

b. この茶碗はすぐ割れる。

c. この釘はすぐさびる。

(松瀬・今泉 (2001:208))

(128a)は絶対他動詞の総称文、(128b)は自他両用の総称文、(128c)は絶対自動詞の総称文である。この中で、英語の中間構文に該当するのは、(128a)のような受動的可能表現であると阿部(1991)は論じている。この表現は、他動詞用法のみを持つ動詞に可能形をつけたもので、英語と共通している。かくして、可能文が英語の中間構文に相当するという分析がある。

一方、日本語の可能文と自発文の両方が、英語の中間構文に該当するという分析がある。寺村(1982)は(129)のような表現が可能と自発の両方に解釈が可能と指摘している。

(129) 彼に(は)この瓦が割れる。

(松瀬・今泉 (2001:209))

自発とは、あるもの(X)が自然に独りでにある状態を帯びている、または、あるXを対象とする現象が自然に起きるという意味を持つものである。(129)の「彼」という表現がなければ、自発として解釈ができる。可能の場合は、状態性の表現であるが、自発の場合は出来事つまり事象を表す表現となる。ところが、(130)のように否定表現が加わると、可能と自

発の区別がつかない。

(130) この糸はなかなか切れない。

(松瀬・今泉 (2001:209))

(130) を可能解釈とすると「切ることができない」となり、自発解釈の場合は「切れるという出来事が起きない」となる。このような事実より、可能表現は自発表現の拡張パターンであるという分析もある (Shibatani (1985))。

英語の中間構文に該当するのは、可能文あるいは自発文のどちらであるかは、先行分析によって意見が分かれ、明確にされていない。

## 2.7.2 派生方法

Marelj (2004) は、日本語は中間構文を統語で派生させる言語 (syntactic middle languages) とし、英語は当該構文を語彙で派生させる言語 (lexical middle languages) というように分類している。2.7.1 節で取り上げた日英の中間構文の相違点より、そのように分類されている。Marelj (2004) は統語的移動によって日本語の中間構文が派生されると主張したが、Taguchi (2007) はこれと反対の意見を述べている。以下、Taguchi (2007) の分析を概観する。

日本語の中間構文には内項の移動はない (Taguchi (2007: 247))。その証拠として、敬語化 (honorification) が挙げられる。敬語化とは、主語への敬語化と目的語の敬語化という2つのパターンがあり、それぞれ (131) と (132) のように定義されている。(133) の例を考えよう。

(131) 主語への敬語化

主語が話者より優位にある時、主語を敬語化せよ。

(132) 目的語への敬語化

目的語が話者より優位にある時、目的語を敬語化せよ。

(133) a. 山田先生が私たちをお招きになる。

b. 私たちは山田先生をお招きする。

例えば、(133a) では主語「山田先生が」が話者より優位にあるため、動詞が「お招きになる」となり、主語への敬語化が見られる。一方、(133b) では目的語「山田先生を」が話者より優位にあるため、動詞が「お招きする」となり、目的語への敬語化が見られる。

敬語化は表層構造に基づいて行われることが一般に認められている。例えば、(134a) の受動構文に敬語表現を加えると、(134b) のようになり、(134c) の文は受け入れ不可となる。

(134) a. 山田先生がチンピラに殴られた。

b. 山田先生がチンピラにお殴られになった。

c.\*山田先生がチンピラにお殴られした。

(Taguchi (2007:248))

(134a) は受動構文であるため、「山田先生が」は基底構造上では目的語位置を占める名詞句である。(134b) は主語への敬語化を適用した結果であり、受け入れ可能となる。ところが、(134c) は目的語への敬語化を適用した結果であり、受け入れ不可となる。目的語への敬語化が適用されず、主語への敬語化が適用可能ということは、日本語の敬語化は、基底構造ではなく表層構造で適用されるということになる。

以上の受動構文の事実より、中間構文においても内項が主語位置に移動するならば、目的語の敬語化ではなく、主語の敬語化を受けるはずだと予測されるが、(135) より、その予測は外れる。

(135)a. このコンピュータは簡単に使える。

b.\*お客様のコンピュータは簡単にお使いになれる。

c. お客様のコンピュータは簡単にお使いいただける。 (Taguchi (2007:248-249))

(135a) の中間構文に、主語への敬語化を適用すると (135b) のようになり、受け入れ不可となる。一方、(135a) に目的語への敬語化を適用すると (135c) のように受け入れ可能となる。(135c) より、中間構文の内項は目的語の位置に留まるということがわかる。

加えて、overt syntax で中間構文の動作主が存在する (Taguchi (2007:250))。その証拠として、3点挙げられる。第一に、「自分」という語句は [+human] の主語の先行詞によって認可されなければならない。「自分」という表現は、動作主が存在しないと用いられない。(136) では明示化されていないが、「自分」の先行詞が「誰か」という不特定の動作主であると考えられる。当該構文では「自分の」という表現が難なく受け入れられるため、中間構文では不特定の動作主があると解釈される。

(136) 自分の本は簡単に読める。

(Taguchi (2007:251))

第二に、「～ながら」の表現されない主語は、主節の主語によってコントロールされねばならない。(137) の主節「本を読む」の主語は、「誰かが」という潜在的動作主であり、これは従属節「楽しみながら」の主語をコントロールする。

(137) [楽しみながら], この本は簡単に読める。

(Taguchi (2007:251))

第三に、表現されていない外項に基づいて、主語の敬語化が行われる。(138) の主語は表現されていないが、「誰かが」という潜在的動作主が該当する。その動作主が「お読みになれ

る」の主語をコントロールしている。

(138) この本はが簡単にお読みになれる。

(Taguchi (2007: 251))

従って、日本語の中間構文における内項は、目的語の位置に留まり、統語的移動が起こらない。その証拠として、中間構文の内項が目的語の敬語化を示すことが挙げられる。加えて、overt syntax で [+human] の素性を持つ。この素性が overt syntax で動作主の役割を果たす。

### 2.7.3 まとめ

最初に、英語の中間構文と比較しながら、日本語の中間構文の特性を紹介した (§2.7.1)。日本語の中間構文も英語と同様に、主題を表す主語名詞の固有の属性を表し、総称的である。英語との相違点として、日本語の中間動詞には意味的制限がなく自由に起こることができるということ、音形を持った中間接辞が存在するという、形態的な格の吸収が見られるということ、そして、受取人が着点になるような動詞と共起できるという 4 点が挙げられる。英語の中間構文は日本語の可能文もしくは自発文のどちらに該当するのかについては、先行分析によっても様々な意見に分かれる。

次に、日本語の中間構文の派生方法を示した。日本語の中間構文の内項は、統語的移動をせず、目的語位置に留まる (§2.7.2)。その証拠として、当該構文の内項は目的語への敬語化を受けるとことが示されている。

## 2.8 まとめ

第2章では、中間構文に関する先行研究を記述的及び理論的に紹介した。その一連の先行分析のポイントをまとめる。本稿で取り上げた先行分析を通して明らかなことが大きく 4 つある。

第一に、英語の典型的な中間構文に関する重要な特性は以下の 4 つであると考えられる。

- A. 主題を表す主語の固有の属性を表す。
- B. 総称的な解釈を持つということである。
- C. 動作主が潜在化される。
- D. 副詞（修飾語）もしくはその代わりとなるような表現と共起する。

上記 A~D は、記述的分析と理論的分析（派生方法）からとりわけ重要な特性であることがわかる。

第二に、中間構文には意味的制限が多く、派生方法についても語彙意味論的に考えるものがよく見られる。記述的にも理論的にも、意味分野に関することが重要と考えられる。

第三に、中間構文由来の複合語は存在しないと考えられていたが、語彙化プロセスを受け、特殊化される場合は複合化される。加えて、語彙意味論的アプローチで取り上げた項構造の分析より、中間動詞由来の形容詞を形成できる。

第四に、日本語にも中間構文が見られ、上記 A~C の特徴を持つと考えられる。英語との相違点として、動詞に中間接辞が含まれること、形態的な格の吸収が見られることが挙げられる。日本語の中間構文では統語的移動は起こらず、内項は目的語位置に留まる。

### 第3章 検証

本章では、第2章の先行研究で紹介した中間構文の特性や派生メカニズムにおける分析が正しいかどうかということ、事実観察を通して検証していく。3.1節で1億語の大規模コーパス British National Corpus (以下、BNC) あるいは英語母語話者によるインフォーマント調査によって収集した例文を提示し、先行分析で明らかにされてきたことが正しいかどうか検証していく<sup>27)</sup>。その事実観察を踏まえて、3.2節で理論的側面について検証していく。

#### 3.1 事実的側面

本節では、大規模コーパス BNC による調査やインフォーマント調査を通して収集した例文を提示しながら、先行分析で明らかにされていたことが正しいかどうか調査していく。以下、3.1.1節では意味的特性について、3.1.2節では統語的特性について、3.1.3節では形態的特性について順次検証していく。

##### 3.1.1 意味的特性

2.1節で中間構文の意味的特性について先行分析で明らかにされてきたことを概観した。その幾つかの内容を取り上げ、中間構文の意味的特性を分析していく。以下、3.1.1.1節で同表現の主語名詞について、3.1.1.2節で総称性について、3.1.1.3節で副詞及び修飾表現について、3.1.1.4節で中間動詞の制限について、3.1.1.5節では潜在的動作主について、順次検証していく。

###### 3.1.1.1 主語名詞

中間構文の主語名詞に関するポイントが3つある。まず1つ目は、2.1.1節で取り上げたように、主語の特性の読みが見られるという点である。この特性については、García de la Maza (2011) や Fellbaum (1985), Jespersen (1949) など多くの先行分析で論じられている。2つ目は、2.4.2節で概観したように、中間構文は価値ある情報を提供するため、定の主語であれば受け入れ可能であるという語用論的特性がある (García de la Maza (2011))。主語名詞の固有の属性については、意味論だけでなく、語用論にも関連する。この2つの主語名詞に関する特性を確かめるために、BNC で収集した例文を分析すると、当該構文の主語は定であるということ、及び、同表現が主語名詞の特性を表していることがわかる。

- (1) a. *This kind of argument reads well in Callinicos' hands,* … (BNC: A6U)  
b. *The system uses well.* (BNC: BN4)

---

<sup>27)</sup> 本稿における英語の母語話者によるインフォーマント調査は、Matthew A. Taylor 氏と Daniel L. Paller 氏の2名にお願いした。



(1a) では「この種の主張はよく読める」というように、読みやすさの要因としては、主語 *this kind of argument* の何らかの特徴であることがわかる。同様に、(1b) についても「よく使えるシステム」というように、主語名詞の特性が表されている。かくして、定の主語でありつつ、その主語名詞の固有の特性が表されていることが中間構文の特徴の 1 つである。ところが、(2) で例証されるように、不定の主語名詞の場合も、主語名詞の特性の読みが見られる。

(2) a. *Potatoes bruise easily, so treat them with care.* (BNC: EEA)

b. *Shower gels sell best in London.* (BNC: CBF)

(2a) は「傷みやすいジャガイモ」を表し、(2b) は「ロンドンで最も売れるシャワージェル」を表すが、いずれも主語名詞の特性を解釈でき、価値ある情報を提供していると考えられる。従って、主語名詞が定か不定かどうかについては、同表現の重要な特徴ではないように思われる。不定の主語の場合も、その主語名詞の固有の特性がわかるような文であれば、中間構文として成立する。

中間構文の主語名詞に関する意味的特性の 3 つ目のポイントは、2.1.4.3 節で取り上げたが、動詞の意味制限と主語名詞の特質構造にある目的役割の情報が一致する必要があるということである。その分析の中で、動詞 *play* が関与する中間構文の主語名詞は、(3a) のように楽器を表す名詞であり、(3b) のように音楽や曲を表す名詞は主語として使われないとされている (影山 (2004))。((3) = 第 2 章の (31))

(3) a. *This piano plays easily.*

b. *\*This sonata plays easily.* (影山 (2004: 126))

動詞 *play* の意味制限と主語名詞の目的役割には、「演奏する」と「楽器」という情報があり、その意味情報が一致しているため、(3a) は適格である。(3b) の主語名詞 *sonata* は「作曲家が聴衆に聴いてもらうために作るものである」という目的役割があるため、動詞 *play* の意味制限と合わず、不適格となる。

ところが、BNC で動詞 *play* の中間構文の例を収集すると、主語名詞が楽器を表す場合もあれば、楽器を表していない場合も見られた。その事実を (4) で例証する<sup>28)</sup>。

(4) a. *Tenor sax and guitar played well together and in their many solos.* (BNC: K4Y)

b. *Simple music played well.* (BNC: HX8)

---

<sup>28)</sup> (4) の文の時制が過去形であり、中間構文の総称性を満たしていないために、この点で中間構文の性質を欠いている。この問題については、3.1.1.2 節で取り上げることにする。

(4a) の主語名詞 *tenor sax and guitar* は楽器を表し、動詞の意味制限と主語名詞の目的役割の情報と一致している<sup>29)</sup>。ところが、(4b) の主語名詞 *simple music* は、(3b) の主語 *this sonata* と同様に曲を表す名詞であるにもかかわらず、適切な文である。この事実より、必ずしも動詞の意味制限と主語名詞の目的役割の情報が結びつく必要はないように思われる。

加えて、動詞 *keep* が関与する中間構文についても、「人が、食品などの生ものの物体を保つ」という目的役割を持つ。当該動詞は、生ものの飲食物や植物を表す名詞のみと結びつき、中間構文の場合は「食品などの生ものの日持ちが良い」という意味であれば成立する(影山(2004: 128-129))。この分析について検証するために、動詞 *keep* が関与する中間構文を BNC で検索したところ、(5) のような例文が見られた。

- (5) a. *Raw fruits also keep well if stored in the fridge, …* (BNC: C9F)  
b. *The fresh flowers keep well and dry off naturally, …* (BNC: HSK)  
c. *Kath's carpet keeps well doesn't it?* (BNC: KBB)

(5a) と (5b) の主語名詞はそれぞれ生の飲食物と植物を表すものであり、先行分析で紹介された内容と一致する。ところが、(5c) の主語名詞は *Kath's carpet* であることから、動詞 *keep* の中間構文の主語名詞は必ずしも飲食物や植物である必要がないということがわかる。従って、動詞の意味制限と主語名詞の目的役割の情報との結びつきについては、中間構文成立の必要十分条件ではないと言える。

以上より、中間構文の主語名詞に関する意味的特性について、先行分析を支持できる点としては、その主語の特性について解釈できるということが挙げられる。これについては、語用論的特性も備えており、主語名詞が定あるいは不定に関係なく、その主語名詞に関する価値ある情報を提供していれば、当該構文を満たせる。先行分析で定義されていた特徴とは異なる点としては、中間動詞の意味制限と主語名詞の目的役割の情報との一致については、必ずしも満たす必要はないということである。

### 3. 1. 1. 2 総称性と状態性

2.1.2 節で紹介したように、中間構文成立に必要な意味的特性の1つとしては、総称的であることが挙げられている。そして総称性とも関連するのが、当該構文が状態を表すということである。

まず総称性とは、ある文が特定の事象を示さず、主語名詞の恒常的な状態を表すことを言

<sup>29)</sup> インフォーマント調査の際に、*This book sells (reads) well.* と *\*The essay writes well.* のような違いについて質問したところ、1名の英語母語話者より、「*read* や *sell* のような動詞は *flexible verb* であるが、通常、物を表す名詞が能動文で主語に来ることはなく、動作主や行為者が主語である。例えば、*“Violins play well.”* というようには使わない。」という回答を得た。(3a) と (4a) のような表現は、実際には見られるが、英語母語話者の中には不適格と捉える方もいる。

う。原則として、単純現在形で用いられるが (Keyser and Roeper (1984)), García de la Maza (2011) によれば、中間動詞の時制が現在形でない場合も、事象文ではなく、主語名詞の特性を示す文であれば、当該構文になる。加えて、相 (aspect) に着目すると、その文が一見事象を表しているようであっても、「誰が実施してもその事象が起り続ける」という恒常的な状態を表していれば、中間構文になる (Fagan (1988))。この総称性について BNC の例文で検証したところ、中間構文は現在形以外の時制でも起り得るということがわかった。その例として (6) のような文がある。

(6) a. A soft drink made from the Elderflower *is selling* well, ... (BNC: K1S)

b. ... because the wheel *would not move* easily. (BNC: BM0)

(6a) は進行形の文であり、この時制で現れる中間構文は BNC に多く見出される。そして、(6b) も単純現在形ではない。この事実は、García de la Maza (2011) と Fagan (1988) の分析を支持でき、中間構文は単純現在形で起こるという Keyser and Roeper (1984) の分析に反する結果になる。

加えて、中間構文は主語名詞の特性について解釈できる文であることから、事象ではなく、状態を表す。ところが、状態性重視であるにもかかわらず、2.1.4.4 節で紹介したように、状態動詞は中間構文になれない。(7) = 第 2 章の (39a))

(7) \*The answer *knows* easily. (影山 (1998:276))

BNC で know や have のような状態動詞が関与する中間構文を検索したが、その例が見つからなかった。また、状態動詞の 1 つでもある動詞 hate の中間構文について、2 名の英語母語話者にインフォーマント調査を依頼したところ、(8) のように「あの少女は嫌われやすい」というような表現では用いられず、受け入れ不可能であることがわかった。

(8) \*<sup>??</sup>That girl *hates* easily because she brags about everything. (筆者のインフォーマント調査)

状態動詞の意味構造は [y BE AT-z] であり、中間構文に必要な対象物 (y) の状態変化の意味を含んでいないため、状態動詞は同表現から除外されることになる (影山 (1998: 277))。この事実より、状態動詞が中間構文に関与できないということ、そして主題を表す内項の状態変化を表すようなものが中間構文に関与できるということを支持できる。

従って、時制に関係なく、「誰がやっても起り得る恒常的な状態」という総称性が中間構文に必要な意味的特性である。並びに、中間構文は事象ではなく、状態を表すということが

言える。中間構文が状態性であるにもかかわらず、状態動詞が同表現に関与できないのは、状態変化を表せる意味構造でないためであるという先行分析についても同時に支持できる。

### 3.1.1.3 副詞表現の制限

2.1.3 節で紹介したとおり、中間構文には通常、副詞が存在する。この副詞の意味的特性について検証したいポイントが2つある。1つめが、同表現に現れる副詞と現れない副詞があるということである。Fellbaum (1985) によると、容易さを表す副詞、及び被動者に起こった事象を表せる副詞が中間構文で許されるが、精神状態を表す副詞と動作主の特徴を表す様態副詞は許されない。2つめが、副詞の代わりに、法助動詞のような修飾表現が用いられることもあるということである (García de la Maza (2011))。BNC で収集した、副詞表現あるいは修飾表現が見られる 217 の中間構文の例を用いて、これらの特徴について検証したところ、先行分析を支持できる点もあれば、それに反する点もあった。副詞と法助動詞の大きく2つに分けて、データに基づく分析結果を以下に示していく。

まず、217 文の中間構文の例の中で、188 文の副詞が現れる同表現の例が見出され、その中から 52 種類の副詞が見られた。その結果は、(9) の表のとおりである。

## (9) 中間構文に現れる副詞に関する BNC 調査結果

| 機能的および意味的タイプ             |                          | タイプ<br>数 | 副詞の内訳<br>※ ( ) 内の数字はその副詞のトークン数を表す。   | トークン<br>の総数 |
|--------------------------|--------------------------|----------|--|-------------|
| ①動詞を修飾<br>するもの           | A. 容易さ                   | 5        | well (68), easily (40), simply (4), readily (3),<br>best (2)   | 117         |
|                          | B. 速さ<br>(容易さ,<br>タイミング) | 4        | fast (6), quickly (6), slowly (6), rapidly (5)   | 23          |
|                          | C. 頻度                    | 2        | constantly (1), continuously (1)   | 2           |
|                          | D. 自動                    | 1        | automatically (1)  | 1           |
|                          | E. 程度・強調                 | 12       | fully (2), violently (2), completely (1),<br>enormously (1), especially (1),<br>ferociously (1), greatly (1), mostly (1),<br>radically (1), sharply (1),<br>significantly (1), slightly (1)  | 14          |
| ②行為を受けた被動者の結果状態<br>を表すもの |                          | 22       | beautifully (2), cleanly (2), differently (2),<br>tightly (2), badly (1), bitterly (1),<br>catastrophically (1), efficiently (1),<br>evenly (1), freely (1), gently (1), glumly (1),<br>horizontally (1), indistinguishably (1),<br>markedly (1), medially (1), painlessly (1),<br>right-handedly (1) snugly (1), unevenly (1),<br>uniquely (1), wonderfully (1) | 26          |
| ③動作主に係るもの                |                          | 5        | accurately (1), alternately (1), carefully (1),<br>motionlessly (1), nationally (1)  | 5           |
| 合計                       |                          | 52       |  | 188         |

まず例文で見られた副詞を、「①動詞を修飾するもの」、「②行為を受けた被動者の結果状態を表すもの」、そして「③動作主に係るもの」というように大きく3つに分けた。①については、Fellbaum (1985) や Vendler (1984) による副詞の分析に基づいて意味的に分類したところ、A から E のような5種類が見られる<sup>30)</sup>。②の分類名は筆者の提案により名付けたものである。③は、Fellbaum (1985) と Vendler (1984) の分析に従っている。その分類に副詞が何種類

<sup>30)</sup> 副詞に関する先行文献では、意味別に分類しているものが少なく、影山 (2009) や Roberts (1987) を確認すると、副詞が置かれる位置で分類される傾向にある。

あるのかということを示し、「タイプ数」に示し、その分類に属する副詞については「副詞の内訳」に記載している。その項目に記載した、副詞の横にある括弧内の数字は、トークン数を表している<sup>31)</sup>。内訳に記載した副詞については、そのトークン数が大きいものから順に掲載している。そして、同じ分類に属する副詞のトークン数を合計したものを、「トークンの総数」に示している。以下、表 (9) の①から③の順に、例文を用いて紹介していく。

①の「A. 容易さを表す副詞」は、中間構文で最も多く見られた。この種類に属するのが *well, easily, simply, readily, best* の 5 種類であり、タイプ数は少ないが、*well* のみで 68 個、*easily* のみで 40 個あり、中間構文に伴う副詞の例の全体の中で、それぞれ第 1 位と第 2 位を占める。容易さを表す副詞が見られる例文を (10) で示す。

- (10) a. The long wings fold *easily* over the small body. (BNC: CL0)  
b. But bread with 5 percent guar bakes *well* and tastes like ordinary bread. (BNC: B76)  
c. The gutter channel and fittings *simply* clip into the brackets. (BNC: CCX)  
d. Its wiry black roots go very deep and break *readily*, … (BNC: A0G)  
e. Storage tips All oils keep *best* in a cool, dark place -- ideally a larder. (BNC: ABB)

次に、①の「B. 速さを表す副詞」は、トークンの総数においては全体で 3 番目に多いということがわかる。Fellbaum(1985) はこの意味タイプを「容易さを表す副詞」として分類していたが、本稿では別の意味として分類することとする。BNC では、*fast, quickly, slowly, rapidly* の 4 種類が見られたが、中間構文で現れる頻度が高いように思われる。(11) はその一例である。

- (11) a. Seats are selling *fast*. (BNC: CKH)  
b. … and locations change *quickly*. (BNC: A67)  
c. It (= straw or paper) burns *slowly* when ignited and gives off a pleasing smell. (BNC: FBA)

(11a) は「椅子の売れ行きが速い」ということから主語名詞の特性を十分に表している。(11b) は「場所の代わり具合が早い」と示され、(11c) は「ゆっくりと燃える藁または紙」ということから、主語名詞の特性が解釈できる。かくして、速さを表す副詞も中間構文でよく起こる。

加えて、①の「C. 頻度を表す副詞」として分類されているのは、*constantly* と *continuously* であり、その例は (12) のとおりである。

---

<sup>31)</sup> トークン (token) とは、検索した例の数を指し、例えば、収集した例文の中で検索対象の語が 200 個検索された場合は 200 例、つまり 200 トークンとして数える。コーパスを用いた従来の研究の中では、例文に出てくる語が何度も出てくる場合も 1 つとして数えるというタイプ (type) 数で検証する場合もあるが、本稿ではトークン数で数える。

(12) a. ... but the wide panoramas changed *constantly* as the countryside unfolded around me.

(BNC: A89)

b. The water opens and closes *continuously*.

(BNC: APS)

(12a) の副詞 *constantly* と (12b) の副詞 *continuously* は、連続という頻度を表している。Fagan (1988) の総称性に関する分析で、「誰がやっても起こり続けるという恒常的な状態」を表す場合は、中間構文であると述べられている。(12) で示されるように、副詞 *constantly* や *continuously* が現れるということは、Fagan (1988) の分析を支持できるということになると考えられる。

さらに、①の「D. 自動を表す副詞」は、(13) のような *automatically* という副詞が該当する。

(13) ... although front freewheeling hubs lock or unlock *automatically*.

(BNC: G0A)

(13) のような自動を表す副詞を見ると、能格構文のように思われるが、潜在的動作主によって行われる場合も「自動的に」執り行われるという解釈であれば、その主語名詞の特性を表す中間構文としてみなされると考えられる。

①の「E. 程度・強調を表す副詞」も中間構文で許されると考えられ、(14) のようなものが見られる。

(14) a. All airbrakes close *fully* before they lock.

(BNC: A0H)

b. Of course, sterile collecting procedures add *significantly* to the difficulty of field work.

(BNC: B73)

(14a) の副詞 *fully* は、どれくらい閉めるのかという程度を表し、(14b) の副詞 *significantly* は、その行為の強調が見られる<sup>32)</sup>。その他にも、*violently* や *completely*, *enormously* のような副詞が該当し、全部で 12 種類見られた。このような副詞は、その文が示す状態の度合いを表すことで、主語名詞の特性を詳しく述べるという機能を持つと考えられる。

上述の事実観察より、「①動詞を修飾する副詞」は中間構文で許されるということがわかる。この副詞を意味的に細分化させると、A から D のように容易さ、速さ、頻度、自動を表す副詞があり、この副詞類を様態として示すことができる。そして E で示したように、程度や強調を表す副詞も中間構文で現れるということがわかった。

①の動詞を修飾するものに加えて、「②行為を受けた被動者の結果状態を表すもの」も多

<sup>32)</sup>(14b) の主語名詞が具体名詞ではないため、より典型的な中間構文の例を挙げることを今後の課題とする。

く見られる。このタイプに属する副詞は、*beautifully* や *badly*, *evenly* など 22 種類あり、トークン数に着目すると、中間構文に現れる副詞の中で 2 番目に多い。その一例を (15) で示す。

- (15) a. It (=Ask) cuts well, and splits *beautifully*, ... (BNC: H13)  
 b. ..., but it (=linen) creases *badly* unless treated with the appropriate finish. (BNC: GUB)  
 c. The fire burns *evenly* with a thin hot flame, ... (BNC: FAJ)  
 d. It (=the Moscato) drinks *wonderfully* with chocolate desserts. (BNC: A0C)

(15a) は「綺麗に裂ける木」、(15b) では「亜麻布はしわが寄った結果、その布は悪くなる」、(15c) では「薄い温かい杓で火を燃やすと、その火は均等に燃える」、そして、(15d) では「チョコレートのデザートを添えて一緒に飲むと素晴らしい飲み物」と解釈できる<sup>33)</sup>。このように文脈で判断すると、動詞が表す行為によって、その被動者、すなわち主題を表す主語名詞がどのような状態になるのかということが確認できる。このように文脈で判断すると、被動者に焦点が当てられる副詞であるということがわかる。Fellbaum (1985) によると、動作主指向の様態副詞については、中間構文で受け入れられない。しかし様態副詞について、Fellbaum (1985) は動作主指向のタイプのみを説明し、(15) で示したような副詞については言及していない。筆者が示した事実より、主題または被動者指向のもので、行為後の被動者の結果状態を表せる副詞であれば、中間構文で受け入れられると考えられる。

「③動作主指向の様態を表す副詞」は、通常、中間構文では許されない、と Fellbaum (1985) は論じている。ところが、BNC で収集した例文を確認すると、(16) で示したように、実際には動作主指向の様態副詞も見られるようだ。

- (16) a. The scales read *accurately*. (BNC: FEX)  
 b. 'My Friend's name' builds *carefully*. (BNC: CAD)

(16a) の副詞 *accurately* については、正確に読むのは潜在的動作主であると考えられ、副詞は潜在的動作主に係っている。(16b) の副詞 *carefully* についても、潜在的動作主の立場で述べられ、注意深く誰かが作るということを表す。動作主指向の様態副詞は中間構文では不可とされているにもかかわらず、上述のように実際には用いられているため、Fellbaum (1985) の分析に反することになる。表 (9) で示したように、この種の副詞のトークン数が少ないため、これは典型的な中間構文から逸脱した、例外的な中間構文のタイプであるという可能性がある。

<sup>33)</sup> (15) で例証した副詞が結果というよりもむしろ様態を表すのではないかとも考えられる。先行分析でも副詞の分類について取り上げているものが少なく、副詞が置かれる位置によって分類されることもある。副詞の分類について詳細に分析していくことを今後の課題としたい。



上述の事実観察を通して、典型的な中間構文で現れる副詞は、①で示すように、様態を表すもの、程度・強調を表すもの、そして、行為を受けた被動者の結果状態を表すものという3つのパターンがあるということがわかった。様態を表す副詞としては、①のAからDのように容易さ、速さ、頻度、自動を表す副詞があり、この副詞類を様態として示すことができる。容易さを表す副詞に関する事実は、Fellbaum(1985)の分析を支持できる。加えて、BNCで収集した中間構文では、精神状態を表す副詞が見られなかった。中間構文で現れない副詞については、インフォーマント調査を通し、今後検証していきたいが、BNCの検証結果より、Fellbaum(1985)の分析と合うと考えられる。しかし、動作主指向の様態副詞が中間構文では関わらない、とFellbaum(1985)は述べているが、実際には見られ、このタイプの副詞に関する先行分析に反することがわかる。動作主に係る副詞が見られる中間構文は、例外的なタイプであると考えられる。

第二に、法助動詞が用いられる中間構文について取り上げる。217の中間構文の例文の内、54の例文に法助動詞が見られた。その調査結果を(17)の表にまとめる。

(17) 中間構文に現れる法助動詞に関するBNC調査結果

| 法助動詞           | 法助動詞の総数 | 他の副詞句と共起していた数 |
|----------------|---------|---------------|
| can            | 29      | 3             |
| not (単純現在形の否定) | 8       | 6             |
| may            | 4       | 4             |
| should         | 3       | 3             |
| will not       | 3       | 3             |
| could          | 2       | 0             |
| can't          | 1       | 0             |
| might          | 1       | 1             |
| will           | 1       | 1             |
| would          | 1       | 1             |
| would never    | 1       | 1             |
| would not      | 1       | 1             |
| 合計             | 54      | 25            |

表(17)で示したように、法助動詞が見られる中間構文の中で、最も用いられる法助動詞はcanであることがわかった。法助動詞が伴う中間構文に関する54の例文の中で、法助動詞canが用いられる文が29個あり、過半数を占めている。例えば、(18)のような文が見られ

る。

- (18) a. Songs *can* teach, … (BNC: CDU)  
b. VHS machines across the Atlantic *can* record and play back at three different speeds; in two, four or six hours. (BNC: B7J)

従って、助動詞が、副詞句の代わりをすることができるという García de la Maza (2011) の分析を支持できる。

加えて、法助動詞は副詞表現の代わりに中間構文で用いられる、と García de la Maza (2011) は述べているが、(17) の表のとおり、法助動詞と副詞表現が共起している例が 25 文見られた。その例を以下に示す。(19) は *can* を含む表現、(20) は *may* を含む表現、(21) は *should* を含む表現、そして、(22) は *would not* を含む表現の例である。

- (19) a. … it (= plastic mirror) *can* crack *very easily* … (BNC: HGW)  
b. … so the windows *can* still slide *easily*. (BNC: CCX)  
(20) a. … otherwise the card *may* curl *horizontally* and fall over. (BNC: CN4)  
b. Though unit sales *may* recover *fully*, profits will not if Britain really has become a low-inflation economy. (BNC: AKU)  
c. … whereas other types (= films) *may* tear *easily*. (BNC: C92)  
(21) The board *should* balance *well* in this position. (BNC: AT6)  
(22) … because the wheel *would not* move *easily*. (BNC: BM0)

(19)-(22) より、法助動詞が必ずしも副詞表現の代用として機能するというわけではないということが明らかである。副詞表現が後続することにより、例えば、(19) では「どれくらい可能な状態であるのか」ということが強調されているように思われる。従って、法助動詞に関する分析は、García de la Maza (2011) の主張とは異なる。

以上のように、中間構文の副詞表現及び修飾表現について BNC で検証したところ、先行分析を支持できることが 3 つある。1 つめは、容易さを表す副詞が中間構文で頻繁に見られるということであり、この事実は Fellbaum (1985) の分析を支持できる。2 つめは、精神状態を表す副詞が、中間構文では見られなかったということである。中間構文で現れない副詞については、今後インフォーマント調査でも検証していきたいが、BNC 検証結果より、Fellbaum (1985) の分析に合うと考えられる。3 つめは、法助動詞が修飾表現の代わりとして現れるということであり、これは García de la Maza (2011) の先行分析の内容を支持できる。しかしながら、先行分析と事実が合わない点も幾つか見られる。まず、容易さを表す副詞の他にも、速さ、頻度、自動を表せる様態副詞、程度・強調を表す副詞、及び行為を受けた被動者の結

果状態を表す副詞があるということがわかった。そして、動作主に係る副詞が中間構文では現れない、と Fellbaum (1985) は述べているが、実際には見られる。このような副詞が見られる中間構文は数が少ないため、例外的なタイプであると考えられる。それに加え、法助動詞と副詞表現が共起する例が多く見られ、必ずしも法助動詞が副詞表現の代わりとして現れるわけではない。

#### 3.1.1.4 中間動詞の制限

中間動詞になれる動詞となれない動詞について幾つかの意味的制限を 2.1.4 節で議論した。加えて、2.1.6 節の被影響性についても中間構文に関与できる動詞への言及があった。その中で、検証した中間動詞に関する 2 つの点を本節で検討する。

1 つ目は、Levin (1993) や影山 (1998) が論じていたように、接触・打撃動詞は典型的な中間構文では受け入れ不可能となるが、結果述語を伴うと適格な文になるということである (§2.1.4.4)。(23) はその例であり、第 2 章の (41a) と (42a) と同じ例文である。

(23) a. \*This counter *wipes quickly*.

b. This counter *wipes clean quickly*.

(影山 (1998:277))

ところが、(23) のような接触・打撃動詞に関与する中間構文を BNC で検索すると、そのような動詞に関与する中間構文及び結果述語を伴う同表現は見出せなかった。それゆえ、(24)-(27) の文を用いて、2 名の英語母語話者にインフォーマント調査を実施した。その結果を以下に示す。

(24) a. <sup>OK/OK</sup>This new ball *hits easily* because it is lighter than the conventional one.

b. <sup>OK???</sup>This new ball *hits far away easily* because it is lighter than the conventional one.

(25) a. <sup>????</sup>In order to prevent the spread of infection of coronavirus, this counter *wipes quickly*.

b. <sup>???</sup> In order to prevent the spread of infection of coronavirus, this counter *wipes clean quickly*.

(26) a. <sup>\*/OK</sup>Elephants do not *kick easily*. They are much stronger than humans.

b. <sup>\*/??</sup>Elephants do not *kick senseless easily*. They are much stronger than humans.

(27) a. <sup>\*/\*</sup>This fine fabric *touches easily*. You had better use it to make clothing.

b. <sup>\*/\*</sup>This fine fabric *touches flimsy easily*. I do not recommend using such a material.

(筆者のインフォーマント調査)

(24) の打撃動詞 hit については、典型的な中間構文のパターンと結果述語を伴うパターンの両方ともほぼ受け入れ可能と判断されたが、(25)-(27) については容認度が下がる傾向にある。

(25) の接触動詞 *wipe* が関与する文と (26) の打撃動詞 *kick* が関与する文は、影山 (1998:277) が例証した文と同じであるが、先行分析と異なる結果を得た<sup>34)</sup>。(25) の接触動詞 *wipe* については、非文法的とはならなかったものの、容認度が低く、(25b) のような結果述語を補った場合も適格とはならなかった。(26) の打撃動詞 *kick* については、いずれのパターンも不適格と判断した英語母語話者もいれば、典型的なパターンは受け可能だが結果述語を補うパターンはぎこちないと判断した英語母語話者もいた。(26) について 1 名の英語母語話者より「誰が蹴ったのか」が不明瞭で判断ができなかったとコメントがあったが、「誰かが象を蹴る」という状況であると説明したところ、そのまま非文法的と判断された。加えて、(27) の接触動詞 *touch* は、いずれのパターンも不適格と判断された。(27b) については「この生地は触りやすいが、触った結果、その生地はもろくなる」というような解釈にはならないと説明を受けた<sup>35)</sup>。従って、接触・打撃動詞が関与する中間構文については、結果述語を補うと、受け入れ可能であるという先行分析を支持できない。

2 つ目は、2.1.6 節で取り上げた被影響性についてである。Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) は Hale and Keyser (1987) 提案の被影響性では、十分に説明できないため、形容詞的過去分詞の条件を加え、論じている。Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 28) は、中間構文になれる動詞とは、以下の A と B を満たせる動詞であると定義している。

A. 被影響性の条件 (=第 2 章の (57))

- i) 項の指示物が行為・過程が行われる前に存在する。
- ii) 項が示す固有の特質が行為・過程によって変えられる。

B. 形容詞的過去分詞の条件

形容詞的過去分詞になれる動詞のみが中間構文に関与できる。

B の形容詞的過去分詞とは、*cooked, sold, bought* のような表現であり、名詞の前に置かれ、形容詞の働きを持つ過去分詞のことである<sup>36)</sup>。A の被影響性と B の形容詞的過去分詞性の 2 つ

<sup>34)</sup>(25) の文については、影山 (1998:277) と同じ文を使い、それに加えて、本稿の筆者が「コロナウイルス感染拡大を防ぐため」という文脈を与えて調査した。ところが、(25) の文は、主語名詞 *this counter* に焦点が当たらないような事象を示す文であるため、中間構文を目的とした調査とならない、と森田順也氏よりご指摘をいただいた。文脈を整えると、(25) のような接触動詞 *wipe* が関与する表現が適格と判断される可能性も考えられるため、今後は文脈を含め、例文の設定に気を付けたい。

<sup>35)</sup>(27b) の文を「この生地を触ると、もろくなる」という意味で表す場合は、“*This fabric easily feels like it is flimsy. (It is already flimsy and not as a result of being touched.)*” となる、と英語母語話者より助言をいただいた。高野祐二氏より、(27b) の例文はやや不自然な文であるため非文法的と判断された可能性もある、とコメントをいただいた。(25) の文と同様、例文の設定にも留意した上で、インフォーマント調査を実施するというを今後の課題とする。

<sup>36)</sup> 影山 (1998) は、形容詞的過去分詞を完了形容詞と表記している。過去分詞は形容詞的過去分詞と動詞的過去分詞の 2 種類に分類される。動詞的過去分詞は (i) の *kept* のように、動作を表すものである。

(i) *Tabs have been kept on the spy.* (影山 (1998: 94))

の条件で中間構文を形成できる動詞か否かを説明できるのかを検証するため、先行文献により中間構文の形成が可能である動詞、及び形成不可とされてきた動詞の合計 100 種類の動詞について調査した。本稿で検証していく 100 種類の動詞については、表 (28) のとおりである。

(28) 検証する 100 種類の動詞

|               | 動詞のラベルと数  | 動詞の内訳   |
|---------------|---|---|
| 中間<br>構文<br>可 | ㉑状態変化動詞— <i>break</i> 動詞— (7 個)                       | break <sub>1</sub> , chip, crack, crash, shatter, snap, tear  |
|               | ㉒状態変化動詞— <i>bend</i> 動詞— (4 個)                        | bend, crease, fold, wrinkle   |
|               | ㉓状態変化動詞—料理— (3 個)                                     | bake, cook, heat <sub>1</sub>   |
|               | ㉔状態変化動詞—その他— (14 個)                                   | abate <sub>1</sub> , advance <sub>1</sub> , age <sub>1</sub> , alter <sub>1</sub> , atrophy <sub>1</sub> , balance <sub>1</sub> ,<br>burn <sub>1</sub> , burst <sub>1</sub> , change <sub>1</sub> , close <sub>1</sub> , dry <sub>1</sub> , melt <sub>1</sub> , open <sub>1</sub> ,<br>sink <sub>1</sub>  |
|               | ㉕作成動詞 (6 個)   | build, construct, crop, form, make, root  |
|               | ㉖達成動詞 (6 個)   | finish, photograph, read, recover, score, use   |
|               | ㉗結合・混合を表す動詞 (4 個)                                     | add, blend, merge, shake  |
|               | ㉘「切る」を表す動詞 (5 個)                                      | carve, clip, crush, cut, split  |
|               | ㉙道具を表す動詞 (2 個)  | prick, sting  |
|               | ㉚「回す」を表す動詞 (3 個)                                      | coil, curl, spin  |
|               | ㉛「置く」を表す動詞 (2 個)                                      | position, shelve  |
|               | ㉜中間構文と能格構文のどちらも形成可能な動詞 (8 個)<br>※全 24 個中 16 個が他ラベルと重複 | abate <sub>2</sub> , advance <sub>2</sub> , age <sub>2</sub> , alter <sub>2</sub> , atrophy <sub>2</sub> , balance <sub>2</sub> ,<br>break <sub>2</sub> , burn <sub>2</sub> , burst <sub>2</sub> , change <sub>2</sub> , close <sub>2</sub> , dry <sub>2</sub> , fall, fit,<br>flow, hang, heat <sub>2</sub> , melt <sub>2</sub> , move, open <sub>2</sub> , roll, sink <sub>2</sub> ,<br>slide, turn |
|               | ㉝官僚言語の動詞 (6 個)  | bribe, maneuver, transfer, translate, transmit,<br>transpose  |
|               | ㉞名詞由来転換動詞 (6 個)                                       | band, bruise, fish, paper, record, water  |
|               | ㉟ラテン語由来の動詞 (3 個)                                      | demonstrate, donate, obtain   |
|               | ㊱その他 (9 個)  | draw, drive, handle, keep, lock, serve, slip, stow,<br>unlock   |
| 不可            | ㊲働きかけ動詞 (4 個)   | *hit, *perform, *play, *pound   |
|               | ㊳三項述語の動詞 (2 個)  | *give, *teach   |
|               | ㊴その他 (6 個)  | *die, *drink, *hate, *reach, *swallow, *write   |

\*が付いていない動詞は先行研究で中間動詞が可能であると指摘されているものであり、\*が付いているものは中間構文が不可と指摘されているものである。先行分析で多く記述されている意味分類を優先にし、100種類の動詞を意味的に分類したところ、①～⑳のように19種類に分けることができる<sup>37)</sup>。動詞のラベルについては、動詞の中で、他のラベルにも当てはまるような重複しているものには、その動詞の右下に番号を付けている。その重複した動詞で「2」が付けられたものについては、動詞を数える際、その数に入れていない。例えば、動詞 **break** は①の状態変化動詞に当てはまるが、②の能格構文にもなれる動詞としても分析されている。その動詞に「1」が付いた①ではそのラベルの数に入れていないが、「2」の付いた②ではその数に入れていない。(28)の動詞以外にも、中間構文になれる動詞はあるが、本稿では上述の動詞に絞り、分析していく。

(28)の動詞が関与する表現がAとBを満たせるかどうか検証した結果、(29)の表で示されたとおり、大きく4つに分かれた。

---

<sup>37)</sup> 100種類の動詞は以下の先行研究の例やリストより選択している。

①, ②, ③, ④, ⑤: Levin (1993), Rapoport (1999)

⑥, ⑦: Keyser and Roeper (1984), Levin (1993), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989), Rapoport (1999)

⑧: 影山 (1998), Kaga (2007)

⑨: Keyser and Roeper (1984)

⑩, ⑪, ⑫: Levin (1993)

⑬: Clark and Clark (1979)

⑭, ⑮: Kaga (2007)

⑯: 影山 (1998)

⑰: Fellbaum and Zribi-Hertz (1989)

⑱: Vendler (1967), Keyser and Roeper (1984), Fellbaum and Zribi-Hertz (1989), Levin (1993)

⑲についてはVendler (1967)を参考に、“過去形の動詞+in an hour.”が可能な動詞をBNCで検索し、選出している。ちなみに定義されていないが、⑱の官僚言語 (bureaucratic language) の動詞については主に接頭辞 *trans-*を持つ動詞が紹介され、このタイプの動詞は驚くほど中間構文で頻繁に起こる、とKeyser and Roeper (1984: 383)は示している。加えて、⑬, ⑭, ⑮, ⑯については、文体的に分類されたものである。

(29) 被影響性 (A) と形容詞的過去分詞性 (B) に関する分析結果

| A と B 両方とも満たせる動詞 |   |   |
|------------------|---|---|
| 動詞の数             | 動詞の内訳   | ラベル別  |
| 38               | < 中間構文を形成できる動詞 ><br>break <sub>1</sub> , chip, crack, crash, shatter, tear,<br>bend, crease, fold, wrinkle,<br>bake, cook,<br>advance <sub>1</sub> , age <sub>1</sub> , alter <sub>1</sub> , atrophy <sub>1</sub> , burn <sub>1</sub> , burst <sub>1</sub> ,<br>change <sub>1</sub> , dry <sub>1</sub> , melt <sub>1</sub> ,<br>recover,<br>add, blend, merge,<br>carve, clip, crush, cut <sub>1</sub> (主語が theme), split,<br>(advance <sub>2</sub> , age <sub>2</sub> , alter <sub>2</sub> , atrophy <sub>2</sub> , break <sub>2</sub> , burn <sub>2</sub> ,<br>burst <sub>2</sub> , change <sub>2</sub> , dry <sub>2</sub> , melt <sub>2</sub> , )<br>bribe, transfer, translate, transpose,<br>bruise, water | ㊸状態変化 ( <i>break</i> ) ……6<br>㊹状態変化 ( <i>bend</i> ) ……4<br>㊺状態変化 (料理) ……2<br>㊻状態変化 (その他) ……9<br>㊼達成 ……1<br>㊽結合・混合 ……3<br>㊾「切る」 ……5<br>(㊿中間・能格 ……10)<br>㊽㊾官僚言語 ……4<br>㊽㊿名詞由来転換 ……2 |
|                  | < 中間を形成できない動詞 ><br>*pound,<br>*swallow  | ㊽働きかけ ……1<br>㊽その他 ……1   |

| Aのみ満たせない動詞 |  |   |
|------------|--|---|
| 動詞の数       | 動詞の内訳  | ラベル別  |
| 52         | <中間構文を形成できる動詞><br>snap,<br>heat <sub>1</sub> ,<br>balance <sub>1</sub> , close <sub>1</sub> , open <sub>1</sub> , sink <sub>1</sub> ,<br>build, construct, crop, form, root,<br>finish, photograph, read, score, use<br>shake,<br>cut <sub>2</sub> (主語が instrument),<br>prick, sting,<br>coil, cur, spin,<br>position, shelve,<br>balance <sub>2</sub> , close <sub>2</sub> , fall, fit, flow, hang, heat <sub>2</sub> , move,<br>open <sub>2</sub> , roll, sink <sub>2</sub> , turn,<br>transmit,<br>band, paper, record,<br>demonstrate, donate, obtain<br>draw, drive, handle, keep, lock, slip, stow, unlock | ㊸状態変化 ( <i>break</i> ) ……1<br>㊿状態変化 (料理) ……1<br>㊾状態変化 (他) ……4<br>㊵作成 ……5<br>㊴達成 ……5<br>㊳結合・混合 ……1<br>㊲「切る」 ……1<br>㊱道具を表す ……2<br>㊰「回す」 ……3<br>㊯「置く」 ……2<br>㊮中間・能格 ……7(12)<br>㊭官僚言語 ……1<br>㊬名詞由来転換 ……3<br>㊫ラテン語由来 ……3<br>㊪その他 ……8 |
|            | <中間構文を形成できない動詞><br>*hit, *play,<br>*give, *teach,<br>*hate, *write   | ㊩働きかけ ……2<br>㊨三項述語 ……2<br>㊧その他 ……2  |

| Bのみ満たせない動詞 |   |  |
|------------|---|--|
| 動詞の数       | 動詞の内訳   | ラベル別                                       |
| 5          | <中間構文を形成できる動詞><br>abate <sub>1</sub> ,<br>(abate <sub>2</sub> ),<br>maneuver, | ㊾状態変化 (その他) ……1<br>㊮中間・能格 ……1<br>㊭官僚言語 ……1 |
|            | <中間構文を形成できない動詞><br>*die, *drink, *reach                                       | ㊧その他 ……3                                   |



| A と B 両方とも満たせない動詞 |   |  |
|-------------------|---|--|
| 動詞の数              | 動詞の内訳   | ラベル別   |
| 5                 | <中間構文を形成できる動詞><br>make (??/?),<br>slide (??/?),<br>fish (??/?) OK),<br>serve (??/?) | Ⓔ作成 ……………1<br>Ⓖ中間・能格 ……………1<br>Ⓖ名詞由来転換 ……………1<br>Ⓖその他 ……………1 |
|                   | <中間構文を形成できない動詞><br>*perform   | Ⓔ働きかけ ……………1   |

表 (28) で、中間構文が可能とされる 88 種類の動詞の内、82 種類の動詞が BNC で中間構文として使われていることが確認できた。BNC で検索できなかった 6 種類の動詞 *band, bribe, donate, maneuver, make, paper* については、2 名の英語母語話者によるインフォーマント調査を実施した。その結果、中間動詞として非文法的となったのが *donate, make* の 2 種類であり、その他の 4 種類の動詞 *band, bribe, maneuver, paper* は中間動詞になれるという結果を得た。表 (29) の「A と B の両方満たせない動詞」の横にある表記は、形容詞的過去分詞に関するインフォーマント調査の結果を示している。例えば、動詞 *make* の形容詞的過去分詞 *made* について、1 名の英語母語話者は「非常にぎこちない (??)」と判断し、もう 1 名の英語母語話者は「ややぎこちない (?)」と判断したということを表す。

表 (29) のとおり、「A と B 両方とも満たせる動詞」が 38 個、「A のみ満たせない動詞」が 52 個、「B のみ満たせない動詞」が 5 個、そして「A と B 両方とも満たせない動詞」が 5 個という結果になった。その結果を一部、以下に示す。

第一に、表 (29) の「A と B の両方とも満たせる動詞」について見ていく。この種の動詞の例を (30) で示す。以下はそれぞれ a の文が中間構文であり、b の文が形容詞的過去分詞の表現である。

- (30) a. Cellular plastic is easy to use. It *cuts*, screws and nails just like wood. (BNC: ECJ)  
b. I like, let's see, I like *cut* flowers in the house. (BNC: KCV)

(30a) の動詞 *cut* はⒺの「切る」を表す動詞である。Aii については「切るという過程を経て、プラスチックの形が変わった」と考えられるため、A を満たせる。(30a) のように、主語が主題を表す中間構文が多く見られた。以上の動詞については、A と B を用いて中間構文が可能であると予測でき、事実と合う。

ところが、A と B を満たせる動詞の中には中間構文を取れないとされているものがある。

その例を (31) と (32) で示す。

- (31) a. \*This wall *pounds* easily. (影山 (1998:243))  
b. The Romans soaked the *pounded* seed in wine ... (BNC: FEB)
- (32) a. \*This medicine *swallows* easily. (筆者のインフォーマント調査)  
b. A small, sick feeling lay in Wayne like a *swallowed* stone. (BNC: FYY)

④働きかけ動詞については、(31a) のように中間構文になれない。しかし動詞 *pound* の表現 (31a) に A を適用すると、「叩くという行為の前に壁は存在する」、加えて「叩くという行為によって壁の外見は変えられる」と考えられるため、被影響性を満たせる。(31b) で示されるように、動詞 *pound* は形容詞的過去分詞になれる。A と B の両者とも満たせるため、動詞 *pound* は中間構文に関与できると予測されるが、実際には当該構文に関与できないと分析される。同様に (32) の動詞 *swallow* も先行文献で中間構文を形成できないとされており、BNC で検索しても関連構文が見つからなかった。インフォーマント調査で (32a) の文を確認したところ、1 名が「非文法的」と回答、もう 1 名は「ややぎこちない」と回答したため、動詞 *swallow* は中間構文を形成できないと判断できる。しかしながら A を考えると、(32a) の文は「飲み込むという行為の前に薬が存在し、飲み込まれた後、薬は元に戻すことができないくらい変化している」と解釈できるため、A を満たせる。これについて、「薬が変化するのは、飲むということ以外の要因になる」ということも考えられるが、ここでは「飲み込まれることによって、薬は溶けて変わる」というように考えることとする。(32b) のように形容詞的過去分詞にもなれるため、A と B を満たすことになる。従って、動詞 *swallow* については、被影響性と形容詞的過去分詞性を使った条件では中間構文の形成が可能かどうか予測できない。

A と B を両者とも満たせる動詞が 100 個中 38 個という結果になった。この中で、A と B で説明できる動詞は 38 個中 36 個が BNC で見出されたため、ほとんどの動詞については被影響性と形容詞的過去分詞性の条件で予測できる。しかし (31) の動詞 *pound* と (32) の *swallow* のように、被影響性と形容詞的過去分詞性が問題なく満たされるにも関わらず、事実では不適切な中間構文となるものが存在するということが明らかになった。

第二に、「A のみ満たせない動詞」について検討する。このタイプは、B の形容詞的過去分詞の条件は満たせるが、A の被影響性の条件を満たせないものである。この結果に該当する動詞の例は、(33)-(35)である。

- (33) a. On the whole the translation *reads* well. (BNC: BMK)  
b. Librarians check the *read* books as soon as possible and repair the damaged parts.  
(筆者のインフォーマント調査)

(34) a. The hollow-ground blade, made from chrome-plated carbon steel, will *cut* cleanly ….  
(BNC: CH1)

b. Wynne-Jones constructed a fire and pushed *cut* fragments of the wild pig over the flames.  
(BNC: HTM)

(35) a. \*We carry our wallets whenever we go outside. The money *donates* easily.

(筆者のインフォーマント調査)

b. This gives shoppers the right to purchase *donated* goods at very low prices. (BNC: K51)

上述の全ての動詞については、各 b の文より形容詞的過去分詞が成立するため、B を満たせる。A を満たせない理由について順次見ていく。(33) の動詞 *read* は㊦達成動詞に分類される。この種の動詞は中間構文を認可できると分析されてきたが、A を満たすことができず、事実と矛盾する。(33a) は「読むという過程によって翻訳の文や内容が変わるとは考えられない」ため Aii に抵触する。次に、(34) の *cut* は㊧「切る」を表す動詞が関与する表現であるが、(34a) は、A と B の両方満たせる (30a) とは異なるタイプである。(30a) の主語は主題を表すが、(34a) の主語は道具を表している。(34a) の場合、切る前に研磨された刃は存在するため Ai を満たせるが、切る過程によって刃の特質は変わらないと考えられるため Aii に抵触する。また (35a) の *donate* は、表 (28) と (29) で㊨「中間構文になれるラテン語由来の動詞」としてラベル付けしたものであるが、「寄付するという過程によってお金の特質が変わるわけではない」と考えられるため A を満たせない。先行研究ではラテン語由来の動詞は中間構文に関与できると述べられていたが、インフォーマント調査で確認したところ、受け入れ不可な表現と回答があった。ラテン語由来の動詞については、動詞 *obtain* の中間構文も確認したが、*donate* と同様、受け入れられない表現という結果になった。この点については、本稿の 2.1.4.4 節で議論した Kaga (2007) の分析と矛盾が生じる。動詞 *donate* は中間構文に関与できないということであれば、A と B の定義を満たせないという予測と合うことになる。

上述のように、本稿で分析した 100 個の動詞の中で「A のみを満たせない動詞」が 52 語あり、この内 46 語は中間動詞になれるものであり、6 語は中間動詞になれないものである。要するに、52 語の内、A の条件で予測できない動詞が 46 語あり、A の条件で正確に予測できる動詞が 6 語しかないということが判明した。A の条件で予測できない動詞 46 語について分析すると、㊥作成動詞は Ai を満たせない動詞であるが、その他の多くの動詞が Aii を満たせないため、比較的 Aii の方に問題があるように思われる。以上の結果は、被影響性と形容詞的過去分詞性のみでは中間構文に関与できる動詞について十分な説明ができないことを表している。

第三に、「B のみ満たせない動詞」も 100 個中 5 個見られた。その結果になった動詞について紹介する。B のみ満たせない動詞は以下の通りである。

(36) a. They (=these so-called services) will *abate* only slightly … (BNC: HHX)

b. <sup>\*/?</sup>The *abated* price of that product was not reasonable at all, so nobody bought it.

(筆者のインフォーマント調査)

(37) a. It (=The Moscato) *drinks* wonderfully with chocolate desserts. (BNC: A0C)

b. <sup>??</sup>This is the *drunk* juice. You should dispose it immediately without drinking.

(筆者のインフォーマント調査)

(36) と (37) の動詞が関与する形容詞的過去分詞が BNC で検索できなかったため、b の文を用いてインフォーマントチェックによる調査を行ったところ、全て受け入れ不可能という回答を得た。その結果、A については満たすことができるものの、B が満たせないということがわかった。例えば、(36a) の動詞 *abate* は④状態変化動詞、あるいは①能格構文にも関与できる動詞であるが、Aii については「下げるといふ過程の前にサービスは存在し、下げた後でサービスの特質が変わる」と考えると、被影響性を満たせる。(37a) の動詞 *drink* についても同じように A を満たせる。上述のとおり、(36) や (37) の動詞が関与する中間構文は見られ、A の条件では予測できるが、形容詞的過去分詞の表現については見られず、B の条件で予測できないものがあるということが問題となる。これは、形容詞的過去分詞の必要性について疑問が残る結果となった。

第四に、100 種類の動詞の中で A と B の両方とも満たせない動詞が 5 個あった。その一部の動詞について以下で示していく。

(38) a. <sup>\*/\*</sup>This cake *makes* easily, so I recommend for beginners to try it.

(筆者のインフォーマント調査)

b. <sup>???</sup>She tried to get used to this *made* group, which she disliked at first.

(筆者のインフォーマント調査)

(39) a. These places on a water (that attract casual anglers and, therefore, receive a lot of bait during the daytime) often *fish* well after nightfall. (BNC: HJE)

b. <sup>???</sup>People did not visit the *fished* place after the peak passed.

(筆者のインフォーマント調査)

(38) と (39) の動詞が関与する形容詞的過去分詞については、BNC で検索できず、インフォーマントチェックによる調査を行ったところ、b の文でそれぞれ示されるように、受け入れ不可能である。従って、上述の動詞は B を満たせない。以下、a で例証されている文について論じる。まず、⑤作成動詞に属する動詞 *make* については (38a) のとおり、A と B の条件で中間構文を形成することが不可能であると予測できる。「作るという過程の前にケーキは存在しない」ため Ai に抵触する。(38a) の文についてインフォーマントチェックを行ったとこ

ろ、受け入れ不可であると回答があった。従って、動詞 **make** については A と B の条件で予測することができる。しかしながら、(39) については BNC で見られ、A の条件で予測することができない。(39a) の動詞 **fish** は⑨の名詞由来転換動詞に分類されるが、「人が釣りをすることで、その場所の特質が変わるとは考えられない」とすると Aii に抵触する。ところが、被影響性の条件と形容詞的過去分詞の条件に従うと、中間構文を形成できないと予測されるが、実際には、(39a) のように使われている。(39a) の主語は場所を表していることにも注目したい。主題以外の意味役割を持つ主語名詞は、被影響性を満たせない傾向にある。

本稿で分析した 100 個の動詞の中で「A と B の双方とも満たせない動詞」が 5 個あるが、その条件による予測と事実が合うものとしては、(38) の動詞 **make** のみであり、中間構文に関与できないと説明できる。しかし (39) の動詞 **fish** のように、A と B の両方の条件を満たせないにも関わらず、実際には中間構文に関与できるという動詞が 4 語見られるため、A と B の双方の条件で予測できないということが問題となる。

以上のことから、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) の提案した被影響性と形容詞的過去分詞の条件では、中間構文の形成を許す動詞について十分に予測することができないということがわかった。中間構文に関与できる動詞について、先行分析の通りに定義できるものもあれば、条件で説明できないものも見られ、今後も解明の余地があるとされる。

### 3.1.1.5 潜在的動作主

2.1.5 節で紹介したように、中間構文には潜在的動作主が含まれることが指摘されてきた。安井 (2017) によると、同表現の動作主は舞台裏に存在するというように、明確さの度合いが比較的高い。中間構文の事実観察を行ったところ、潜在的動作主の特徴について支持できるような事例が見出された。

まず、(40)=(26) のような例文を用いて、接触・打撃動詞に関するインフォーマント調査を行った際に、英語母語話者にとっては、その文の行為者についても把握する傾向にあると思われる。

(40) a. <sup>\*OK</sup>Elephants do not kick easily.

b. <sup>\*??</sup>Elephants do not kick senseless easily.

(筆者のインフォーマント調査)

インフォーマント調査で、1 名の英語母語話者より (40) の例文の蹴る行為者とは、象なのかそれとも人間なのかと尋ねられた。とりわけ、中間動詞のような他動詞用法を持つ動詞は、潜在的動作主が含意されていることが必要条件である、ということはこの調査結果でわかった。

加えて、動詞 **open** について興味深い表現が見られた。動詞 **open** は中間構文も能格構文の

どちらも形成可能であり、どちらに当てはまるのか判別が難しいものも見られる。この動詞が関与する案内文が、某人気テーマパークのアトラクションの入口に見られる。その例は(41)で示されるとおりである。

(41) Doors open automatically.

そのアトラクションとは、ゲストが音楽ホールのような会場に入って3D映像を見ながら音楽鑑賞を楽しむというものであるが、その会場にある中待合室のような場所で(41)のような表現が見られる。音楽ホールの会場が整ったら、そのドアが自動に開くというアナウンスも流れており、実際に開場時間になった際、案内のとおりにはドアが自動に開かれた。そのアトラクションの運営スタッフが手動で開けているわけではないが、機械を決まった時間に動かすには機械が独りで動いているというよりもむしろ、誰かの操作が必要であることが明らかである。この状況はちょうど安井(2017)が示したように、中間構文には舞台裏あるいはカーテンの向こう側にひっそりと動作主が隠れているという説明に合う。(41)は自動に開けるというドアの特性を表現しているため、中間構文であると考えられる。これは、動作主の度合いに関する安井(2017)の分析を支持できる。

以上より、中間構文は意味的に動作主が関与しているということが、事実観察からも確認ができ、先行分析の考えを支持できる。

### 3.1.1.6 まとめ

中間構文の意味的特性について先行分析を支持できる点とできない点が多く見られた。まず、支持できる点としては、主語の特性の読みが見られるという点と総称的であるという点である (§3.1.1.1, §3.1.1.2)。副詞については、容易さを表す副詞を始め、副詞表現および法助動詞が現れることも事実観察を通して、明らかにできた。加えて、容易さを示す副詞の他にも、様態を表すもの、程度・強調を表すもの、行為を受けた被動者の結果状態を表すものも見られる (§3.1.1.3)。さらに、潜在的動作主が同表現にも欠かせない要素であるということがわかった (§3.1.1.5)。このような意味的特性が備わっているものが典型的な中間構文であると思われる。

しかしながら、中間構文の意味的特性について、先行分析とは異なる点も幾つか見られた。まず同表現は、原則として単純現在形であることが特徴の1つであるとされていたが、一見事象を表すような過去時制や進行形という形式であっても、特性解釈を与える表現であれば、中間構文として現れることができるという点である (§3.1.1.2)。加えて、先行研究では、中間構文に現れない副詞として、動作主に係るものが挙げられていたが、実際には現れる場合もあるということ、そして、法助動詞が必ずしも副詞の代わりとして現れるわけではないということがわかった (§3.1.1.3)。さらに、動詞の2つの意味的制限が必ずしも当てはまらないこ

とを明らかにした (§3.1.1.4)。第一に、接触・打撃動詞が関与する中間構文および結果述語を伴う当該構文については、先行分析で明らかにされていたことと違う結果を得た。第二に、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) 提案の被影響性と形容詞的過去分詞の条件では、中間構文になれる動詞について十分に予測できない。中間構文には意味的特性が非常に多く見られるが、事実を確認すると、先行分析に合わない特性もある。これは、典型的な中間構文の特徴からはみ出すような例外的なタイプだと考えられる。

### 3.1.2 統語的特性

2.2.1 節で紹介したように、中間構文の主語名詞は、主題を表す目的語であり、内項の主語位置への昇格が生じる (Fellbaum and Zribi-Hertz (1989), Kaga (2007))。BNC で収集した中間構文の主語名詞を確認すると、先行分析のとおり、ほとんどが主題を表す名詞が主語位置を占めている。しかしながら、BNC やインフォーマント調査において、以下のような中間構文も可能であることがわかる。

- (42) a. *The hollow-ground blade will cut cleanly.* (BNC: CH1)  
b. *These places often fish well after nightfall.* (BNC: HJE)  
c. *The wall papers well.* (筆者のインフォーマント調査)

(42a) の主語名詞 *the hollow-ground blade* は道具 (instrument) という意味役割を持ち、(42b) の主語名詞 *these places* と (42c) の主語名詞 *the wall* は場所 (location) という意味役割を持つ。典型的な中間構文の主語名詞は主題を表すとされており、(42) のような表現は、その特徴からはずれた例外的なタイプの中間構文、つまり擬似中間構文に分類されるものと見られる。(42) で示される擬似中間構文については、どのようにして統語的に説明するのかということが今後の課題となる。

### 3.1.3 語彙的特性

2.3.1 節で、Keyser and Roeper (1984) のように中間構文から複合語を形成することはできないという考えもあれば、García de la Maza (2011) のように特殊化した場合は、中間構文由来の複合語は成立するという考えもあるということを紹介した。そこで、中間構文の複合語が存在するか否かを、BNC を使って調査したところ、比較的多く見られることがわかった。その例を以下に示す。(43)-(48) でイタリック体で示した語は、中間構文から派生された-ing 形の複合形容詞である。

- (43) *Best-selling* books, magazine articles and newspaper columns publicized his ideas.  
(BNC: AHV)

- (44) …, but were also flexible enough to shift *fast-selling* consumer goods efficiently. (BNC: CBW)
- (45) She liked her job, she needed her job, the building society with whom she had her mortgage would very much like her to keep her *well-paying* job … (BNC: JY1)
- (46) This is thanks to handling and power which, to my mind, would have posed a greater threat to the Honda NSX's title of *best-handling* car than any Mazda RX-7. (BNC: BM5)
- (47) Thus, the symbol for *easy-reading* historical and period novels would be F8a. (BNC: H99)
- (48) My hand throbbed and with the *quickly-drying* plaster, … (BNC: HW8)

(43) のような *best-selling* は非常に多く見られた。The book sells well の中間構文はよく使われるので、この文が語彙化プロセスを受け、複合語が派生されたと思われる。*best-selling* の他にも、(44)-(48) のように、-ing 形の複合形容詞が多数見られる。例えば (45) の複合語 *well-paying* については、My line of work pays well (BNC: JY8) というような中間構文が実際に見られるため、そこから語彙化され、複合語が形成されたと考えられる。従って、頻繁に現れる中間動詞については語彙化プロセスを受け、複合語が成立する、という García de la Maza (2011) の分析は正しいということがわかる。上記の複合形容詞が修飾する名詞は、全て主題の意味役割を持つ。但し、(49) のような例も見られた。

- (49) … a *fast-cutting* blade for wood and plastics, … (BNC: A16)

(49) の中間構文由来の複合形容詞 *fast-cutting* が修飾しているのは、blade という道具の意味役割を持つ名詞である。この複合語は、3.1.2 節の (42a) で示したような擬似中間構文から派生されたと考えられる。(49) の複合語 *fast-cutting* の基底文は、The blade cuts fast のような擬似中間構文だと予測される。

複合形容詞の他に、-er 形の複合名詞が見られるが、*best-seller* が主流である。その複合語は (50) と (51) で例証される。

- (50) … author Sally Helgerson in her recently published *bestseller* The Female Advantage: Women's Ways of Leadership. (BNC: G32)
- (51) I want to be a *best-seller*. (BNC: EFG)

(50) は「よく売れたもの」を表し、ものとは「本」などのような主題項を表せるようなものが含意されている。その一方で、(51) は「よく売れた人」という意味である。このような語も「実際にものを売った人」というのではなく、「よく売れた作品の作者」ということを表し、メタファーが見られる。*best-seller* の他にも、以下のような -er 形の複合名詞が見出された。



(52) Ironically, of course, the ‘Natural History’ album became a *million-seller*, … (BNC: ED7)

(53) But the machine … has been a *slow seller* despite a \$10 million advertising campaign.

(Time, April 30, 1984, p. 44)

(52) の名詞 *million-seller* と (53) の名詞 *slow seller* も中間構文から派生された複合名詞であると考えられる<sup>38)</sup>。(52) のような *million-seller* は、Her books still sell in millions (BNC: K1G) のような中間構文から派生されたと考えられる。そのような中間構文は「その本（作品）は何百万部も売れる」と解釈されることから、主語名詞の属性を示しているため、中間構文の特徴を持つと考えられる。(53) の *slow seller* に該当する基の中間構文としては、They (= these three products) sell slowly (BNC: B2U) のような文が見られる。この文も、「ゆっくりと売れる」という主語名詞の特性を解釈できる中間構文である。但し、(50)-(53) のような-er 形複合名詞は、BNC でもなかなか検索できなかったため、成立する複合語は限られているようである。

BNC 調査に加え、インフォーマント調査でも中間構文由来の複合語を検証した。まず (54) で示したように、副詞 *easily* を使った語は受け入れ不可能となる。

(54) Recently, students have not read books at all. In order to improve this situation, teachers should

recommend  $\left. \begin{array}{l} \text{OK/OK } \textit{easy-reading} \\ \textit{**easily-reading} \end{array} \right\}$  books to them.

(筆者のインフォーマント調査)

\**easily-bribing* のような複合語は成立しない、と Keyser and Roeper (1984) は論じているが、-ly 形副詞を単純形副詞 *easy* にすると受け入れ可能となる。このように副詞を変えると、Keyser and Roeper (1984) の説明がつかないと考えられる。その次に、動詞 *write* を使った中間構文と同表現由来の複合語は、(55) のとおり、受け入れ不可となることがわかった。

(55) a. *\*\*This essay writes well.* Its organization is good, and the development of the argument is enjoyable.

b. *\*\*I am looking for some well-writing theses to learn how to write a doctoral thesis.*

(筆者のインフォーマント調査)

(55a) のように、動詞 *write* が関与する中間構文は不適格となる<sup>39)</sup>。並びに、(55b) の複合形容詞 *\*well-writing* も成立しない。従って、中間構文の受け入れ可能の度合いと複合語の形成

<sup>38)</sup> (53) の例文は、森田順也氏より提供いただいたものである。

<sup>39)</sup> (55a) は「よく書けている」という状態を表す意味の文であるため、中間構文の文脈に修正した上で、動詞 *write* が関与する表現について今後調査したい。

可能の度合いが一致している。ところが、(56) のように、中間構文と同表現由来の複合語は受け入れ可能であるが、副詞の好みに関して揺れがあるものも見られる。

(56) a. <sup>OK/OK</sup>That famous company continues to produce paper while improving the quality.

Therefore, this paper *folds easily*.

b. <sup>OK??</sup>You can buy *easy-folding* origami at that stationery. I often use it when I make difficult art works.

c. <sup>\*?</sup>We had better give *best-folding* origami to guests from abroad. If it is easy to fold, many children will also be able to make various beautiful art works.

(筆者のインフォーマント調査)

(56a) のように動詞 *fold* が関与する中間構文は受け入れられる。ところが、複合語に関しては、(56b) と (56c) より、副詞を変えると、その複合語の受け入れ可能度が変わる。この違いにはどのような要因があるのかということは今後、調査していきたい。

以上の事実観察より、中間構文由来の複合語は形成可能ということが明らかになった。この結果は、Keyser and Roeper (1984) の分析の反例となる。

### 3.2 理論的側面

本稿の第2章では、中間構文の派生に関する様々な観点から先行分析を取り上げた。本節では、統語・語彙・意味・形態という4つのアプローチの代表的研究を取り上げて、検証する。とりわけ、3.1節の事実観察で明らかにした内容と照らし合わせて、先行分析の問題点を挙げる。

#### 3.2.1 統語的アプローチ

2.6.1節で、中間構文の代表的な統語的派生方法を紹介した。Keyser and Roeper (1984) は、受動構文と同様に直接目的語の移動が起こることを示している。中間構文が統語部門で派生されるということの証拠として、前置詞残留すなわち再分析を受けるとということが挙げられている (Keyser and Roeper (1984: 400))。Kaga (2007) は分裂 VP-shell 構造を用いて、潜在的動作主は基底構造では含まれず、道具や手段を表す表現によって解釈レベルで引き出されるということを主張している。これと反対の意見を述べているのが Fagan (1988) であり、中間構文の形式に関与しない考えである。Fagan (1988: 184) は「外項に与えられる意味役割に任意の解釈を与え、直接目的語の意味役割を外在化すると、中間構文が派生される」と主張する。

ところが、3.1.2節で紹介したように、中間構文の主語名詞が道具や場所を表すものもある。その例を (57a) (= (42a)), (58a) (= (42b)), (59a) (= (42c)) で示す。(57b), (58b), (59b) は各 a の文の基底文である。

(57) a. *The hollow-ground blade will cut cleanly.* (BNC: CH1)

b. People will cut something with the hollow-ground blade cleanly.

(58) a. *These places on a water often fish well after nightfall.* (BNC: HJE)

b. People often catch fish well at these places on water after nightfall.

(59) a. *This wall papers well.* (筆者のインフォーマント調査)

b. People apply wallpaper to this wall well. (This wall is papered well.)

(57a) の主語名詞は道具を表し, (58a) と (59a) の主語名詞は場所を表す。このような名詞は, 各 b の文で示したように, 前置詞句 PP の内部にある名詞句である。このような前置詞句の中から名詞句を取り出して移動することは, 問題であるように思われる。その上で, 潜在的動作主についても疑問が残る。中間構文には道具表現が含意され, そこから解釈レベルで動作主の読みが得られるという理由により, 当該構文の統語構造には動作主が見られない, と Kaga (2007) は主張している。(57a) のように動作主が統語的に表現されなくとも, 解釈のレベルで (57b) のように動作主が存在すると捉えることができるため, Kaga (2007) の分析は正しいと思われる。しかし, 道具表現の要素がない中間構文の場合も, 潜在的動作主があるため, 統語構造においても潜在的動作主の要素を残すべきだと思われる。

加えて, 中間構文は再分析を受けることができ, 前置詞を削除すると非文法的な文になる, と Keyser and Roeper (1984) は論じているが, その反例になると考えられる事実がある。3.1.3 節で (57a) のような中間構文から派生された複合形容詞が (60) (=49) のように見出されたことを示した。

(60) … *a fast-cutting blade for wood and plastics,* … (BNC: A16)

(60) の *a fast-cutting blade* は「速く切れる刃」という解釈を持ち, 名詞 *blade* は道具の意味解釈を持つ。このように考えると, (60) の *cutting* は「～で切れる」というように, 「～で (を用いて)」という前置詞句に相当するような要素が動詞に含まれると予測される。中間動詞の中に前置詞が含意されると仮定すると, 統語構造上, 中間構文では前置詞を削除することができ, 前置詞残留すなわち再分析は不可であると考えられる。Keyser and Roeper (1984) によると, 再分析の可能性は, 中間構文が統語構造で派生されたという分析を支持するということであるが, 上述のように, この統語的分析にも問題点が残ると思われる。

さらに, Keyser and Roeper (1984) の先行分析の統語的派生方法について概観すると, 中間構文に必要な副詞表現に関する記載がないことがわかる。しかしながら, 副詞表現は中間構文では必要な要素であるため, この表現をどのようにして構造に反映させるのかということを考えるべきである。

従って, 統語的派生方法については中間構文の形成を十分に説明できない部分が見られる。

主題項の名詞句が主語位置へ移動するという要素は統語で説明できるが、主題項以外の名詞句が主語であるような場合や、潜在的動作主及び副詞表現については統語的にどのように説明するのかということを検討する必要があると思われる。

### 3.2.2 語彙的アプローチ

2.6.2 節では Fagan (1988) による中間構文の語彙的派生方法を示した。この方法は、外項に与えられる意味役割に「誰かが」というような任意の解釈を与え、直接目的語に付与された意味役割を外在化させることで、他動詞から自動詞へと交替ができるというものである。Fagan (1988) はこの方法により、統語での規則は不要となると主張する。本節では、この語彙的アプローチを直接問題にしないが、Fagan (1988) の分析に支持できない点について取り上げる。

Keyser and Roeper (1984) が示した、第一姉妹の法則による総合複合語の形成が中間構文では不可であるということについて、Fagan (1988) は次のような反論をしている。*\*easily-bribing* が不可となるのは、中間構文が語彙部門では派生されず、統語で形成される証拠であると示されているが、*\*easily-bribing* は複合語ではなく、動詞状形容詞 (*gerundive adjectives*) という統語的な句である (Fagan (1988: 186))。動詞状形容詞とは、事象を示し、永続的な特徴を示さないという句であり、(61) のようなものが該当する。

(61) the rapidly revolving gears

(Fagan (1988: 186))

中間構文は非事象性であるため、事象を示すという動詞状形容詞の条件に合わないため、中間構文から複合語の派生ができない。従って、上記の例は中間構文を統語部門で作ることの証拠とはならない。

ところが、3.1.3 節の事実観察の結果で示したように、中間構文から派生される複合語は存在する。(62a) (= (43)), (62b) (= (45)), (62c) (= (47)) のような例が見られる。

(62) a. *Best-selling* books, magazine articles and newspaper columns publicized his ideas.

(BNC: AHV)

b. She liked her job, she needed her job, the building society with whom she had her mortgage would very much like her to keep her *well-paying* job ...

(BNC: JY1)

c. Thus, the symbol for *easy-reading* historical and period novels would be F8a. (BNC: H99)

従って、(62) の事実より、中間構文から複合語が派生されないため統語で作られないという Fagan (1988) の説明に合わない。それに加えて、*-ing* 形複合形容詞の中には、(63a) (= (56c)), (63b) (= (55b)), (63c) (= (56b)) のように、複合語として成立しないものもある。

- (63) a. <sup>\*/?</sup>We had better give *best-folding* origami to guests from abroad.  
 b. <sup>\*/\*</sup>I am looking for some *well-writing* theses to learn how to write a doctoral thesis.  
 c. <sup>OK??</sup>You can buy *easy-folding* origami at that stationery.

(筆者のインフォーマント調査)

統語的な句であれば, (62) のように生産的で自由に形成されるはずだが, (63) より, 必ずしも全ての中間動詞が複合語を形成するとは限らないため, 中間複合語が成立するための規則があると予測される。それに加えて, *-ing* 形の複合形容詞だけでなく, (64a)(= (50)) と (64b) (= (51)) のように *-er* 形の複合名詞も実際に存在する。

- (64) a. ... author Sally Helgerson in her recently published *bestseller* *The Female Advantage: Women's Ways of Leadership*. (BNC: G32)  
 b. I want to be a *best-seller*. (BNC: EFG)

上述より, 中間構文由来の複合語が実際に見られる。この複合語に関する事実は, 中間構文の複合化が不可という証拠により当該構文は語彙部門で派生されるという Fagan (1988) の主張に結びつけることができない。それに加え, *-ing* 形複合形容詞は統語的な句であるという Fagan (1988) の説明も正しくない。従って, Fagan (1988) の分析についても問題点が見られる。加えて, Fagan (1988) が提案した中間構文の語彙的派生方法については, 副詞表現に関する記述がない。語彙部門では, どのようにして副詞表現の存在を反映させるのかということも考える必要があるように思われる。

### 3.2.3 意味的アプローチ

2.6.3 節で取り上げた中間構文の意味的派生方法の問題点について本節で提示する。ここでは, 影山 (1998) と Randall (2010) の分析について取り上げる。

まず, (65) と (66) で例証されるように, 接触・打撃動詞が結果述語と共起すると, 受け入れ可能な中間構文になるという事実から, 同表現は (67) のような状態変化を表せるような意味構造を持つ, と影山 (1998) は提案している。

- (65) a. <sup>\*</sup>This counter wipes quickly.  
 b. This counter wipes clean quickly.  
 (66) a. <sup>\*</sup>Elephants don't kick easily.  
 b. Elephants don't kick senseless easily. (影山 (1998:277))  
 (67) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]] (影山 (1998:277))

ところが、3.1.1.4 節で示したように、(68) (= (24)) のように受け入れ可能なものもあれば、(69) (= (25)) と (70) (= (26)) のように受け入れ不可のものもある。

- (68) a. <sup>OK/OK</sup>This new ball *hits easily*.  
 b. <sup>OK/??</sup>This new ball *hits far away easily*.  
 (69) a. <sup>??/??</sup>This counter *wipes quickly*.  
 b. <sup>??/??</sup>This counter *wipes clean quickly*.  
 (70) a. <sup>\*/OK</sup>Elephants do not *kick easily*.  
 b. <sup>\*/??</sup>Elephants do not *kick senseless easily*. (筆者のインフォーマント調査)

(68a) は打撃動詞 *hit* が関与する典型的な中間構文の形式であり、(68b) は結果述語が含まれる形式であるが、どちらもほぼ受け入れ可能である。(69) の接触動詞 *wipe* が関与する表現と (70) の打撃動詞 *kick* が関与する表現については、それぞれ (65) と (66) で示したように、影山 (1998: 277) が例証した表現と同じ文を用いて調査した。(69a) の接触動詞 *wipe* が関与する典型的な中間構文については、先行分析と同じく、容認度が低いと判断された。(70a) の打撃動詞 *kick* が関与する典型的な中間構文については、1名の英語母語話者が先行分析と同様に不適格と判断したが、もう1名の英語母語話者は適格と判断したため、先行分析とやや異なる結果になった。ところが、(69a) と (70a) のそれぞれに結果述語の *clean* と *senseless* を加えて調査したところ、(69b) と (70b) で示したように、先行分析に反し、受け入れ不可という結果を得た。かくして、必ずしも結果述語を補うことによって中間構文が成立するわけではないため、(67) のような状態変化を表せる意味構造では説明ができないと思われる。

加えて、Randall (2010) は、中間動詞 *read* の意味構造 (語彙概念構造) を (71) のように示している。

- (71) [STATE BE ([EVENT CAUSE (x, [BECOME (y, [PLACE AT [PLACE<IN MIND>]])]), [PLACE<EASY>]])]

(Randall (2010: 122))

(71) の意味構造も (67) で示した影山 (1998) の構造と類似しており、状態変化を表すように考えられている。しかしながら、(71) の意味構造を解釈すると「心の中に入っていく」となり、やや不自然に思える。上記の接触・打撃動詞の事例と同様に、動詞 *read/sell* の事例についても、状態変化を示す意味構造では説明できないと考えられるため、問題となる。

以上より、影山 (1998) や Randall (2010) が示したような中間構文の意味構造のみでは、同表現の派生を十分に説明できないと考える。中間構文では意味的特性が多く見られるが、派生過程については意味的作用だけでなく、他の部門での作用も働くと思われる。

### 3.2.4 形態的アプローチ

従来の分析では、中間複合語に関して意見が分かれる。Keyser and Roeper (1984) のように、中間構文から派生される複合語は存在しないと論じるものもあれば、García de la Maza (2011) や Oshita (1994) のように、限られた場合のみ存在すると論じるものもある。本節では、2.3 節で紹介した Keyser and Roeper (1984) による形態的分析についての問題点を取り上げる。加えて、2.6.3.4 節で概観した Oshita (1994) の語彙的及び形態的分析では、中間複合語ができると論じられているが、同表現に関する事実観察をした結果、その分析にも不十分な点が見られるため、その問題点を述べる。さらに、総合複合語の形成に関する代表的な論文の1つである Lieber (1983) の分析を用いて考察した結果について述べる。

まず、中間構文由来の複合語は第一姉妹の法則に従えないため、形成されない、と Keyser and Roeper (1984) は主張している。ところが、3.1.3 節の事実に紹介したように、中間構文から派生された複合語は存在するため、Keyser and Roeper (1984) の分析は問題となる。

それに加えて、Oshita (1994) は項構造の分析に基づいて同表現由来の複合語の形成過程を紹介する際に、best-selling のような-ing 形の複合形容詞についてのみ取り上げ、best-seller のような-er 形の複合名詞については取り上げていなかった。しかし、BNC 調査より、best-seller のような複合名詞の例も実際には見られた。動詞由来の形容詞と比べると、名詞形の複合語の形式は限定的ではあるが、その形成も説明できるように導く必要がある。

中間構文由来の複合語が実在するにも関わらず、従来、その形成に関する分析がされていない。総合複合語の形成に関する代表的な分析である Lieber (1983) の「素性の浸透」と「項連結の原理」を用いて、best-selling の語彙構造を考える<sup>40</sup>。Lieber (1983) が示した複合語形

---

<sup>40</sup> まず素性浸透とは、V のような範疇素性が語彙構造上、枝分かれ節点あるいは枝分かれでない節点へと浸透するというものであり、4種類の convention が設定されている (Lieber (1983: 252-253))。

(i) 素性浸透 (Feature Percolation Conventions)

a. Convention I

範疇素性を含む語幹形態素の全ての素性は、その形態素を支配している最初の枝分かれでない節点に浸透する。

b. Convention II

範疇素性を含め、接辞形態素の全ての素性は、その形態素を支配している最初の枝分かれ節点に浸透する。

c. Convention III

枝分かれ節点が Convention II によって素性を得ることができなければ、その隣の最も低いラベル付けされた節点からの素性が自動的に、ラベル付けされていない節点に上へ浸透する。

d. Convention IV

2つの語幹が姉妹関係であれば (すなわち2つの語幹が複合語を形成すれば)、右側語幹の素性は、その語幹を支配している枝分かれ節点の上まで浸透する。

加えて、項連結の原理 (Argument-linking Principles) とは以下の (ii) と (iii) の条件である。

(ii) [ ]<sub>VP</sub> [ ]<sub>α</sub> または [ ]<sub>α</sub> [ ]<sub>VP</sub> という構造において、V/P は全ての内項と link できなければならない。

(iii) もしある語幹 [ ]<sub>α</sub> が項を取る語幹を含む複合語の中で free ならば、項を取る語幹の semantic argument (Locative, Manner, Agentive, Instrumental, Benefactive) として解釈可能でなければならない。 (Lieber (1983: 258))







## 第4章 提案

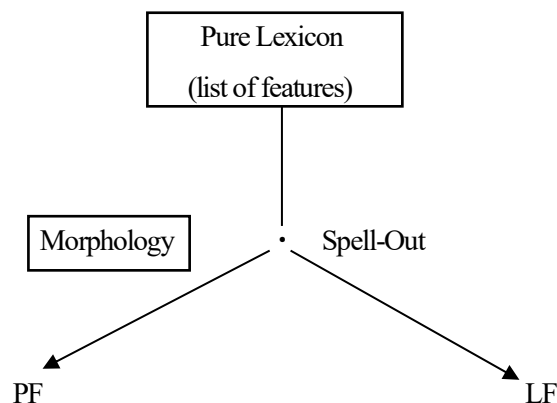
3.2 節では統語・語彙・意味・形態という4つの理論的側面から中間構文の派生やその由来の複合語の形成について考えたが、どの側面についても問題点が見られた。本章では、第3章で明らかにした当該構文の特性を説明し、従来の派生メカニズムの問題点を解消できるような中間構文の生成方法について、分散形態論を用いて提案していく。英語の中間構文だけでなく、その由来複合語の派生と日本語の中間構文の派生について統一的に捉えられる筆者の提案を示す。まず、4.1 節で分散形態論の概要を紹介し、4.2 節では英語の中間構文とその由来複合語、そして日本語の中間構文の派生メカニズムを示す。4.3 節では、4.2 節で提案したメカニズムにおける帰結を述べる。

### 4.1 分散形態論

1980年代までは、語形成は語彙部門のみで行われるという語彙主義の考え方が主流であった。その後、語形成と文の構築において、結合規則が一般に似ているということにより、主要な語形成のプロセスは語彙部門の外で行われるという反語彙主義の考え方が提案された。統語と形態を混合させ、それぞれの部門でバランスよく語形成の特性を捉えるという考え方が、いわゆる分散形態論 (Distributed Morphology, DM) である。これは、Halle and Marantz (1994) が提唱した枠組みで、従来の語彙部門の機能を4つの部門に分散させるという考え方である。本節では分散形態論について概観する。

分散形態論では、(1) のように、従来の語彙部門の機能を、語彙部門である「純粋な語彙部門」 (Pure Lexicon), 形態部門 (Morphology), 論理形式部門 (Logical Form, LF), そして音声形式部門 (Phonetic Form, PF) という4つの部門に分散させ、それぞれの部門で必要な操作が適用されて、語が派生するという考え方である<sup>43)</sup>。

(1)



<sup>43)</sup> (1) の図は、中村・金子・菊地 (2001: 146-148) や森田 (2005: 36) が示した図を参考に、本稿の筆者が簡略化させたものである。

まず、素性の束 (list of features) が集まった「純粋な語彙部門」より必要な素性を取り出し、統語作用が働いた後で、一定の構造が構築され、音声に関わる情報が音声形式部門に送られる。この操作を音声化 (Spell-Out) と言う。音声形式部門は、調音・知覚体系 (articulatory-perceptual system) とのインターフェイスの役割を果たす。音韻以外の情報、つまり、意味情報については、論理形式部門に送られて、さらに規則の適用を受ける。論理形式部門は、概念・意図体系 (conceptual-intentional system) とのインターフェイスの役割を果たす。そして、音韻形式部門側の形態部門で合併 (merger) や削除 (impoverishment) のような一連の形態作用が適用され、語の構造を作る。合併とは、終端連鎖で隣接した構成素を合わせて、ゼロレベルの範疇を作るということである。削除とは終端節点の統語的素性を除くという作用で、例えば、語内部の複数形接辞の-s のような機能範疇を削除することである。そして、形態部門に属する「語彙」(Vocabulary) にある語彙項目は、この段階で挿入される。これを語彙挿入 (lexical insertion) と言い、統語後に挿入が行われるため、後期挿入 (late insertion) と言う。

分散形態論における重要な点が 2 つある。1 つ目は、統語後の形態論 (post-syntactic Morphology) であり、音声形式部門の中で、形態的作用が統語的アウトプットへ適用され、語の構造が作られるということがポイントの 1 つである。2 つ目は、後期挿入であり、「語彙」にある語彙項目を音声形式部門で挿入させるということである。

以上のように、分散形態論では、統語部門と形態部門に、語の情報を適切に分散させながら、複合語を形成するというものである。以下では、この考え方をを用いて、中間構文とその関連表現の生成メカニズムを考えていく。

## 4.2 中間構文とその関連表現の生成メカニズム

4.1 節で取り上げた分散形態論的視点から、本節では、英語の中間構文とその由来複合語、そして日本語の中間構文の派生メカニズムに関する提案を示していく。4.2.1 節では、英語の中間構文の派生について、4.2.2 節では英語の中間構文由来複合語の形成について、そして 4.2.3 節では、日本語の中間構文の派生について取り上げる。

### 4.2.1 英語の中間構文の派生

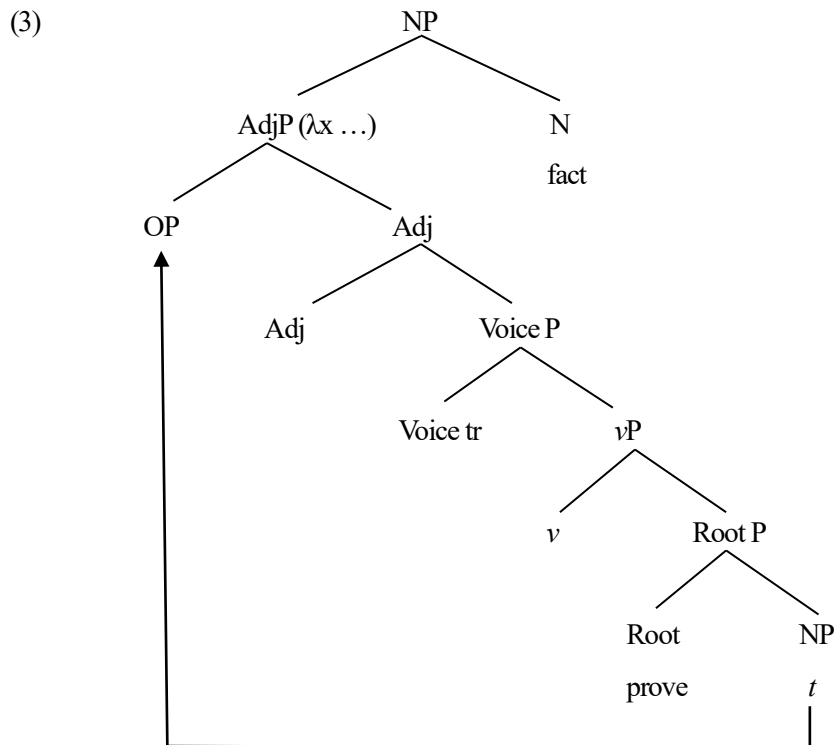
Bruening (2014) は、形容詞的受動形 (adjectival passives) の派生を、分散形態論を用いて提案している。この分析を用いて、分散形態論を用いた説明の妥当性を簡潔に示す。形容詞的受動形とは、含意された外項を含む他動詞から派生された、受動形の接辞-ed が付加された形容詞である。例えば、(2) の *frozen* や *hammered* のようなものがこれに該当する。

(2) a. This river appears *frozen* solid.

b. This metal looks *hammered* flat.

(Bruening (2014: 386))

形容詞的受動形が潜在的な外項を持つという点は、中間構文と同じ性質を持つと考えられる。Bruening (2014) は、形容詞的受動形の派生構造を (3) のように示している<sup>44)</sup>。ここでは、名詞句 *proved fact* を例に考えられている。



(Bruening (2014: 386))

(3) のように、Voice P への形容詞の付加により *v* の投射を状態化させることで、*proved* は特性 (property) の解釈となり、AdjP 内では内項 NP を指定部 (specifier) へ移動させる。ここでは、当該 NP を空の演算子 (operator, OP) と仮定する。OP は実際には lambda-abstractor であり、個体レベルの述語 (individual-level predicates) を形成する。OP は音形を持たないが、(3) で図示したように、名詞 *fact* と結びつくことにより、*proved fact* という名詞句が形成される。

<sup>44)</sup> Bruening (2014) の分析を用いて、Morita (2020) は -able 派生語の分散形態論的派生方法を考案し、-able 派生語についても、分散形態論で説明ができると論じられている。-able 接辞は、中間構文になれる動詞にも付加されることができ、本稿の筆者が BNC で -able 派生語を検索したところ、該当する例が多く見られた。その例を (i) に示す。

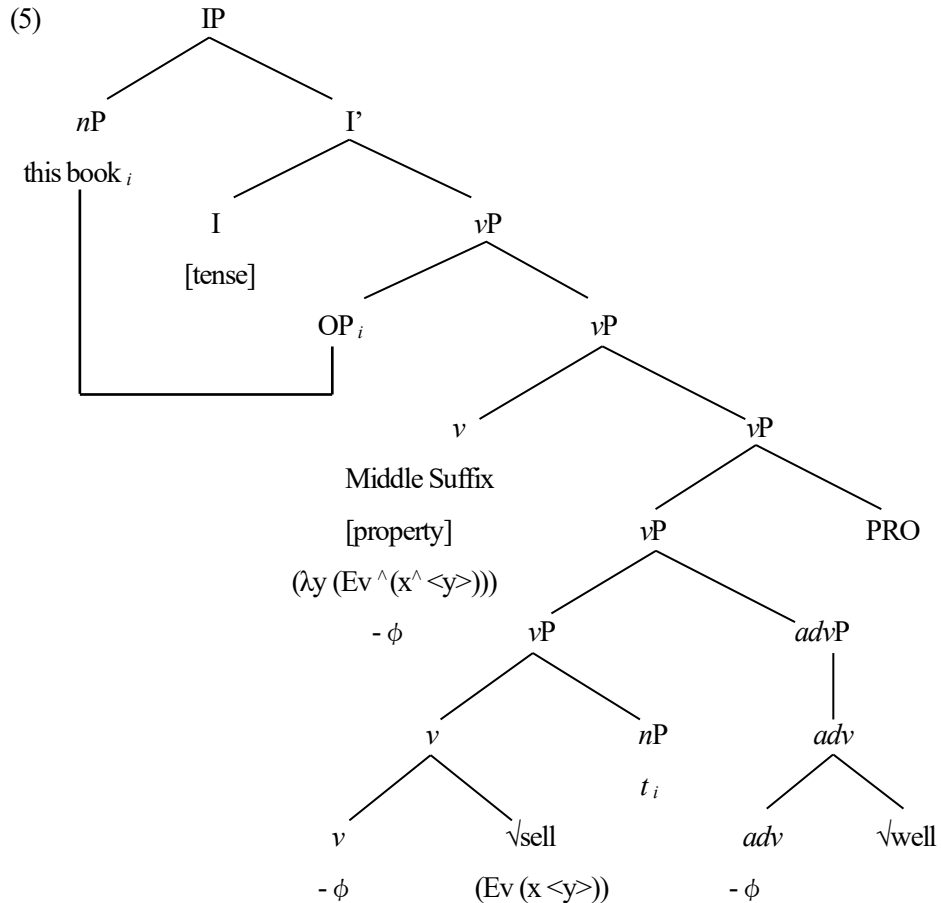
- (i) a. Megarry (1985) provides a particularly *readable* introduction. (BNC: H88)  
 b. Because you know you would think near Lacydere the houses are *sellable*. (BNC: KBE)  
 c. Scientists then set a goal: *fishable*, *swimmable* water that could support existing biota. (BNC: B7L)  
 d. However, the windows must still be *openable*, ... (BNC: ECJ)

これより、(3) のように示された Bruening (2014) 考案の形容詞的受動形の派生構造を用いて、中間構文を考えようという構想に至った。

上記の特性解釈化や個体レベル述語化の操作は、Kageyama (2006) で提案された中間構文の形成にまつわる操作と類似している。

Bruening (2014) の分析に基づき、(4) のような中間構文の派生構造は (5) のようになると筆者は提案する。

(4) This book sells well.



まず中間構文の基底構造が他動詞構造であることから、sell を含む動詞句 vP には、内項に相当する名詞句、副詞句、及び、潜在的動作主に相当する名詞句 PRO が含まれると考える。この段階では、動詞 sell が持つ事象構造は、(5) で示したように、 $(Ev(x <y>))$  である。中間構文の内項は後に移動作用を受けるため、痕跡 (trace,  $t$ ) として表している。動詞 sell とその名詞句 nP で結合し、動詞句 vP となる。加えて、中間構文に必要な要素の一つでもある副詞句 advP もその後に付加され、vP となる。その後に PRO が付加されるという構造になると考える。PRO を付加詞の位置に置く理由としては、「中間構文の照応形は PRO と一致し、その PRO の位置は動詞句の付加詞である」という Stroik (1992: 134-135) の考えを採用し、その位

置に置くことが適切と判断している<sup>45)</sup>。その後、他動詞構造の動詞 *sell* は中間接辞 (Middle Suffix) と結合する。中間接辞は、過程・事象動詞を特性動詞に再範疇化する動詞化接辞 (verbalizer) である。中間動詞には態変換に係わる形態素が関与している、という藤田・松本 (2005) の分析を 2.2.5 節で紹介した。このような接辞を仮定し、その接辞付加の作用を受けて、非事象的で、特性の解釈を持つという中間構文に必要な特徴が得られる。これは、Kageyama (2006) が示したように、中間構文形成の際には event 解釈から property 解釈へと変わり、それと同時に、外項が抑圧され、内項が外在化されることで、事象構造が ( $\lambda y (Ev^{\wedge}(x^{\wedge}\langle y \rangle))$ ) になるという過程に対応する。特性範疇化の一般的性質として、内項の OP は痕跡 *t* のみを変項として束縛するため、痕跡 *t* を残し、内項の OP は *vP* の指定部に移動する。そこで、OP は、IP の指定部にある外項 *this book* とリンクする<sup>46)</sup>。外項は、この位置であれば、I の AGR より格が与えられることとなる。本稿では、TP や IP, CP については議論しない。以上のような基底構造が中間構文派生に必要である。

(5) のような構造が統語で作られ、音声形式部門 (PF) に送られ、そこで語彙挿入が起こる。中間接辞は、(6) のような語彙記載項を持ち、(iii) の認可条件に合う場合のみ挿入することができ、(4) のような典型的な中間構文が形成される。

(6) Core lexical entries of the Middle Suffix -  $\phi$  (major rule)

| (i) internal features           | (ii) meaning | (iii) license environments  |
|---------------------------------|--------------|---|
| [ <i>v</i> ] [property] [modal] | 'potential'  | +< <i>v</i> [transitive, dynamic, change of state]><br>+< <i>adv</i> [manner, degree, resultative]> |

(6) の (i)-(iii) にあるそれぞれの条件について、以下で説明する。まず (i) の内的素性 (internal features) は、中間接辞が *v* の素性を持ち、特性 (property) を持つことを表す。[property]

<sup>45)</sup> Stroik (1992: 134) は、(i) のような照応形を伴う中間構文の基底構造を (ii) のように示している。

(i) Books about oneself never read poorly.

(ii) [<sub>IP</sub> e [<sub>I</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> never read books about oneself poorly] PRO]]]. (Stroik (1992: 135))

(i) の照応形 *oneself* は、(ii) の基底構造で、PRO が照応形を C 統御する (c-command) するレベルで、束縛される。この構造であれば、照応形は PRO と一致し、(iii) のような PRO と合わない特徴を持つ照応形は認可されない。

(iii) \*Books about herself read poorly. (Stroik (1992: 136))

加えて、(ii) のような基底構造であれば、(iv) の事実に合うこととなり、外項は基底構造で束縛されるという分析を支持できる。

(iv) Books about herself read quickly for Mary. (Stroik (1992: 136))

<sup>46)</sup> 高野祐二氏より、(5) の構造と OP の作用については、中間構文と類似した (i) のような難易構文 (tough construction) にも結びつけられるとコメントをいただいた。Chomsky の分析では、(i) の基底構造は (ii) のように示されている。

(i) This book is easy to read.

(ii) This book is easy [<sub>OP</sub> PRO to read <sub>*t*</sub>].

(ii) の *this book* と OP に同一指標が与えられ、主節主語が不定詞節内の動詞の目的語に意味上対応することが捉えられる。中間構文と難易構文との関連性について調査することも、今後の課題としたい。

と統語的・意味的に合わないケースは排除される。例えば, (7a) (=第2章の (2b)) のように, 過去時制 ([+past] tense) が用いられ, 事象を表す場合は排除される。一方で, (7b) (=第3章の (6a)) の文は現在進行形で表されるが, 主語名詞 a soft drink の特性の解釈ができるため, (6) の条件を満たし, 可能な中間構文となる。

- (7) a. <sup>?</sup>Yesterday, the mayor *bribed* easily, according to the newspaper. (Keyser and Roeper (1984: 384))  
 b. A soft drink made from the Elderflower *is selling* well, … (BNC: K1S)

従って, ‘having the nature of’ の意味を中間構文が備えていることが捉えられる。また [modal] は, (8a) (=第3章の (19b)), (8b) (=第3章の (20a)), (8c) (=第3章の (21)) のように, 中間構文が法性と関わる点で, この情報も含まれると考えられる。

- (8) a. … so the windows *can* still slide easily. (BNC: CCX)  
 b. … otherwise the card *may* curl horizontally and fall over. (BNC: CN4)  
 c. The board *should* balance well in this position. (BNC: AT6)

そして, (6) の (ii) 意味 (meaning) を可能 (potential) と指定するのは, 中間動詞が, can がなくても「～できる」という意味を持つためである。加えて, 先行研究やBNC 調査より, can や -able と関わることができ, (8a) のような中間構文も多く見出されるため, 可能の意味が含まれると考えられる。

(6) の (iii) 認可環境 (license environments) とは, (5) の中間接辞の補部にあたる vP の情報について記したものである。これは, 先行研究や事実観察で明らかにした中間動詞の制限と副詞の制限に基づいている。まず動詞 v は他動詞であり, 動作を表すものである。ここで (4) の動詞 sell や (9a) (=第3章の (33a)) の動詞 read のようなものが該当する。また状態変化を表す動詞も多数あり, 例えば, (9b) (=第3章の (12b)) のような動詞 open/close, (9c) (=第3章の (30a)) のような動詞 cut, そして (9d) の動詞 bruise のような名詞由来転換動詞などが該当する。

- (9) a. On the whole the translation *reads* well. (BNC: BMK)  
 b. The water *opens and closes* continuously. (BNC: APS)  
 c. Cellular plastic is easy to use. It *cuts*, screws and nails just like wood. (BNC: ECJ)  
 d. Potatoes *bruise* easily, so treat them with care. (BNC: EEA)

これにより, (iii) の条件に合う動詞のみが中間構文に関与でき, この条件に合わないものは

外れる<sup>47)</sup>。例えば、動詞 *know, hate* は状態動詞であり、 [+stative] という素性を持つ。(iii) の認可環境で「動作を表す他動詞」としているため、動詞 *know, hate* はこの素性に合わず、(10a) (=第2章の (19d)) と (10b) (=第3章の (8)) のような中間構文は許されない。

(10) a. \*The answer *knows* well. (Fagan (1988: 68))

b. \*<sup>??</sup>That girl *hates* easily because she brags about everything.

(筆者のインフォーマント調査)

副詞 *adv* については、3.1.1.3 節で提示したように、典型的な中間構文で現れる副詞は、様態を表すもの、程度・強調を表すもの、そして行為を受けた被動者の結果状態を表すものという3つのパターンが見られる。様態を表す副詞には、容易さ、速さ、頻度、自動を表す副詞が含まれる。従って、(6) の (iii) の副詞に関する認可条件を、様態 (*manner*)、程度 (*degree*)、結果 (*resultative*) とする。この情報より、(11) (=第3章の (10), (11)) のような様態副詞、(12) (=第3章の (14)) のような程度を表す副詞、(13) (=第3章の (15)) のような被動者の結果状態を表す副詞が許される。

(11) a. The long wings fold *easily* over the small body. (BNC: CL0)

b. But bread with 5 percent guar bakes *well* and tastes like ordinary bread. (BNC: B76)

c. It (= straw or paper) burns *slowly* when ignited and gives off a pleasing smell. (BNC: FBA)

(12) a. All airbrakes *close fully* before they lock. (BNC: A0H)

b. Of course, sterile collecting procedures *add significantly* to the difficulty of field work.

(BNC: B73)

(13) a. It (=Ask) cuts well, and splits *beautifully*, … (BNC: H13)

b. …, but it (=linen) creases *badly* unless treated with the appropriate finish. (BNC: GUB)

c. The fire burns *evenly* with a thin hot flame, … (BNC: FAJ)

その一方で、(14) (=第2章の (12b)) の *intentionally* は中間構文で許されない副詞である。

(14) \*This paint sprays on *intentionally*. (Fellbaum (1985: 26))

Fellbaum (1985: 26) によると、(14) の *intentionally* は精神状態を表す副詞 (“moral” adverb) と

<sup>47)</sup> (6) の (iii) の認可条件では、以下のような中間構文で認められないとされる動詞にも適用される場合がある。例えば、以下のような作成動詞が該当するが、この問題については、今後の研究課題としたい。

(i) \*These cabinets *build* easily. (Kaga (2007: 201))



呼ばれるものであり、行動している誰かに対して自動的には抱けないような精神的な気持ちや考えを表す。従って、副詞 *intentionally* は様態とは異なるため、(6) の (iii) の条件に合わず、中間構文で許されない副詞となる。

以上のように、(6) の (iii) のような認可条件に合う動詞と副詞に中間接辞が挿入され、容認可能な中間構文が形成されるが、上記の認可条件に合わない動詞と副詞については中間接辞が挿入されず、当該構文が成立しない。

中間構文で現れる主語名詞句については、(5) の派生構造より、他動詞の内項に相当し、意味役割は主題 (*theme*) であることが当然となる。加えて、局所性 (*locality*) の視点より、(5) の構造上、中間接辞から遠い位置にある *nP* について指定する必要はなく、*OP* にある述語形式の特質によって主語名詞句が主題を表すことになる。従って、(6) の語彙記載項では中間構文の項について指定しない。

以上のように、(6) で示す中間接辞の主要な規則 (*major rule*) が適用されることで、(4) のような典型的な中間構文が生成される。この規則に合わないものは、排除される。

しかし中間構文の中には、(6) の条件に合うような典型的なタイプ以外にも、当該構文として認められるものも見られる。例えば、当該構文には擬似中間構文と呼ばれるものもあり、(15) (=第3章の (42a) と (42b)) のような例が見出される。

(15) a. *The hollow-ground blade will cut cleanly.* (BNC: CH1)

b. *These places often fish well after nightfall.* (BNC: HJE)

(15a) のような主語名詞句 *the hollow-ground blade* は、道具を表し、(15b) の主語名詞句 *these places* は場所を表すため、(5) の派生構造で説明できない。さらに、副詞についても、(6) の (iii) の認可条件に外れるが、中間構文として認められるものが見られる。例えば、(16) (=第3章の (16)) で示すように、動作主指向の副詞も当該構文に関わることができる。

(16) a. *The scales read accurately.* (BNC: FEX)

b. *'My Friend's name' builds carefully.* (BNC: CAD)

上述 (15) と (16) のようなタイプは、典型的なタイプと比べ、限られており、少数派の中間構文とされる。かくして、(6) の規則が緩んで当該構文が派生される場合がある。このようなタイプが派生されるためには、周辺の規則 (*peripheral rule*)、すなわち、少数派規則 (*minor rule*) が必要である。筆者はその規則を (17) のように提示する。

(17) Peripheral lexical entries of the Middle Suffix -  $\phi$  (minor rule)

| (i) internal features   | (ii) meaning | (iii) license environments                      | (iv) argument                       |
|-------------------------|--------------|---|-------------------------------------|
| [v] [±property] [modal] | 'potential'  | +<v><br>+<adv [manner, degree, agent-oriented]> | +<nP [Theme, Instrument, Location]> |

(6) の典型的なタイプと (17) の周辺的なタイプの相違点について、以下で説明する。まず、(17) の (i) 内的素性は、中間接辞が *v* の素性を持ち、「事象 (event) を表すように見えるが特性を表すようなもの」を表す。例えば、García de la Maza (2011: 168-169) が指摘するように、(18) のように過去時制が用いられるものの特性解釈を持つ場合であれば、中間構文として認められる。

(18) It (= this book) translated really easily.

(García de la Maza (2011: 169))

そして、(17) の (iii) 認可環境は、先行研究や事実観察で明らかにした周辺的な中間構文の動詞の制限と副詞の制限に基づいている。まず動詞 *v* の制限については、様々なタイプがあり、(6) よりも制限が緩められると考える。例えば、動詞 *build* のような作成動詞が中間構文では許されないとされるが、(16b) のように現れる場合も見られる。このようにして、(6) の規則に合わないが、許されるタイプの動詞が、(17) によって適用される。

さらに、(17) の (iii) の副詞 *adv* に関する認可条件を、動作主指向 (agent-oriented) と記載する。(16) の副詞 *accurately* や *carefully* のように、動作主指向の副詞が実際に使われることもあるため、このような制限があれば、動作主指向の副詞が挿入されることができる。

最後に、(17) の (iv) の項 (argument) は、内項の意味情報を表す。典型的な中間構文と同様、(16) のように、主語名詞句の意味役割が主題 (theme) であるものが見られる。それに加えて、(15a) のような道具 (instrument) を表す主語名詞句、そして (15b) のような場所 (location) を表す主語名詞句が、中間構文で現れることがあるため、(17) の (iv) の項に関する制限に、[Instrument] と [Location] を加える。典型的な中間構文に関する語彙記載項 (6) では主語名詞句について指定しなかったが、例外的な中間構文における主語名詞句については (17) のように指定せざるを得ない。

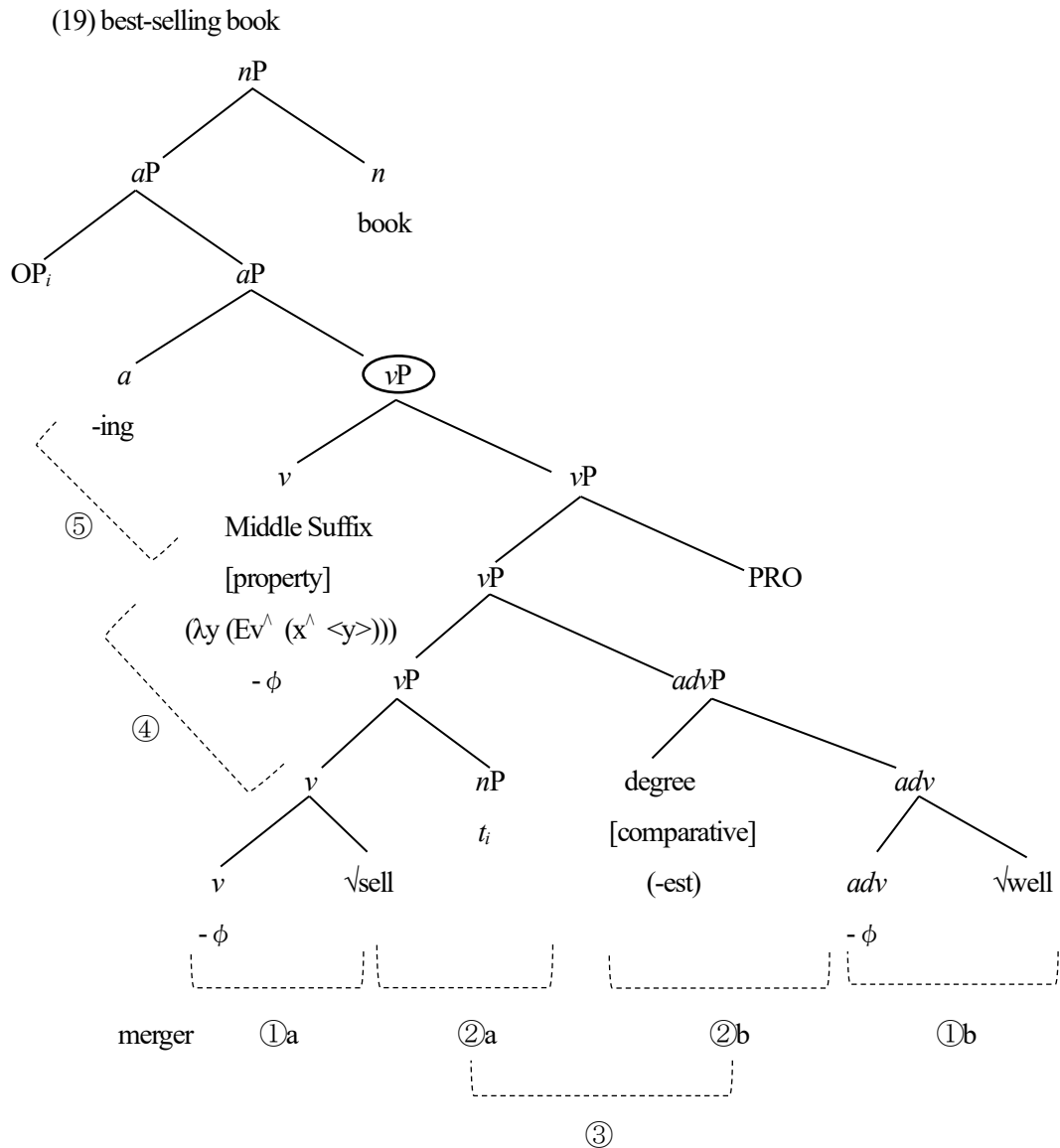
以上のように、中間接辞の挿入条件を緩和させることによって、逸脱する諸現象を語彙記載項で統一的に捉えることができる。分散形態論的視点により、典型的な中間構文、及び、周辺的な当該構文に関する生成方法を説明できる。次節では、(5) の構造を用いて、英語の中間構文由来複合語の派生について提案する。

#### 4.2.2 英語の中間複合語の形成

4.2.1 節の分散形態論の枠組みによる中間構文の派生構造は、当該構文の複合語にも適用で

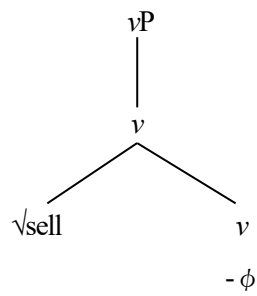
きる。本節では、best-selling のような複合形容詞と best-seller のような複合名詞を用いて、派生構造を考えていく。

最初に、best-selling book を例として、中間動詞の複合語の基底構造を (19) のように提案する。

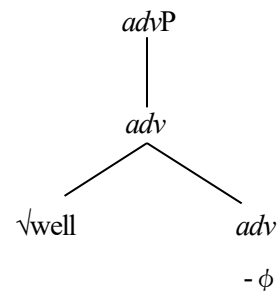


中間構文の構造 (5) と、関連する複合語の構造 (19) は、中核構造 ((19) の丸で囲まれた vP) を共有する点に注意したい。本構造が形態部門に送られると、合併 (merger) を中心とする操作が適用されて、語形を形成していく。合併とは、枝分かれ構造で隣接した構成素を合わせて、ゼロレベルの範疇を作るという操作である。①から⑤で示したように、隣り合う要素同士に合併が適用される。最初に、①、②、③で合併が適用された結果を以下に示す。

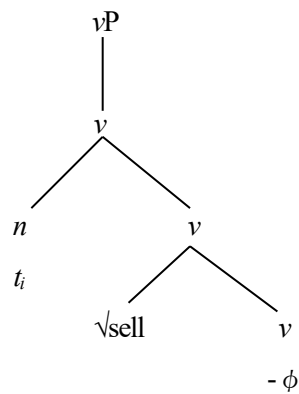
①a



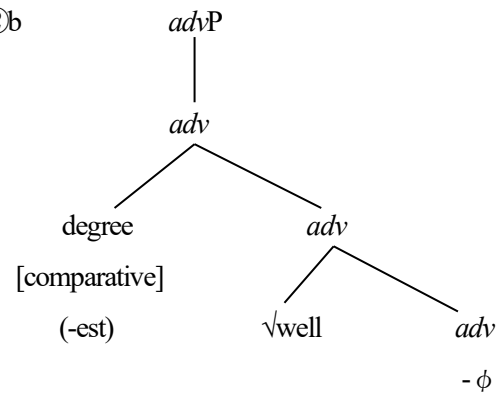
①b



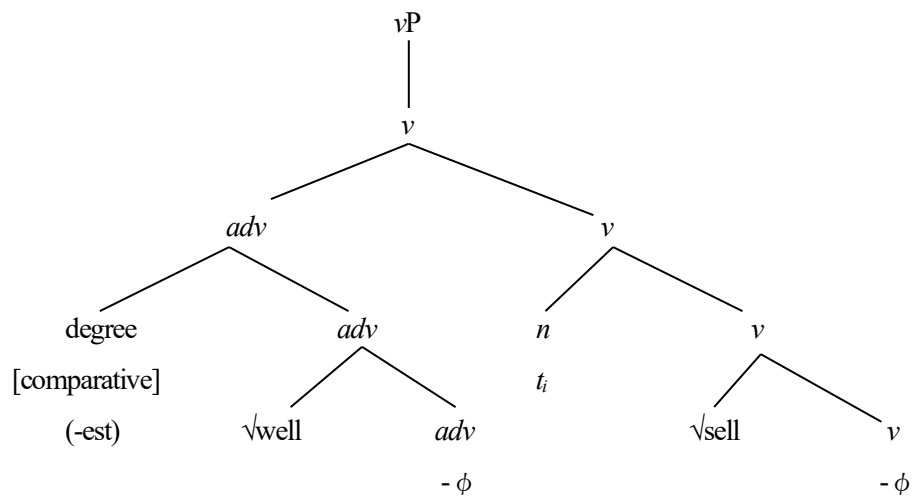
②a



②b



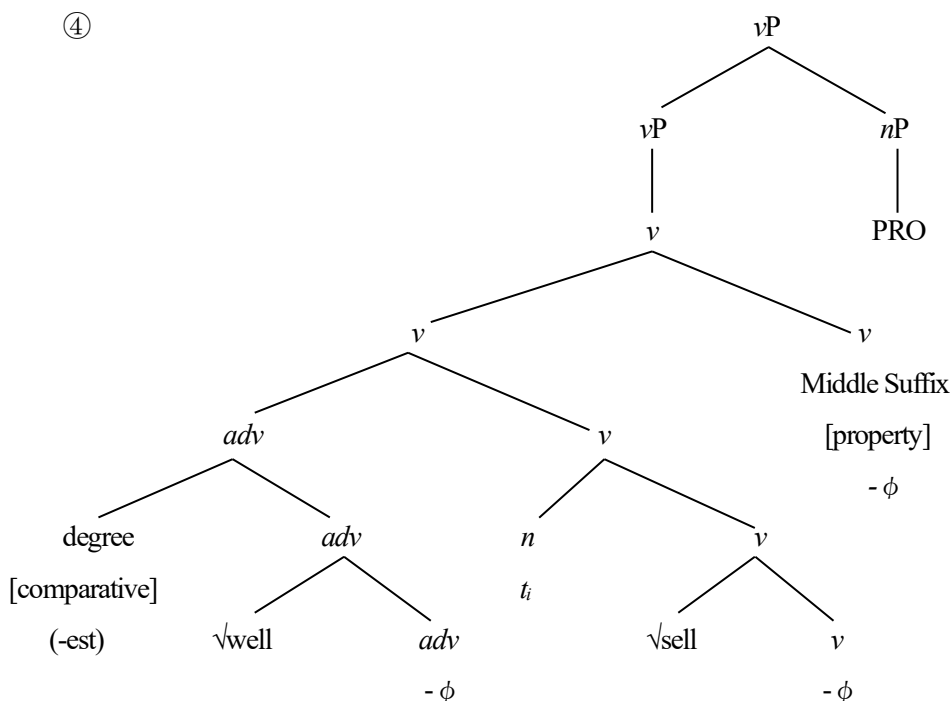
③



まず、①a と①b の合併により、動詞 *sell* と副詞 *well* というゼロレベルの語をそれぞれで作る。(19) の *v* (- $\phi$ ) と  $\sqrt{\text{sell}}$  が隣り合っているため、それらを合併させて *v* という語を作る。同様に、*adv* (- $\phi$ ) と  $\sqrt{\text{well}}$  が隣り合っているため、それらを合併させて *adv* という語を作る。次に、(19) の②a と②b の合併が起こる。②a については、①a でできた *v* と内項の名詞 *t* を合併させ、②a となる。その一方で、副詞 *well* は②b の時点で最上級の *best* となる。副詞 *best* については、Jackendoff (1977: 150) と Emonds (2000: 126) が示した比較級表現の統語構造に

基づき、②bのように仮定している。次に、②aと②bで形成されたもの同士が(19)の構造で隣り合うため、合併が生じ、上記③のような構造になる。従って、best-sell という動詞 *v* ができる。

その後、(19)の④の部分で合併が起き、その結果は次のようになる。

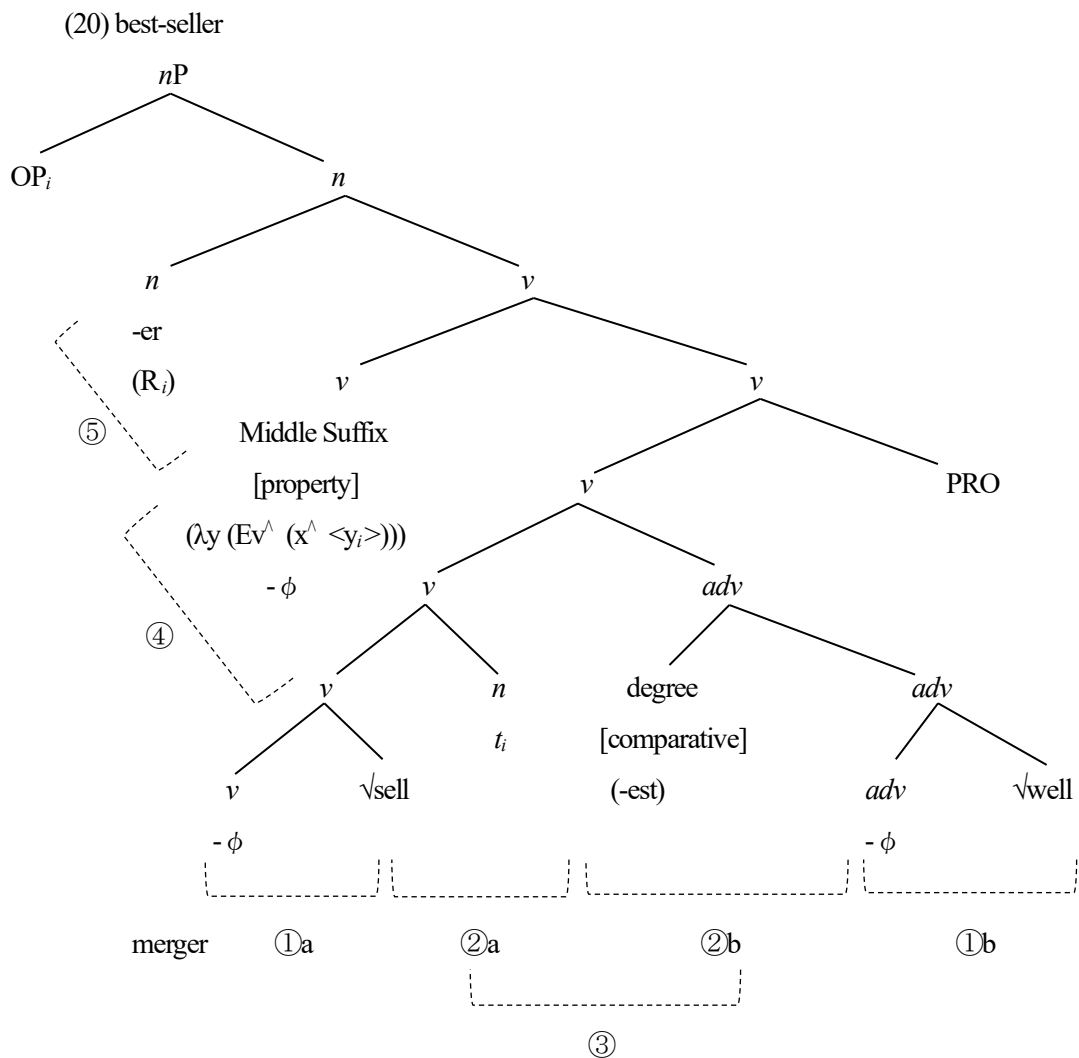


④で図示されたように、PROは遠い位置にあるため、次の過程では省略される<sup>48)</sup>。

④で形成された特性解釈を持つ動詞 best-sell に、(19)の⑤の部分で合併が適用される。その結果、⑤が生み出される。

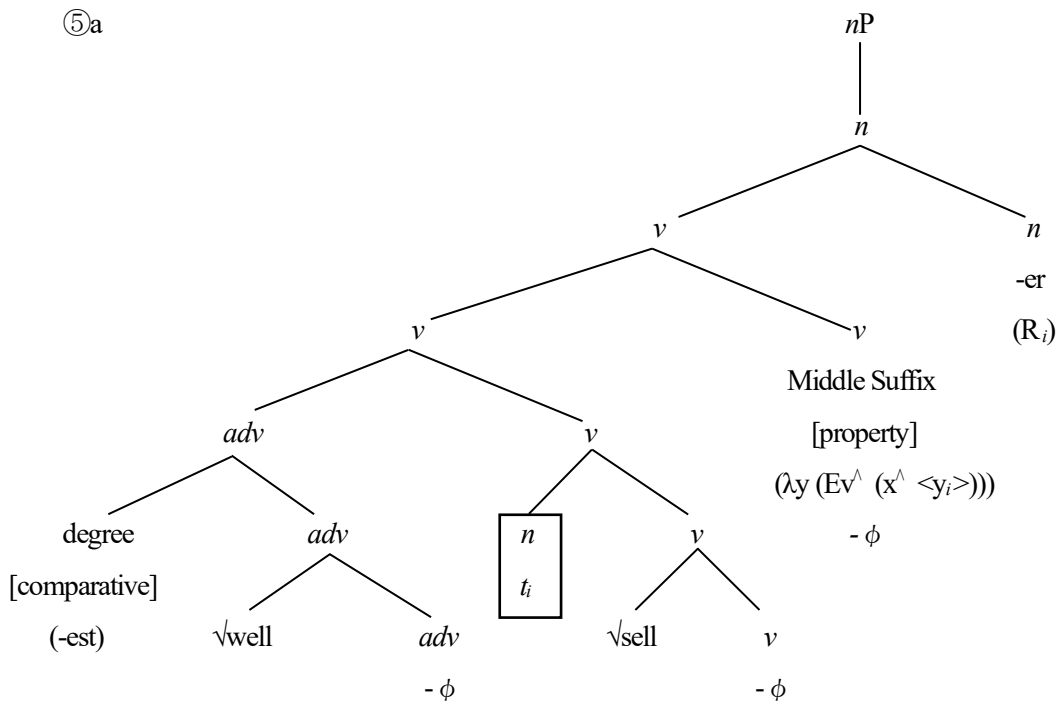
<sup>48)</sup> 実際には、④にある PRO も痕跡を残して移動すると考えられるが、PRO は構造上遠い位置にあるため、分散形態論では省略される。





接尾辞-erは、動作主 (agent) を表すものと主題 (theme) を表すものに二分される。中間構文に係わるものは、後者に該当する。Lieber (2005: 404) によると、主題接尾辞-erの外項 (Reference argument, R項) は、主題を表し、基体動詞の内項を束縛 (bind) する。例えば、The ship sinks easilyのような中間構文の場合、その中間動詞 sinkは外項 (x) を持つが、接尾辞-erはこの外項 xを束縛する。中間構文の外項は、動作主ではなく主題であるため、その項を束縛し、当該構文から形成される複合名詞 sinkerは、「沈める人」という動作主ではなく「船のような沈められるもの」という主題を表す。かくして、接尾辞-erの外項は、基体動詞の内項を束縛し、主題を表す-er形複合名詞が形成される。Lieber (2005: 384) によると、接尾辞-erは [+material, dynamic ([ ], <base>)] という語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS) を持つ。この LCSにある [ ]の中に、外項となる指示物 (reference, R)が入る。但し、この語彙概念構造をそのまま使うと整合しない。そこで、上述のLieber(2005)の考えを活かし、「[-agent]の-erの外項は、基体動詞の内項を束縛する」という規定を採用する。(20)で接尾辞-erの項構造を、n (R<sub>i</sub>)と設定し、中間接辞 (Middle Suffix)の特性解釈を表す項構造

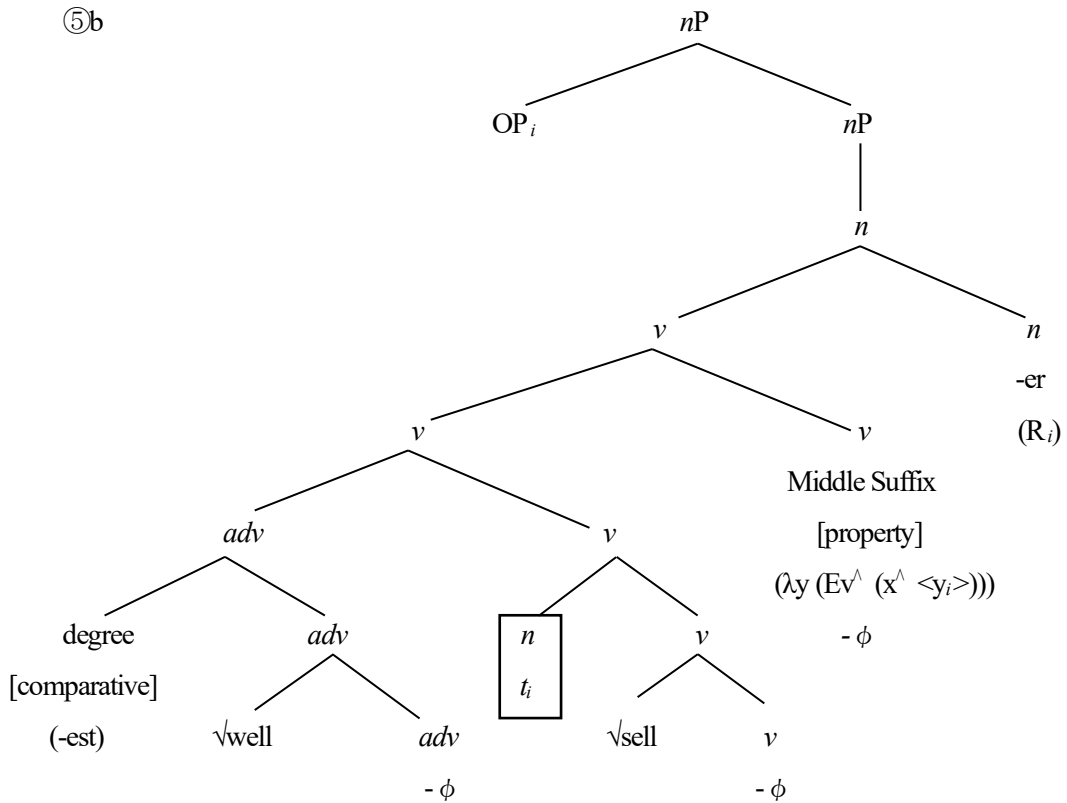
( $\lambda y (Ev^{\wedge} (x^{\wedge} \langle y_i \rangle))$ ) にある外項  $y_i$  と同一指標を持つということを示す。これより、動詞  $v$  の *sell* の目的語、すなわち、移動した  $OP_i$  が外項  $y_i$ 、そして  $n(R_i)$  と同じものを指すということが捉えられる。複合語形成の時は、一度内項は削除されるが、接尾辞 *-er* が主題項を束縛するため、*book* のような主題の意味役割を持つ内項が、*OP* と同一指標により、リンクされる。基底構造で全体に意味を解釈するため、(20) の構造が示すのは「よく売れるもの (本)」となる。上記の複合形容詞 *best-selling* の派生と同様に、①, ②, ③, ④までの合併が適用される。(20) の⑤の合併により、⑤a の構造が派生される。



この時点で、四角で囲まれた痕跡  $n(t_i)$  が削除され、⑤b が派生される。



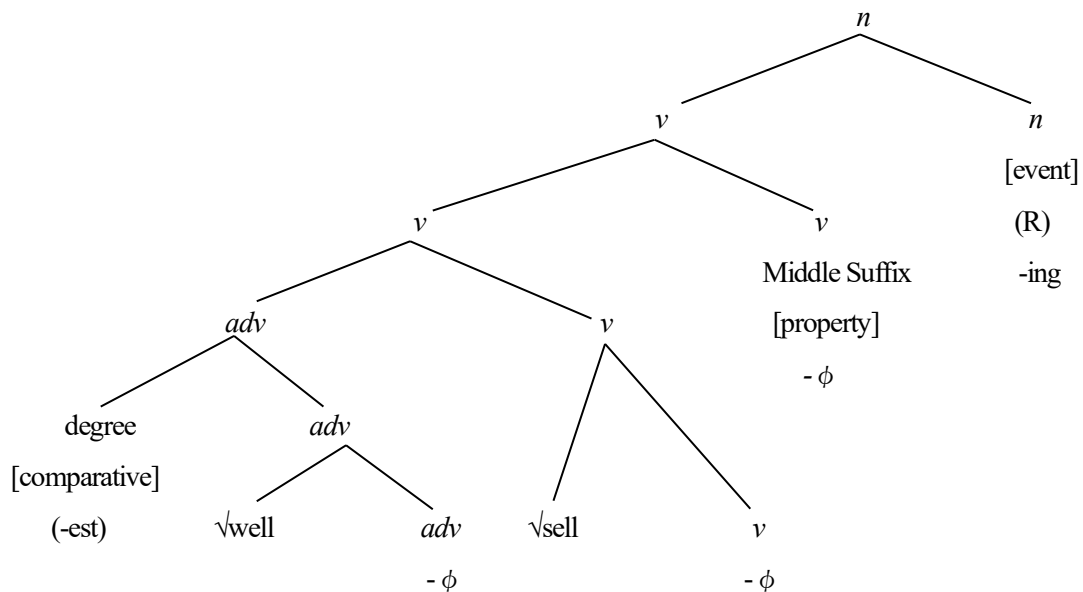
⑤b



接尾辞-erは通常、動詞の外項を束縛するが、主題項を束縛することも可能である、と Lieber (2005:404) は論じている。例えば、複合名詞 *looker* は被動者 (patient) を表し、「見られるもの」となる。その他にも、*loaner* (代車) や *keeper* (解禁後の魚) というような複合名詞もあるが、これらは接尾辞-erの意味拡張 (extension) である、と Lieber (2005: 404-406) は述べており、主題を示す-er形複合名詞が非生産的であることがわかる。3.1.3 節で述べたように、「中間構文由来の-er形複合名詞は、事実観察でもあまり見られない」という事実と「主題項を束縛する場合は非常に制限される」という理論が合致することとなる。

ここで、*best-selling* の複合名詞形について考える。3.1.3 節で示した *best-selling* のような形容詞については、比較的様々なタイプが見られた。ところが、「よく売れること」という解釈を持つような複合名詞 *best-selling* は BNC では見出されず、容認されないと思われる。その理由を、以下に簡潔に示す。複合名詞 *best-selling* の関連する表層構造は、(21) のようになると考えられる。形成方法は、複合形容詞 *best-selling* のものと同じである。一連の合併操作が行われた後の構造を (21) に示す。

(21) \*<sub>N</sub>[best-selling]



(21) で示したように、間接辞 (Middle Suffix) が付加されることで *best-sell* という動詞は特性 (property) 解釈を持つ。その上に「～すること」というような事象 (event) の要素が付加されると、意味的に衝突が生じる。例えば、\**the book's best-selling* を言い換えると、‘*the process in which something is read by someone*’である。従って、*best-selling* は過程 (process) を表す名詞的語句となり、事象を表せない。ところで、派生名詞は、事象を表す名詞 (event nominals) と結果を表す名詞 (result nominals) という2つの名詞表現になりうる。例えば、動詞 *donate* の派生名詞は *donation* であるが、「寄付すること」という事象を表す場合もあれば、「寄付金」という結果を表す場合の二通りの意味がある。事象の結果としての物 (存在物) を表す場合、中間表現が表す「特性」と意味的に衝突しない。例えば、‘*something which is sold best by someone*’のように *best-selling* が「よく売れた結果としての物」を表すことも考えられる。一方、*-ing* 形名詞類は、一般に結果を表す名詞になれないことはよく知られている。*selling* が「売れるもの」とはならないように、*folding* や *crashing* も結果名詞にはならない。但し、*reading* のように語彙化されたものについては除くこととする。中間動詞の名詞形が、一般に *-ing* 形を取ること、及び、中間構文が非事象を表すことから、中間動詞の名詞形は一般に排除されることになる。

#### 4.2.3 日本語の中間構文の派生

García de la Maza (2011: 170) が示すように、英語の中間構文の典型は、4つの特徴を備えている。1つ目は、主語の固有の性質が見られるということである。2つ目は、表現されない動作主、つまり潜在的動作主があるということである。3つ目は、基底動詞が表す行為・過程の容易さを表すということである。4つ目は、法性に関わるということである。この4点は、

本稿の第2章でも概観した。日本語においても、上述の特徴を備えているものは、中間構文に相当すると考えられる。本節では、4.2.1節で提示した英語の中間構文の生成方法を活かし、日本語の中間構文の派生についても分散形態論の枠組みで説明できることを提案する。

本節では、(22) と (23) の2通りの中間構文について考える。

- (22) a. 日本車はよく売れる。
- b. 銅板は簡単に曲がる。
- (23) この本は簡単に翻訳できる。

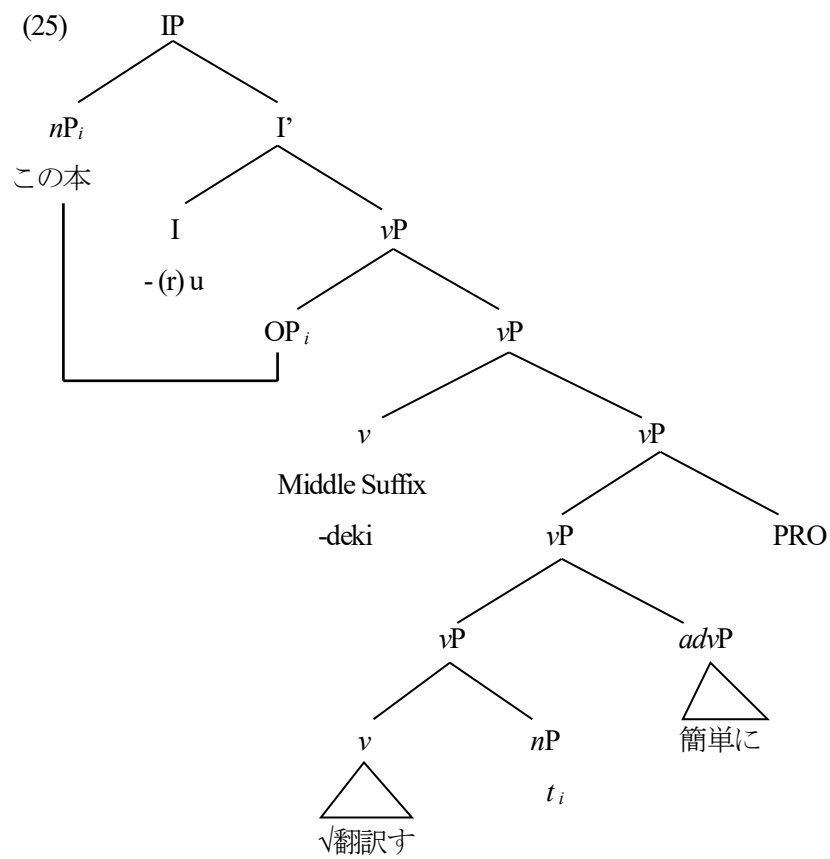
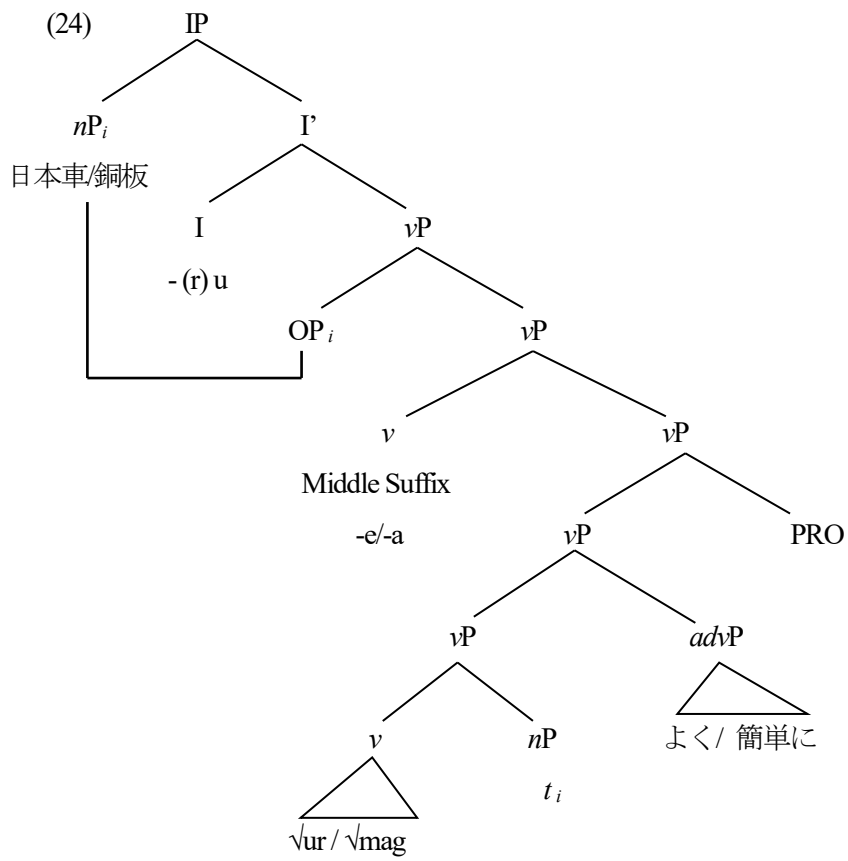
(松瀬・今泉 (2001: 208))

(22) は動詞の語幹が和語であり、「-e, -a」という中間接辞が付加されたパターンである。一方で、(23) は動詞語幹が漢語のもので、「-deki」という中間接辞が付加されたパターンである<sup>49)</sup>。4.2.1節で示した英語の中間構文の基底構造 (5) に従うと、日本語の中間構文の基底構造は (24) と (25) のようになる<sup>50)</sup>。(22) と (23) の深層構造は、原則同じであり、中間接辞の実現形のみ異なると考える。

---

<sup>49)</sup>(23) のタイプも中間構文に属する。日本語の場合、表現に可能形式「られ」(または「でき」)が付加される(松瀬・今泉 (2001:208))。

<sup>50)</sup>(24) と (25) は日本語の表現に関する構造であるが、ルート (√) と接辞を英語表記にした方が分かりやすいため、このように示している。



(24) もしくは (25) のような構造を統語で形成した後、英語と同様に語彙挿入が行われる。中間接辞 *-e/-a* の語彙記載項は (26) のようになり、中間接辞 *-deki* の語彙記載項は (27) のようになると考えられる。

(26) lexical entries of the Middle Suffix *-e/-a*

| (i) internal features | (ii) meaning | (iii) license environments            |
|-----------------------|--------------|---------------------------------------|
| [v] [property]        | 'potential'  | +<v [transitive, native]><br>(+<adv>) |

(27) lexical entries of the Middle Suffix *-deki*

| (i) internal features | (ii) meaning | (iii) license environments                   |
|-----------------------|--------------|--|
| [v] [property]        | 'potential'  | +<v [transitive, Sino-Japanese]><br>(+<adv>) |

日本語の中間構文は英語と同様に、総称性を表し、主語の特性を表す表現である。従って中間接辞が動詞に付加されることで、(26) と (27) も双方とも、(i) の内的素性で示すように、その動詞は [property] の素性を持つ。(ii) の意味について簡潔に説明すると、中間構文は「可能」を表すため、potential という意味が中間接辞に付与される。(26) の接辞 *-e/-a* は和語の他動詞に付加されるため、(iii) の認可環境で [native] と示している。その一方で、(27) の接辞 *-deki* は漢語の他動詞に付加されるため、(iii) の認可環境で [Sino-Japanese] と示している。加えて、日本語の中間構文では英語と異なり、副詞表現が見られない場合もあるため、副詞については任意要素とし、(+<adv>) というように示す。加えて、中間構文で現れる主語名詞句については、(24) と (25) の派生構造より、他動詞の内項に相当し、意味役割は主題 (theme) であることが当然となる。英語と同様、局所性の視点より、(24) あるいは (25) の構造上、中間接辞から遠い位置にある *nP* については (26) と (27) の語彙記載項では指定する必要はない。これより、2.7.1 節で示したように、日本語の中間構文の主語名詞は主題項を表せる。このような挿入環境の下で、中間接辞の語彙挿入が正しく行われ、日本語の中間構文が派生されると考える。

しかしながら、2.7.2 節で紹介した Taguchi (2007) の分析とは反対の主張をすることになる。日本語の中間構文では、直接目的語が移動しないということが Taguchi (2007) の中心的主張であった。Marelj (2004) の分析では、中間構文の主題項を移動させる言語と移動させない言語というように、世界の言語を二分しているが、日本語がどちらの部類に属するのかということは、今後の課題としたい。

ここで、日本語の中間構文由来複合語についての仮定を示す。英語とは違い、日本語の中

間構文の複合化が見られないという顕著な特徴がある。同表現に関連した語としては、例えば、「売れ行きが良い」、「切れ味が良い」、「使い勝手が良い」というような表現があるが、これらは複合語というよりもむしろ、イディオム表現である。これらの表現が存在するために、中間動詞由来の複合語が阻止 (blocking) されると考えられる。阻止とは、ある形が存在するために他の形の出現が妨げられるという現象である、と Aronoff(1976) は説明する。例えば、形容詞 *curious* や *specious* に接尾辞 *-ity* を付加して、*curiosity* や *speciosity* を作ることができるが、形容詞 *glory* にその接尾辞を付加すると、\**gloriosity* となる。これは、単純名詞 *glory* が既に存在し、その単純名詞が形容詞への接尾辞 *-ity* の付加を阻止しているためである。阻止という現象の背景としては、「必要な語のみを新たに作り、余分な語は作らない」という節約の原則がある (森田 (2003:107))。このように考えると、「よく売れる」という合成的な中間複合語を形成する前に「売れ行きが良い」というこれと同義で語彙的なイディオム表現が既存するため、余分な表現は作らないという原則によって、中間複合語の形成が阻止されるように思われる。それに加え、日本語の中間構文と英語の中間構文の大きな違いとしては、中間接辞が明示化されているか否かに違いがあるが、この特徴が、日本語の中間構文の複合化ができないことと関連しているのではないかということも考えられる。日本語の中間構文の複合語に関する詳細な分析は、今後の課題としたい。

#### 4.3 まとめ

4.2 節では、英語の中間構文とその由来複合語、及び日本語の中間構文の派生について分散形態論の枠組みで統一的に説明できるということを示した。英語の中間構文の基底構造が、中間構文、及び、中間複合語の双方の形成にも活かすことができ、統語—形態のインターフェイスに課せられる一般的制約に従って、両表現が生成される。それに加え、英語のみならず日本語の中間構文についても同様に説明が可能であることを示唆した。

しかしながら、今後の課題として残されている点もある。まず、*best-selling* 類の名詞形が見られない事実をどのように説明するのかということが、現時点では明らかにできていない。それに加えて、中間構文の形成が可能である動詞の中でも、複合語ができないパターンがある。それについても、分散形態論的にどのようにして説明するのかということも今後考えたい。また、日本語の中間構文の複合化ができないことについても明らかにできなかったため、今後の研究課題としたい。

## 第5章 結論

分散形態論的考えを用いて、中間構文の生成メカニズムを説明することができる。分散形態論とは、複雑語の情報を、統語・形態・意味・音韻という部門に適切に分散させながら処理し、語を形成するというものである。この分散形態論的視点から、中間構文の派生を説明することができる。まずは統語で構造が作られた後、その構造が形態部門に送られて、語彙挿入が起こる。英語の中間構文の基底構造には、音形を持たない中間接辞があると考えられる。この考えは、日本語の中間接辞 *-e/-a* 及び *-deki* に相当し、フランス語のような他言語でもそのような接辞が明示されることから、通言語的に中間接辞が認められるように思える。この接辞の作用により、当該構文は特性解釈を与えることとなり、他動詞から自動詞への態変換と同時に、外項の抑圧と内項の移動及び外在化が起こる。その後で、語彙挿入が起こり、中間接辞の挿入により、特性の解釈と同時に可能の解釈を持つことができる。そして、中間接辞の語彙記載項の条件に合う動詞や副詞、主語名詞が統語的に挿入される。典型的な中間構文については、他動詞で動作を表すものや状態変化を表すような動詞が入り、副詞についても様態や程度、そして結果を表すような表現が挿入され、主語位置の内項については、主題の意味役割を持つ名詞句が該当することになる。これより、中間構文に必要な特性としては、主語名詞が内項であるということ、その主語名詞の特性の解釈ができるということ、副詞表現及び修飾表現が見られるということ、そして、潜在的動作主が含意されるということが挙げられる。このような枠組みで、中間構文の形式と意味が確立されると考えられる。擬似中間構文という例外的なタイプについては、その典型的な中間構文に適用される語彙記載項とは異なる条件下で、語彙挿入が行われる。例外的なタイプの規則により、当該構文は過去形などの時制を持つような特性解釈が得られ、典型的なタイプよりも緩められる制限により、様々な動詞も挿入され、副詞については動作主指向の表現が関与できる。そして、例外的中間構文の主語位置に置かれる内項については、主題の他にも道具や場所を表す名詞句が該当する。これより、中間接辞の挿入条件を緩和させることによって、擬似中間構文の説明もでき、典型的なタイプと逸脱するタイプの双方を統一的に捉えることができる。

従来の先行研究では、統語的・語彙的・意味的・形態的アプローチで当該構文の派生メカニズムについて考えられてきたが、1つの部門に絞って説明することができず、どの部門でも問題点が見られた。中間構文は意味的・統語的・語彙的・語用論的にも様々な特徴が多く見られるため、1つの部門に絞って特性や派生メカニズムについて説明することが難しい。これに対して、語の情報を様々な部門に分散させて、適切に処理するという分散形態論的視点であれば、中間構文の特性や派生メカニズムについて統一的に説明できる。すなわち、本稿で提案した分散形態論的派生メカニズムは、英語の中間構文だけでなく、*best-selling* や *best-seller* のような当該構文由来の複合語や日本語の中間構文についても同一方法で生成される、と論じることができる。

しかしながら、本稿で明らかにできなかった点や今後の研究課題とする点も幾つかある。

1 つめは、中間接辞の補部に含まれる動詞の制限について、詳細に調査できなかったことである。本稿で提案した中間接辞の語彙記載項について、事実観察を通して収集した例文と非文法的な当該構文と照らし合わせ、修正していくことを今後の課題としたい。2 つめは、擬似中間構文の例をさらに収集し、例外的中間構文の半規則性を同定することにある。3 つめは、best-selling の名詞形が容認不可の理由について明らかにできなかったため、引き続き事実観察を通して検証していきたい。4 つめは、中間構文の形成が可能である動詞類の中でも、複合語ができないケースがあるということが事実観察よりわかったが、分散形態論ではこのことをどのように処理するのか今後考えていきたい。5 つめは、日英の中間構文の詳細な比較を課題とする。とりわけ、日本語の中間構文の複合語がなぜ見られないのかということ、理論を通して明らかにしたい。

本稿では、中間構文の形式、つまり統語と形態、そして意味に焦点を当てて、分析してきた。語用論的特性については第2章の先行研究で簡潔に紹介したが、どのような時に当該表現が使われやすいのかという問題にも取り組んでいく。



## 参考文献

- 阿部泰明 (1991) 『この本はよく売れる』 中間構文に関する一考察 『言語理論と日本語教育の相互活性化』 76-89, 津田日本語教育センター.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bruening, Benjamin (2014) “Word Formation is Syntactic: Adjectival Passives in English,” *Natural Language and Linguistic Theory* 32, Part 2, 363-422.
- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) “When Nouns Surface as Verbs,” *Language* Volume 55, Number 4, 767-811.
- Emonds, Joseph E. (2000) *Lexicon and Grammar: The English Syntacticon*, Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Fagan, Sarah M. B. (1988) “The English Middle,” *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, Sarah M. B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane (1985) “Adverbs in Agentless Actives and Passives,” *CLS* 21, Part 2, 21-31.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Hertz (1989) *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*, Indiana University Linguistics Club Publications, Bloomington, Indiana.
- 藤田耕司・松本マスミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』 研究社 東京.
- García de la Maza, Casilda (2011) “The Semantics of English Middles and Pseudo-middles,” *Morphosyntactic Alternations in English*, ed. by Pilar Guerrero Medina, 161-181, Equinox, London.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hale, Ken and Samuel Keyser (1987) “A View from the Middle,” *Lexicon Project Working Papers* 10, 1-64, Center for Cognitive Science, MIT.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1994) “Some Key Features of Distributed Morphology,” *MIT Working Papers in Linguistics* 21, 275-288.
- 原口庄輔・中村 捷 (1996) 『チョムスキー理論辞典』 研究社出版 東京.
- Jackendoff, Ray (1977) *X'-syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jespersen, Otto (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles Part III*, George Allen and Unwin, London.
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- 影山太郎 (1998) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版 東京.
- 影山太郎 (2004) 「中間構文における語彙概念構造と特質構造の相互作用」 関西学院大学紀要『英米文学』第48巻1/2号, 117-133.

- Kageyama, Taro (2006) "Property Description as a Voice Phenomenon," *Voice and Grammatical Relations*, eds. by Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama, 85-114, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- 影山太郎 (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 大修館書店 東京.
- 萱原雅弘 (2006) 「中間構文に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第46号, 73-82.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Lieber, Rochelle (1983) "Argument Linking and Compounds in English," *Linguistic Inquiry* 14, 251-285.
- Lieber, Rochelle (2005) "English Word-Formation Processes: Observations, Issues, and Thoughts on Future Research," *Handbook of Word-formation*, eds. by Pavol Štekauer and Rochelle Lieber, 375-427, Springer, Dordrecht.
- Marelj, Marijana (2004) *Middles and Argument Structure across Languages*, Ph.D. dissertation, Netherlands Graduate School of Linguistics.
- 松瀬育子・今泉志奈子 (2001) 「中間構文」『日英対照 動詞の意味と構文』 影山太郎 (編) 184-211 大修館書店 東京.
- 森田順也 (2003) 『語の構造と意味』 昇学出版 名古屋.
- 森田順也 (2005) 「派生名詞表現の分析—『分散形態論』的見方—」『現代形態論の潮流』 大石強・西原哲雄・豊島庸二 (編) 35-54 くろしお出版 東京.
- Morita, Junya (2019) "An Analysis of *Self*-compounds within an Antilexicalism Framework," 『金城学院大学論集』人文科学編 第16巻第1号, 110-119.
- Morita, Junya (2020) "A Corpus-Based Study of Derivational Morphology and Its Theoretical Implications," *Proceedings of the Fourth International Conference Computational Linguistics in Bulgaria* 20, 8-16.
- 中島平三 (2001) 『[[最新] 英語構文事典』 大修館書店 東京.
- 中村 捷・金子義明・菊地 朗 (2001) 『生成文法の新展開—ミニマリスト・プログラム—』 研究社出版 東京.
- 中村 捷・金子義明 (2002) 『英語の主要構文』 研究社 東京.
- 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄 (2015) 『最新英語学・言語学用語辞典』 開拓社 東京.
- 大庭幸男 (2017) 『英語構文を探求する』 開拓社 東京.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版 東京.
- Oshita, Hiroyuki (1994) "Argument Structure Template and Formation of English Deverbal Adjectives,"

- MIT Working Papers in Linguistics* 23, 247-265.
- Randall, Janet H. (2010) *Linking: The Geometry of Argument Structure*, Springer, London.
- Rapoport, T. R. (1999) "The English Middle and Agentivity," *Linguistic Inquiry* 30, 147-155.
- Rizzi, Luigi (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *Linguistic Inquiry* 17, 501-557.
- Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris Publications, Dordrecht.
- Roeper, Thomas and Muffy E. A. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds," *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Shibatani, Masayoshi (1985) "Passives and Related Constructions," *Language* 64, 821-848.
- Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Taguchi, Shigeki (2007) "Japanese Middles and Nonmovement," *CLS* 43, 243-253.
- Tenny, Carol (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Doctorial dissertation, MIT.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』 くろしお出版 東京.
- Tsujimura, Natsuko (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*, Blackwell Publishers, Massachusetts, Oxford.
- van Oosten, Jeanne (1977) "Subjects and Agenthood in English," *CLS* 13, 459 - 471.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, New York.
- Vendler, Zeno (1984) "Adverbs of Action," *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*, eds. by David Testen, Veena Mishra and Joseph Drogo, 297-307, Chicago Linguistic Society, Chicago.
- Visser, Fredericus Theodorus (1984) *An Historical Syntax of the English Language Part 1*, E. J. Brill, Leiden.
- 安井 稔 (1996) 『コンサイス英文法辞典』 三省堂 東京.
- 安井 稔 (2017) 『納得のゆく英文解釈』 開拓社 東京.

コーパス

British National Corpus (BYU-BNC): <http://corpus.byu.edu/bnc/>

## 謝辞

本博士論文は、2015年4月から2021年3月までの約6年間に渡って、筆者が金城学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程英文学専攻在院中に行ってきた研究成果をまとめたものです。

主指導教員の森田順也教授には、本学文学部英語英米文化学科入学時から博士論文の完成に至るまでの12年間という長い間、ご指導いただき、大変お世話になりました。ご指導の際には、研究発展に向けて多くの重要なヒントをご提供いただいたり、事実観察で発見した例文がいかにより重要なのかということや“step by step”で研究を進めていくことの大切さなど、多くのことを教えていただきました。筆者は博士課程に在学しながら本学で幾つかの仕事をしていくこととなり、博士論文を執筆できるのかどうか森田先生には大変ご心配をおかけしましたが、ご多忙の中、口頭発表や論文執筆に向けて常に温かくご指導いただき、筆者にとって研究しやすい雰囲気をつくってくださいました。そして、2020年度は新型コロナウイルスの影響により、一時期は論文指導においてもオンラインによる遠隔指導となり、お互い慣れない環境にも関わらず、森田先生にはパソコンの画面を通して懸命にご指導いただきました。対面での指導が可能になった後も、ご多忙の中、研究室で何度も何度もお時間をいただきました。先生のご指導のおかげで、博士論文を完成させることができました。森田先生に、心より厚く御礼申し上げます。

副指導教員の高野祐二教授には、研究面のみならず多くのご助言や激励の言葉をいただきました。高野先生にも、筆者の大学在学中から長い間大変お世話になりました。学内でお会いした際にも、温かいお言葉をかけていただき、ご多忙にも関わらず、筆者の研究状況を常に気にかけてくださいました。先生がかけてくださるお言葉で自信が持てました。博士論文のご指導では、研究の詳細まで貴重なコメントをいただき、新たな研究課題を見つけることもできました。加えて、筆者が大学4年次に卒業後の進路に迷っていた中、大学院への道を勧めていただきました。大学院で多くの貴重な経験ができました。高野先生に、心より御礼申し上げます。

副査の中川美和准教授には、本論文の仕上げに向けて、日本語の中間構文に関する貴重なご意見をいただきました。日本語の中間構文に関与できる動詞についてご指摘いただき、それに加えて日本語の中間複合語の例も挙げながら、温かくご教示いただきました。中川先生に、心より感謝しております。

Matthew A. Taylor 教授と Daniel L. Paller 講師には、インフォーマント調査にご協力いただきました。先生方にはご多忙の中、英語母語話者インフォーマントとして常に快く引き受けてくださいました。先生方による例文の容認可能度のご判断と貴重なコメントにより、先行分析の妥当性や反例を見つけることができ、本論文で有意義な研究結果を提示することができました。Taylor 先生と Paller 先生に、心より御礼申し上げます。

また、本学大学院英文学専攻の先生方より、筆者の研究状況を気にかけてくださいました。

分野の垣根を越えて、長い間温かく見守りつつ励ましてくださった全ての先生方に感謝申し上げます。

さらに、文献収集の際に迅速にご対応いただきました本学図書館の司書の方々、日頃から大変お世話になっております本学大学院実務助手の上條郷子様、多くの貴重なご助言をくださった本学大学院修了生の先輩方、在院中に出会えた院生の皆様、言語センター職員の方々を始め本学職員の皆様、論文執筆に向けて励ましの言葉をくださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。

そして何よりも、長年温かく見守り続け応援してくれた家族に、心から感謝します。執筆に集中できるよう環境を整えてくれたこと、また、執筆の息抜きとなるよう明るく楽しい雰囲気をつくってくれたことなど、様々な形で支えてくれました。おかげで、論文執筆期間中は、最後まで元気にやり遂げることができました。本当にありがとうございました。

本博士論文は、筆者が金城学院大学大学院で学んできたことの集大成です。これまで口頭発表や研究論文を通して自分が残してきた結果がたとえ小さなものであっても、その積み重ねが全て本論文に活かしました。長く研究と向き合ったからこそ判明したこともあり、「点と点が結びついていく瞬間を味わうこと」が、研究の醍醐味だと気づきました。また上記のとおり、筆者は院生として在籍しながら、本学の非常勤講師と非常勤助教の仕事も並行して研究活動をしていくこととなり、その両立が大変でしたが、論文を書き上げたい一心で研究を続け、多くの方々に支えられながら、博士論文を完成させることができました。この場をお借りし、改めて心より感謝申し上げます。

博士論文執筆という目標を達成し、この経験によって自分自身とも向き合いながら挑戦・成長できたと感じております。大学院での学びは、筆者にとってかけがえのないものとなりました。そして筆者にとって、大学院とは自分自身が進むべき道を示してくれた大切な場所です。

2021年3月  
柘植 美波